

動乱の銀河～80年後の英雄伝説～

Kzhiro

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類史上稀に見る常勝の大英雄、ラインハルト・フォン・ローエングラムによつて人
類統一政権という概念が復活して80年。

しかし天才の足元で生じ始めた病理は時を経ることで勢いを増し、ついには銀河を脅
かすに至つた。

経済格差、過激思想の勃興、テロリズム、疫病、セクショナリズム、そして破滅的な
不況という現実は、歴史を再び伝説へと帰し、全ての人民がその潮流に血飛沫を流しな
がら巻き込まれる。

ローエングラム朝銀河帝国とバーラト自治共和国。過激思想に汚染されたこの二つ

は、80年の時を経て再び戦の火蓋を切る。

勝つのは帝国か、共和国か。

願わくばこれが輪廻ではなく、螺旋でありますように…

この小説はらいとすたつフルール2015年改訂版に従つて作成しています。

目次

64

血の聖靈降誕祭

第一部 プレ・ステージ

歴史のページが捲られて

嵐の前の突風 バーラト自治共和国の

或る提督の後悔

場合 嶺の前の突風 ローエングラム朝銀河

張り子の部隊と司令官

帝国の場合 嶺の前の突風 ローエングラム朝銀河

新参謀長就任

樂屋裏の英雄の卵 共和国編

エル・ファシルにて

樂屋裏の英雄の卵 帝国編

蠢く者たち

動き出す世界 共和国編

我らがための海賊人生よ

動き出す世界 帝国編

第三部 急加速する世界

水面下の共同戦線

882年度の賭け

終わりの始まり

麗かな春の日に

第二部 スタート・ダッシュ

クリーニング・オブ・デモクラシー

53 45 35 28 18 9

170 161 153

143 134 126 117 106 97 84 74

ロスジエーンのチエスゲーム |

テルヌーゼン進駐	1								
テルヌーゼン進駐	2								
テルヌーゼン進駐	3								
テルヌーゼン進駐	4								
薔薇のオーデインにて									
フランツ1世の結婚狂想曲									
予感の秋									
リツテンハイムの騎行	1								
リツテンハイムの騎行	2								

267 257 248 238 227 216 207 197 187 178

第一部 プレ・ステージ

嵐の前の突風 バーラト自治共和国の場合

胃がムカムカしてきた。

ローエングラム朝銀河帝国の属領であるバーラト自治共和国星系代議院の議員であり、今や入り込んできた過激派に食い荒らされている与党、八月人民党所属の議員であるパーザエル・ブルガーニンは、目の前で展開されているウエンリースモ^{ウエンリースモ}主義のメンシェヴィキ同盟の議員に詰られる同じ党の議員を見ながら、そう思つた。

国父ヤン・ウェンリーの遺志を受け継いだ革命の後継者ユリアン・ミンツがオリオン腕から友の遺言を律儀に守るために大軍を率いてやつてきたラインハルト帝との妥協の末に生まれたバーラト自治共和国が国父の名を騙る過激派に乗つ取られかけようとは、一体全体誰が予想できたのだろうか！

いや、一部のものはいつかこうなるだろうと予想できたかもしない。何ぜバーラト自治共和国が被つた試練は、それを生み出すのに都合が良かつたのだから。

当時幼帝であったアレクサンデル帝の下で国政の主導権を握つた文官たちは容赦なく同盟時代に課せられた多大な賠償金を引き続いて要求したのだ。支払いに一分一秒

でも遅れたらバーミリオンあたりに駐留している帝国艦隊が越境してくるのでバーラト人民の肝は今でも冷えっぱなしである。

さらにその駐留のための費用まで要求していくのだ！お陰で民生や最低限の防衛に回す予算までカツカツになつており、今ではハイネセンボリスの郊外には巨大なスラムが軒を連ねている。

さらにこの国には関税自主権というものが存在しない。あるとしたらそれは帝国政府が握っているのだ。帝国政府は新領土による経済的な支配に危機感を抱いており、これら由来の產品に対して高い関税を定めているので、バーラトの經濟は実質干上がつてしまつた。今やミイラが死んでいるのも分からずに動き回つているのと同然である。

その新領土内でのバーラトの立ち位置も問題だ。バーラトは80年前の大戦で地方、とりわけイゼルローン近辺の最前線の都合を無視した平和主義者や新自由主義者の砦であり、同盟亡き後はこれらの諸星系から程度の大小はあれど冷たい目を向けられていた。とりわけ見捨てられたエル・ファシルではバーラトから来たというだけでリンチに遭う旅行者や労働者が増加する始末だ。

そこに付け込んだのが帝国の情報部門である。彼らはことあるごとに工作員を送り込んで反バーラトキヤンペーンを大々的に行うのだ！とりわけ最近は統合派だがなんだか知らない派閥の人間がトップに立ち、活動は一層激しさを増している。

バーラトは危機にあり。こういった情勢で立ち上がるのが過激派、ウェンリスタである。

宇宙暦で数えて60年代に勃興した彼らは各々がアッテンボロー提督やグリーンヒル元主席の後継者と勝手に名乗り、国父の放言を勝手に切り貼りして自身の思想の正当性を勝手に担保してくる控えめにいってクソヤロウとも言える人々である。

その思想の内容は無政府主義からルドルフじみた独裁主義、極め付けは地球教じみたカルトまでよりどりみどりである。最近は国父を見殺しにした人類は滅ぶべしとか宣う過激派もウェンリスタと名乗っているが他の派閥は彼らをウェンリスタと認めていない。テロリストであると一貫して主張している。

ともかくである。このような国父と革命の元老たちの思いを踏み碎くような輩が今現在政界にて跋扈しているのである。彼らの顔を一人一人思い返せばはらわたが煮え繰り返り、胃がムカムカして、胸ポケツトに収めてある胃薬に手を…

ブルガーニンはそこで手を止めた。先程メンシェヴィキに所属する自由派と呼ばれる派閥の議員の詰りに、とある議員が立ち上がり答えようとしている様が目に入つたのだ。

メンシェヴィキの対極、ボルシェヴィキ同盟に属するウェンリスモ新体制派、救国自由人民戦線の議員、ウイリアム・ダドリー・シモンズである。

シモンズの有り様はあのトリューニヒトを思わせるようなものであつた。雄弁にして優雅、そして誰よりも苛烈。民主主義者ではないことを除けば、まさにトリューニヒトがこの世に生まれ変わつたのかと思える人物であつた。

「シモンズ！ トリューニヒトの尻尾！ ルドルフ二世！ アルベルト・ミンツ議長が出てくるんだ！ 出てくるな！ とつと失せろ！」

自由派の議員が口汚く彼を罵つた。トリューニヒトがこの国でどのように扱われているかを考えれば、不思議ではなかつた。

「アルベルト・ミンツ議長はどうも持病のてんかんの発作が出たらしくてね。私が議長、そしてボルシェヴィキの全ての議員に代わつて答えよう。」

ブルガーニンが議長席を見ると、俯いてブルブルと小鹿のように震える初老の議長が見てとれた。おそらく今の顔は：

「さて、君は…自由派のコーヴエン君と言つたかな。さつきの態度について色々と言いたいことはあるが…まず言いたいのは『君たちの提案は非現実的なものであり目下実現は無理である』とでも言つたほうが手つ取り早いかな。」

ダドリーは優雅に、コーヴエンのがなり立てるような質問に答えた。

確かにメンシェヴィキの中核、自由派の出す提案はどれも実現するには理想主義的なものばかりである。

「まず…議題である社会保障の拡大についてあるが、ご存知の通り我々は賠償金とその利子、駐留料を払うので手一杯だ。さうにご存知だと思うが帝国全土では不況の嵐が吹き荒れている。こんな状況では自由派の意見はまず絵に描いた餅を出すようなものであると言いたい。」

「ならシモンズ！てめえらボルシエヴィキに何か対案でもあるのか！」

メンシェヴィキ側議席の別の角度から怒声がシモンズに向けて飛んできた。コーエンと並んで自由派の最左翼であるフーリエ議員から発せられたものであつた。

「それについてはある、とでも答えておこう。結論を言つて仕舞えば我々救国自由人民戦線の経済構想はユリアン・ミンツの理想である民主主義の砦を維持するための、今の不安定な帝国経済体制から独立した自給自足経済体制の確立である、ということだ。」

自給自足経済体制！その一言でメンシェヴィキのみならずボリシエヴィキの諸派からも驚きの声が次々と上がった。

確かにバーラトの経済体制はその誕生からして帝国経済の影響を逃れられぬ体制である。民主主義の砦と言えば聞こえはいいが砦の周辺の農地や商業地が別の国に握られている状態とでも言えよう。

もしもシモンズが言うような自給自足体制、独立経済圏を何らかの方法で建設できたとなればバーラトの立場はかつて国父らが望んだ民主主義の砦としての立場を名実ど

もに確立することができ、帝国内においてその立場を確立することができるだろう。あるいはそれ以上を望むこともできる。

だが、どうやつて？回廊側の新領土は親帝国の牙城であるし、バーラトの向こう側と呼ばれる辺境、新規開拓地は未だして貧しいところが多い。

「そのために我々が行わなければならないことはただ一つ、全ての派閥、全ての企業、全ての人民がただ一つの目標のもとに団結しなければならないと一議員として愚行するものである！」

シモンズのこの意見に対し、先程の驚きの声から一転して非難の声が主としてメンシェヴィキの議席から響いた。

「結局のところ貴様の言つているのは全体主義、ルドルフのやつていることと変わりないではないか！」

『せいぜい国家が滅ぶ程度で個人の自由には代えられない』だ！貴様は個人の自由を侵害するつもりか！』

「シモンズ！貴様はここにいる資格はない！即刻出ていけ！」

「そのような独立経済圏などいるか！」

しかしここであまり動じないというのがシモンズの傑物たるところだろう。実のところはあまり彼らのことを気にしてはいなかつたのかかもしれないが。

シモンズは彼に向けられた罵声の数々にも動じずに、肅々と、だが劇的に言葉をその口から紡いだ。

「諸君！勘違いしては困る。これは自由を制限するものではなく最終的に自由を勝ち取る目的により行われるものである！自由とは！確固たる土台こそあつて初めて初めて成立するものである！議会の諸君！我々がこの星系で民主主義に乗つ取り議会を運営しているのは、ひとえにローエングラム家の皇帝から与えられた自由によつてなされたものである！与えられた自由によつて得られたものを見よ！議会では建設的ではない卑しみるための論調が横行し、市街では食うに困る有様ではないか！自由とは！与えられるものではなく、勝ち取るものではないのか！私はバーラトのみならず、銀河全体において自由を与えなければならぬと確信する。そのために！我々は与えられた自由から脱却し！自由を勝ち取らねばならぬ！これはそのための下準備であることを理解してもらいたい！」

シモンズは演説をかますと一呼吸置いて

「自由を勝ち取るために、我々は力を合わせねばならない！自由万歳、民主万歳、革命万歳、そして国父万歳！」

と言葉を締めくくつた。

「そうだ！シモンズに続け！自由万歳！民主万歳！革命万歳！偉大なる国父万歳！」

間を開けずに彼に賛同する声が議場に響き渡つた。ボリシェヴィキに賛同する崇拜派の議席からである。

「…自由万歳！民主万歳！革命万歳！国父万歳！」

「自由万歳！民主万歳！革命万歳！国父万歳！」

続いて正統派の一部、統帥派の一部から歓声が湧き上がり、ついにはボルシェヴィキの全ての議席から万歳の声が湧き上がつた。

一方でメンシェヴィキは何が何だかわからない有様で口をぽかんと開けて呆然としてその有様を見つめていた。

「自由万歳！民主万歳！革命万歳！国父万歳！」

「自由万歳！民主万歳！革命万歳！国父万歳！」

ブルガーニンは一通り普通の声で叫んだ後、胃のムカムカに耐えきれなくなつたのか、胸ポケットから顆粒状の胃薬を取り出し、封を切つて水無しで一気に喉に注ぎ込んだ。

嵐の前の突風 ローエングラム朝銀河帝国の場合

「軟弱な文官どもめ！頑丈なのは脳味噌だけのようだな！」

ローエングラム朝銀河帝国の行政機関である国家維新評議会議長エルンスト・アドルフ・ルーデンドルフ上級大将は、皇宮の官僚の頭でつかちさに愚痴を言いながら、国家維新評議会議長の執務室が置かれたヴエルテーゼ離宮の執務室へと足を運んでいた。

今年で58になりそろそろ息子も大学に入るルーデンドルフは帝国内でやつと軍部の風通しが良くなつた世代、いわゆる「解放された世代」の軍人であるが、その思想は統合派と呼ばれるかつての大帝の栄光を夢見るものであつた。

この統合派という潮流は新帝國暦20年代から40年代にかけて長く軍に在籍する7元帥を始めとした将官の割を食つた将校の間で醸成されてきた親軍的、懷古的な思想を持つた人間たちの派閥である。

ルーデンドルフは若い頃から苦労してきた人間だつた。新領土の企業から土地を奪われ貧困に喘いでいた農家に生まれた彼は、類稀なる才能だけは持つており奨学金を受けながら必死になつて勉強して帝都フェザーンに移設された宇宙軍士官学校に入学した苦学生である。

最初の配属先で彼が見たのは帝国を蝕む「現実」そのものであつた。新領土の資本に侵される帝国本領、それにより貧しさに苦しむ農民、徹底的に搾取する星系総督、露頭に迷う都市労働者、そしていつまでも低い階級であることを強いられた上司たちを、彼はその青い眼でしかと見たのである。

ことここにおいて彼が抱いたのは憤懣である。大帝の改革は踏み躡られ歪まれた結果に対し、大いに憤つたのである。

「腐っている！」

彼はいの一番にそう叫び、軍民間わず同じ志を持つ同志たちとともに統合派帝政運動と呼ばれる政治運動に身を投じ、運動内の最右翼、皇帝独裁の擁護者であると同時に政治批判者として活躍したのである。

ここ20年はそんな彼にとつても、帝国にとつても嘆かわしいと思わざるを得ない、失われた20年と呼ばれる年月であつた。

愚帝こと少年帝ラインハルト2世の勝手極まる統治は分裂状態の帝国に大きな傷痕を残し、彼が若くして崩御した後に訪れたのはさらに不安定な時代であつた。派閥ごと、部署ごとに相争うことは日常茶飯事であり、そのどれもが自身の周辺の利益ばかりを重視して一向にして帝国全土を見ようともしなかつた。閣僚の派閥ごとの食い違いはもはや当たり前の話であり、同じ派閥の人間が二人いるだけでも珍しい状態がしばし

ば発生した。これらが権力闘争を起こすのだからたまつたものではなかつた。

さらに彼らは継承問題にも介入しようとしていた。至尊の座につく資格を持つ九人の皇族を自身の意見を通すための傀儡として醜い権力争いをさせている。ルーデンドルフもまたその一人であつた。

ローエングラム朝の内実はこのような絶望的な状況であつたがさらに絶望的な状況が2年前、新帝国暦79年に旧ブラウンシュヴァイク公爵領で生起した。
未知の奇病の蔓延である。

死亡率は20%、強力な感染力を持ち肺炎に似た症状を引き起こすこのウイルスは帝國中のどのデータベースにも載つていない未知のウイルスであり、もし何らかの手段で拡大したとなれば甚大な被害を及ぼすことは確実視されるものであつた。

当然ながら旧ブラウンシュヴァイク公爵領はしばらく封鎖されることとなつた。しかしそれを許さないものがいた。企業である。

これらの領地で取れる農産物や鉱物資源の販売を引き続き行いたい一部の企業はさまざま手段を講じて旧ブラウンシュヴァイク公爵領に侵入、さまざまな物品を載せてフェザーンやオーディンといった惑星に入港した。

こういった企業努力のおかげで輸入惑星であるフェザーンでは相変わらずの経済行動ができたが、当然ながら新型ウイルスがフェザーンに侵入する結果になつた。

「ヴェスター蘭トの呪い」。いつしかこの新型ウイルスにはそのようなあだ名が纏わりつくようになった。

フェザーンでは新型ウイルスによる症状が各地で報告されることになった。開明派官僚出身の宰相ヴィルヘルム・マリア・マルクスはこの事態を危険視し、一時的な首都封鎖を行おうとしたが派閥の違う閣僚に反対され、結果として断念したことがこの一大事を拡大させ、当時の皇帝ハインリヒ一世の皇太子である幼子ルートヴィヒを失う事態にまで発展した。

これがルーデンドルフの逆鱗に触れた。派閥闘争に溺れ皇族を見殺しにした君側の奸を排除しなければならぬと彼は感染症対策と称して各地の軍に封鎖の続行と不動を命令し、その上で陸上軍の友人フォルベルツク中将らとともに皇宫を襲撃、閣僚らを売国奴として逮捕し、権力闘争に明け暮れる官僚に成り代わって皇帝を輔弼し、太祖獅子大帝の治世を蘇らせるための機関として国家維新評議会を組織したのである。早い話を言つてしまえば彼はクレーテーを起こしたのだ。

そうして彼は緊急事態下の国家において絶対的権力を掌握したのである。自らが軟弱な者どもに代わって国家を導けると信じきつて。

話を戻して、首相官邸に転用されたヴエルテーゼ離宮2階の議長執務室に戻ったルーデンドルフは、備え付けの洗面台で一通り消毒作業を行つた後、速やかに黒檀の執務机

に備え付けられた最新型の据え置き型通信端末を起動し、とある場所へ連絡を取つた。

内務尚書ハインリヒ・オスマイヤー。国家維新評議会議員でありルーデンドルフの青

年期からの同志であつた。

「これはこれは同志ルーデンドルフ。何か私に御用ですかな?」

「何を聞きたいかもうわかっているくせに。『例の組織』の手がかりを掴めたと聞いたが。」

「ああ、アイヒマンが何かを掴めたと聞きましたな。」

アイヒマンことアルトウール・アイヒマンは内務省の内部組織である内国安全保障局の現局長であつた。この男はクーデターに肯定も否定もしていない男であるがなまじ有能であることは確かではあつたので、そのまま現職据え置きにした男である。

「とりあえずアイヒマンが送つてきた情報を画面に映します。」

オスマイヤーがそういうとルーデンドルフの端末の画面は何やら掲示板らしきものに切り替わつた。

「なんだこれは。いや、ネットの掲示板だということはわかるが：一体何が書いてあるんだ？なにやら『しますた』とか『マターリ』だとかそんなわけわからない言い回しが目立つな。」

「アイヒマンが言うにはこの奇妙な言い回しこそ連中、『ウォルフラムを悼む会』の暗号

文章である、と。」

「何？あの悼む会の暗号文書だと言うのか？これが？」

ヴォルフラムを悼む会は目下帝都において水を得た魚の如く勢いのある反帝国政治結社である。

その由来は故ミッターマイヤー首席元帥の末子であるヴォルフラム・ミッターマイヤーに遡る。

ヴォルフラムはミッターマイヤー首席元帥が年を取つてから生まれた血の繋がつた息子である。しかしあまり似通つていらない容姿から首席元帥は妻エヴァンゼリンが不貞を行つた結果生まれた息子であると断定し、15も上の義兄フェリックスとよく比較されることが多々あつたという。

そのような状況で育てられたのだから捻くれ者に育つのは当たり前だつた。彼は父への反抗心からなのか、引き籠もるようになり、ネットで反帝国組織と友誼を結ぶようになつた。

彼が20の時、突然部屋に押しかけた父によりこれらのことばれてしまうという事態が発生した。

「大帝陛下と轡を並べて戦つたこともないくせに！よくもそのようなことが出来たものだな！」

首席元帥は言い訳をする息子に対してもうな言葉で叱りつけたと言う。

しかし彼は年のためなのか、息子に対しての気遣いが出来ていなかつたのだろう。ヴォルフラムは恨みを持つてしまつたのだ。

仄暗い怒りと悲しみに心を包んだ彼はその夜、暖炉から火かき棒を取り出し、ベランダで酔いを覚ましていた父に殺意を持つて襲いかかつた。

「手前に俺の何が分かるつてんだよ！こうなつたのはお前のせいだと言うのに！お前も大帝とやらの元へ行けばいいだろう！死ね！死ね！死んでしまえ！」

この事件の最初の発見者は義兄フェリックスであると言われている。彼はこの突然の出来事にただ呆然として血の繋がつていない弟と形を成していない父の遺体を見るだけであつたと言う。ヴォルフラムは直ちに警官により逮捕された。

その後の弁護人すら呼ばせてもらえないと言われた太祖ですら嘆く一方的な裁判で、彼は殺人罪ではなく国家反逆罪により死刑を宣告された。首席元帥という政府の重鎮を殺害せしめたのだから殺人罪ではなく国家反逆罪に相当するというのが、最高裁判所の出した結論であつた。

処刑台に赴くとき、彼は今際の際の言葉としてこのような言葉を叫んだという。

「何が公平な裁判だ！何が公平な国家だ！死んで当然の人間を殺しただけで反逆者様になる国家のどこが公平なのか！滅べ！こんな国家など滅んでしまえ！そして何もかも

無くなり、歴史から消え去つてしまえ！」

彼の一言は大多数の臣民から非難されると同時に、反帝国感情を抱いていた一部の臣民、とりわけネットに常駐する層を激励した。

「ヴァルフラムの死を無駄にするな！帝国に鉄槌を下せ！」

こうしてヴァルフラムの名は忌まわしき反逆者のものとなり、今なお帝国を苦しめるテロリスト組織の代名詞となつたのだ。

「ええ、あの悼む会の暗号文書です。アイヒマンによれば、この掲示板の利用者層は殆どが悼む会に属していると思われるそうです。」

「ほう、例えば：この『2／26 ベヒマイヤー あぼーん汁』とある文章はどう読むのかね？」

ルーデンドルフは目についた文章をどう読むのかオスマイヤーに尋ねた。なるほど奇怪な文章であるが暗号文となつたらこれほど使いやすい文はないだろう。軍の暗号として一部導入するのも面白い。ルーデンドルフは尋ねながらそのようなことを考えた。

「ああ、これですか。これは『2月26日に民生省の官僚ベヒマイヤー氏を殺せ』という意味ですね。3日後に暗殺するつもりのようです。」

「なるほど。国家の敵は内緒話にしても声がでかいようだな。オスマイヤー、そちらか

らベヒマイヤー氏に警告を出しておいてくれ。それと近々悼む会の一斉掃討作戦を執り行うつもりだ。位置情報の特定をしつかり行つておいてくれ。」

オスマイヤーは一通り話を聞くと

「了解です。アイヒマンに伝えておきます。」

と言い、敬礼の動作をして通信を切つた。

通信が終了した後の独特の黒い画面がルーデンドルフの端末に映し出されていた。彼は次の通信先、副議長フォルベックに次の閣議についての打ち合わせのために端末の操作を再開した。

楽屋裏の英雄の卵 共和国編

またしても倒れたのか。

知らない天井（おそらくはどこぞのホテルの一室だろう）を眠気の残る目で見渡しながら、共和国防衛隊所属ヘンドリック・ファン・リーベック少佐はそう思つた。

「頭が痛い。これは典型的な二日酔いの症状だな。全くあいつら、俺が酒に弱いことを知つていてヴィクトリアス・ウォツカなんてものを飲ませやがって！」

彼はゆっくりと体を起こし、部屋の周りを見渡しながら強い酒を飲ませた同僚たちに悪態をついた。

一般的なビジネスホテルの一室らしい。部屋には自分の他に人気がなく、おそらく運んだ人は部屋に運ぶだけ運んであとはほつたらかしにしたのだろう。介抱ぐらいしてやつてもいいじゃないか！

ヘンドリックはゆっくりとベットから出て速やかに玄関近くにあるトイレのドアを開けて、頭痛と同時に出了吐き気を一通り処理したあと、トイレから出て改めて部屋の中を見回した。

机の上に何やらメモらしきあるものが確認できた。それによると何か自分に所用が

あるらしいので起きたらすみやかに防衛隊幕僚監部に出頭するよう、とのことであつた。メモには悪友イグナシオ・サラゴサ大尉の名前が書いてあつた。

「えーっと、今の時間は…10時25分か。どこのホテルかわからないがまあ一時間はかかるないだろうな。」

そう言うとヘンドリックは一通り置いてある荷物をまとめてホテルをチエックアウトし、そのままその足で地下鉄の駅へと歩を進めた。

ハイネセンポリスは郊外の巨大なスラム地域に目を瞑つてしまえばなかなか洗練された都市である。がそれは同盟時代の遺構を指して言うのであつて自治共和国になつてからは本質的には洗練もくそもへつたれもない街である。

未だに80年前のルビンスキーワークの火祭りの損害を立て直せず、建設はおろか修復は遅々として進まないことはもはや日常茶飯事であつた。

道路に出た。昔は高度な交通システムが完備されており自動車に乗るときは運転する必要がなく勝手に目的地にたどり着けるシステムが存在していたらしい。最も、今ではそんなシステムなど存在せず車とはもっぱらハンドルを握つて運転するものであると認識されている。渋滞なんて日常茶飯事だ。

「あー、今日も渋滞しているな。こりやタクシーやバス使わなくて正解だわ。」

ヘンドリックはそう言つてから歩行者信号が青信号になるのを確認して、道路の対岸

へと渡つた。

やがて彼は地下鉄の駅へと差し掛かつた。階段を下りて改札口まで出ると財布の中からICカードを取り出して改札にかざし、悠々と構内へと歩を進めた。

駅の構内にはいろいろな人がいる。会社員はもちろん、自分のような公務員、学生、果ては失業者やホームレスまで、いろんな意味で多様性に溢れていた。

「…本日10時45分到着グリーンヒル駅到着予定の電車は人身事故により運転見合わせとなりました。みなさま、ご理解の程を…」

「まーた人身事故か。いい加減にしてほしいね。気持ちはわかるけどさ。」

ヘンドリックは人身事故のアナウンスを聞きながらそうごちた。事故が起きた路線が自分の向かうリン・パオ駅方面ではなく反対側のグリーンヒル駅方面であることがせてもの幸いだと、彼は携帯端末をいじりながらそう思つた。

やがて彼の待つホームに一本の電車が来た。10時40分発、リン・パオ駅行き。彼は電車のドアが開くのを確認した後すぐに駆け寄り、車内に飛び乗つた。

速やかに席を確保する。どのような時間帯であれ電車の席は貴重なものである。早く行動しないと奪われてしまうからだ。やがてドアが閉まり、電車がゆっくりと動き出し、間を空げず十分な速度になつた。

(へえ、次の選挙では救国自由人民戦線とバーラト独立民主委員会、崇敬会が大躍進の見

込み、ねえ。國父がこの有様を見たらどう言うんだろうか。)

ヘンドリックは目についた政治の記事に目を通しながら、そんなことを思つてしまつた。

(國父なんて俺たちとおんなじ人だと思うんだがなんで皆そんなのを有り難がるんかねえ…)

彼らの言う國父の思想とやらにはいささか不思議がつてしまふヘンドリックであつた。

「次はリン・パオ、リン・パオ駅です。お降りの方は左のドアからお願ひします。繰り返します。次はリン・パオ、リン・パオ駅です。」

どうやら目的の駅に到着したようだ。ヘンドリックは速やかに左のドアに移動し、駅に到着すると真っ先に構内に躍り出た。

改札を出て地上へ上ると古臭くなつたビルが立ち並ぶ市街地へと出た。時計を見ると11時3分。歩いて大体20分ぐらいだろう。

「参つたなあ：読み違えた。」

誤差を考慮したら一時間を超えてしまうかもしれない。全く、自分は軍人としてまだまだなど彼は思った。

幕僚監部のある建物に向かう道は駅のホームと同じくさまざま人がいる。どこぞ

の会社員、学生、証券マンらしき人、失業者、ホームレス。時々議会の各派閥の人間がここで演説をしていたりする。

「国父はこう仰られた！『人類の社会には、人の命以上の価値がある説と、命に勝るものはない』という説の二つの思想潮流が存在する』と！翻つて、ボルシエヴィキの連中を見よ！人の命以上の価値を絶対のものとし、個人の命と尊厳を踏み躡ろうとしている！これは許されて然るべきだろうか！いや、許されない！何故なら：」

どうも今日はメンシェヴィキの議員らしき人間が演説を行なつていたようだ。おそらくあの議員は自由派のあたりだろう。

「君たちもその人の命以上の価値を絶対化しているのにねえ」

ヘンドリックは小声でそう呟きながら、急ぎ足でその場を通り過ぎ去った。国父曰く政治なんて下水道だ。

さてそうして歩いているうちに幕僚監部が存在する建物にたどり着いた。かつて自由惑星同盟の統合作戦本部があつた場所に建てられた、かつてそこにあつた建物と比較するところまことにした建物である。その分地下部分が充実していると聞くがいかんせん同盟統合作戦本部に入つたことがないので、ヘンドリックにはわかるはずがなかつた。

ヘンドリックは建物内に入ると正面受付の受付担当に

「防衛隊少佐ヘンドリック・ファン・リーベックです。こここの職員に所用があつて呼ばれたのですが。」

とさりげなくそう言つた。しかし一体誰が自分みたいな末端の将校を呼んだんだろ
うか。

「ヘンドリック少佐ですね。少々お待ちを…ああ、はい。幕僚総監のクロムウエル大將
に呼ばれていますね。はい。すぐに総監執務室に行つてください。」

「クロムウエル大將だつて!?はい、分かりました。すぐに行きます。」

まさかクロムウエル大將だなんて。一体全体自分に何のようだ! ヘンドリックは内
心毒づきながらエレベーターに乗り、大將の執務室のある地上10階に移動した。

「えーっと、執務室はどこだつたかなつと。」

彼が10階の廊下を移動しながらそう言つていると、総監執務室と書かれたドアを見
つけた。ここだろう。

彼は三回ほどノックして「失礼します。」と言い、ドアノブを回して室内に入つた。
「おお、よく来たね。リーベック君。」

クロムウエル大將はいぶし銀という言葉が似合う男であつた。皺の入つた彫りの深
い顔に銀縁眼鏡、黒い髪といういかにもダンディという感じのいでたちの男だ。ヘンド
リックはすかさず敬礼した。

「防衛隊少佐ヘンドリック・ファン・リーベック、閣下の召喚に応じました。それで小官に何か御用でしようか。」

「まあ、そこに座りたまえ。畏まつてたら話ができるんぞ。」

「は、はあ……」

ヘンドリックは促されるままに室内の応接机の椅子に腰掛けた。ご丁寧なことに紅茶と菓子が置いてある。間をおかずには大将も向かいの椅子に腰掛けた。

「いきなり呼んですまなかつたな。君のような人間にしかできない案件なのでな。ああ、この紅茶はシロン産の紅茶でね。国父が愛飲していた紅茶なのだよ。私が一番大好きな銘柄だ。」

「は、はあ。そうですか。それで、小官に何か御用で？」

「おお、そうだったな。まあ紅茶の話ばかりするのもつまらんだろうし。单刀直入に言おう。」

大将は紅茶を一口口に含んだ。この男が紅茶を飲んでから話を切り出す時はわりかし重要な事柄であるという。ヘンドリックは難儀な職についたもんだなあ、と少し後悔した。

「君、新設される部隊の司令官をやらないかね？」
「は？」

少し後悔どころではなかつた。大いに後悔すべき事柄が聞こえてきたような気がした。

「まだ書類上の部隊なのだがね。これから新設される部隊の司令官に君が選ばれた。士官学校で首席だつただろう。」

「ええ、首席でしたけど……えつ、まだ存在しない部隊とはいえ、私が司令官でいいんですか？」

「いかんのか？」

「私まだ少佐ですよ？しかも私は一介の参謀で、指揮官経験はまだありません。」

「ああ、そのことについてだが」

大将はまたカツプを取り、一口紅茶を口に含んだ。

「君は司令官就任に伴い大佐に昇進する。二階級特進だぞ。嬉しいだろう。」

「いやいやいやいや。」

ヘンドリックはいきなりのことと思考の整理がつかなかつた。いきなり呼ばれたと思つたら司令官になれと言われた上に二階級特進なのだ。絶対何かある。

「二階級特進つて、つまるところ死んでこいということじやないですか！何ですか？危険な任務に就かせようとしているんですか？」

「指揮官クラスの拡充だが？今までは新設したところで指揮官が不足するからな。」

「…指揮官クラスの拡充ということは分かりました。ですが今の部隊数でも海賊に対応可能でしよう。何故部隊を増やすんです？帝国とでも戦争を起こす気ですか？政府は一体何を考えているんですか？」

ヘンドリックは疑問に思つたことを大将にぶつけた。今のバーラトが保有し、帝国から制限されている各種戦闘艦 3000 隻で海賊相手には対処可能だ。

「これ以上増やして一体何と戦う気なのか？帝国と一戦行うつもりなのは明白だ。

「…ああそうだとも。これは政府の決定だ。なんのために部隊を増やすかは言つてこなかつたがな。君も知つての通り軍は政治の下で動く。今更何か言つても、議員ではない以上あまり効果もないさ。」

大将はそう言つてから、カップの残りの紅茶を全部喉に流し込んだ。

「少佐、悪いことは言わん。辞令を受ける。これは決定事項だ。お前も大佐になれて今まで多くの給金ももらえる。悪い話ではないと思うが。」

納得がいかなかつた。政府が一体何のために軍拡を行うのか。もう一度戦争を起す気なのか。ヘンドリックはしばらく飲み込めなかつた。

数秒ほど彼は下を向いて黙りこくつていたが、やがて意を決したのか、紅茶のカップを手に取つて中の液体を一気に喉に流し込んでから、

「…分かりました。新設部隊の司令官職の辞令を受けます。」

と何とか絞り出すようにして答えた。

一通りやるべきことを終えて幕僚監部から出た彼は、色々と疲れ切ったようで、自宅への帰り道で公園を見つけるとそこのベンチにどんと腰掛けた。

「…一体俺の知らぬところで、何が起ころうつて言うんだ？ウエンリスタめ、何をしようつて言うんだ？…平穏な生活は、これで終わりだな。」
彼は地面を見つめながら、そのようなことを呟いた。

楽屋裏の英雄の卵 帝国編

「だから言つたのだ！バーラト自治共和国などと言うものは人類の統一と帝国のためにとつとと取り潰すべきなのだと！」

銀河帝国宇宙軍テオドール・デイルレヴァンカー准将は、歴史ある老舗のバー「海鷺（ゼーアードラー）」にて隣の席に座つてしまつた哀れな帝国軍将校に酔つた勢いで絡んでいた。

「分かるか！国家というのは一つの思想、一つの領土、一つの君主によつて初めて成立するものだ！ゴールデンバウム王朝はそれすら出来なかつたから滅んだのだ！ラインハルト大帝は自らが門閥貴族と同等の存在を生み出したことに気づかぬまま崩御なされたのだ！お陰で後世の人間がどれだけ苦労しているのか！何を隠そう、共和主義の亡靈にだ！」

「は、はあ…そうですか…」

「また生返事だ！貴様、誇りある帝国臣民としての自覚がないな！なんのために帝国軍の禄を食んでいるのか分かつていらないな！」

この調子で30分だ。いい加減終わらないだろうか。将校のみならずバーにいる全

員がそう思つてゐるところであつた。

「…お客様、少しよろしいでしようか。」

「あ!? 今こここの将校たる自覚のない者に帝国人、帝国軍人としての自覚を促しているところなのだ!」

「その件ですが少しお声が大きいかと。もう少し静かにお願いできますか?」

バーの従業員はデイルレヴァンカーに自制を促した。

それがどうもこの将校の瘤に障つたようだ。デイルレヴァンカーの顔がアルコールのためとは思えぬほど真っ赤に燃え上がる。

「な、なんだと…帝国軍人としてなんたるかを教えてやろうとしているのに…!! 貴様は水を差すのか! 貴様! それでも帝国人か!」

「お、お客様、どうかお静かに、お静かにお願いを」

「黙れ! 軟弱者に活を入れて悪いことがあるか! もういい! 興が醒めた! 帰る! 不愉快だ!」

デイルレヴァンカーは伝票を持つて真っ直ぐ立ち上がつたが、アルコールのためかすぐくふらつき、立て直した後、ゆっくりとレジへと歩みを進めた。

「…お客様、災難でしたねえ。あの人金払いはいいのですが時々ああいう風になりますから…困つたものですよ。」

「労い、ありがとうございます。あの禿頭の将校、デイルレヴァンカー准将は有能とは聞きますが、人間的に問題があるとあらかじめ聞き及びましたので：なるほど、あんな感じか。」

将校は先程の出来事を簡単に振り返ると、グラスの中のハイボールをグツと喉に流し込み、「すみません、ハイボールもう一杯お願ひできますか？」とお代わりを求めた。一方、デイルレヴァンカーは勢いよく飛び出したはいいもののかなりの深酒を行つたためか、足元がおぼつかなく、途中で何度も倒れそうになりながら、自宅である官舎への歩みを止めずに進んでいた。

全く、世間では情けなく嘆かわしいことばかりである。帝都とその近辺ではブラウン・シユヴアイク熱だとかヴエスター・ラントの呪いだとか言う新型ウイルスは流行するわ、それにもかかわらず政府は醜い権力争いの戦場と化しているのは日常茶飯事の有様で遅々として対策が進まないわその影響で今になつてもワクチンができるないわテロリストは湧いて出てくるわ：

「この体だらく！・太祖がヴァルハラから嘆いておるわ！」

デイルレヴァンカーは情けなく思つて空に向かつて咆哮した。通行人がいくらか自分を凝視しているが、彼にとつては知つたことではない。

この体だらくの中で唯一輝ける人が少なからず存在するのを知つてゐる。ルーデン

ドルフ国家議長がまさしくそれだ。

まさしく太祖の世界精神が一人の人間として凝縮されたあの姿！帝国男児なら国家議長の為人こそ目指さねばならぬ。それに比較して今の帝国人の在り方ときたら！國家議長の爪の垢を煎じて飲ませてやりたい！

特にさつきのあの将校あたりは…

そう考えているうちにデイルレヴアンカーは街の中を流れる小川にかかる橋に差し掛かつた。彼は歩いているうちに体がほてつてきたようで橋の袂にもたれかかり夜風に当たることで体を冷やそうと考え、それを実行に移した。

かつてゴールデンバウム王朝の帝星であつたオーデインの星空は、ルドルフがテオリアから遷都した後も、ラインハルト帝が友キルヒアイス大公と帝位篡奪を誓つた時も、80年の時を経て寂れ果てた今も、変わらず美しい星空を夜の帷に湛えていた。

太祖獅子大帝はキルヒアイス大公との約束を果たし、宇宙を手に入れ、人類統一政権という失われた概念を復活させた。

だが大帝は本当に宇宙を手に入れただろうか。新領土は事実上の国家内国家であるし、イゼルローン近辺では反帝国感情が渦巻いており、到底帝国の統治が行き渡つていいと言ひ難い。なによりもバーラト自治共和国。回廊の向こう側に横たわる共和主義者の本山が存在する。

デイルレヴァンカーは両手を眼前の星空に広げてみた。

「なんだ、宇宙つて両の腕にも収まらないじゃないか。」

デイルレヴァンカーは思わずはにかんでしまった。太祖は意外と子供っぽい情熱を持つていたかもしれない。それをいつでも持続させついには本当に実行してしまうと言ふのだから、そう言つた能力こそが大帝を偉人とたらしめているのかもしれない。

：今、そんな太祖の築いた国家が、内部の様々な思惑によりズタズタに引き裂かれようとしている。

この状況を許しそのまま命数を使い果たしたら、ヴァルハラの太祖と大神オーデインに何と申し開きをすればいいのだろうか。

ローエングラム朝とは世界である。そしてそれと同時に一つの国家もある。

一つの国家は一つの思想、一つの領土、そして一つの君主により統一されなければならない。

天に二つの日なし。異なる思想など許してはならないのだ。

「俺がこの手でかつて太祖が夢見た宇宙を取り戻し、ローエングラム家に捧げ奉る。そのためにはこの限りある命を捧げていこう！」

デイルレヴァンカーは天に張り巡らされた星の帷に向かって、自分の決意を改めて叫んだ。通行人がいくらか自分の方を見た気がするが、そんなのは気にするか。燕雀は鴻

鶴の志など知らぬのだ。

どうも酔いが覚めたらしい。それなのに酒に酔つた時よりも気分がすぐる良い。理想に酔うとは何と心地よいことなのか！

デイルレヴァンカーは先ほどよりも軽やかな足取りへ官舎へと帰り着き、やがて疲れた体をベットに預けて、そのまま夢の世界に飛び込んだ。

一方でオーデインのどこかの公衆電話では、一人の男がどこかに電話を掛けようとしていた。

先程デイルレヴァンカーに運悪く叱られ、ハイボールを何杯か頼んだ青年将校である。

「…はい、もしもし、私です。件の将校と接触できました。あちらから話しかけて来たので探す手間が省けました。」

青年は電話の向こう側に対し畏まつた口調で話していることから、相手は彼よりも上の立場の人間だろう。ひよつとしたら軍の重鎮なのかも知れない

「…引き続いて監視の続行、ですね。しかし毎日バーに入り浸るというのもちよつと。…何ですって!?新領土駐留艦隊に移籍ですって!」

青年将校は電話の相手から告げられたことに困惑を隠せないようであつた。どうや

ら彼は花の艦隊任務になるようである。話の内容から察するにデイルrevアンカーもこの艦隊で何らかの要職に就いているのだろう。

「…なるほど、彼の副官として同艦隊に出向する、ですか。副官業務はあまりやつたことがありませんが、なんとかやってみましょう。…ありがとうございます。」

どうも電話の主から何かしたの激励の言葉をかけられたようだ。彼は思わず赤面する。

「はい、はい。では異動通知が来るまで引き続き監視の継続、と。了解です。最後まで精力的にやらせてもらいますよ。」

青年将校は電話の主にそう告げてから受話器を元の場所に戻した。相当緊張をする人物との電話だつたらしく、ふう、と一息ついて、額に流れた汗を軍服の袖で拭つた。「まさか自分が艦隊勤務のために新領土に行くことになろうとは…全く過激派将校の監視のためにこれだけの準備をしてくれるとは、維新評議会政権も至れり尽くせりだな。」

青年将校ことヴィンツェンツ・シュミット少尉はそう言いながら、今までお世話になつて来たバーの主人に異動を告げるのともう一杯酒を引っ掛けるのを行うべく、再び

「海鷺」へと歩を進めた。

テオドール・デイルrevアンカーとヴィンツェンツ・シュミットが公人として再び顔を合わせるのが今から数えて二ヶ月後、新帝国暦81年5月11日のことである。

動き出す世界 共和国編

「おつ、ヘンドリックじゃないか。やつと市民の権利である参政権を行使する気になつたか。」

防衛隊少佐イグナシオ・サラゴサは士官学校時代からの悪友である臙脂色の髪の男、ヘンドリック・ファン・リーベック大佐が意外なところにいるのを見つけて声をかけた。今日は主席アルベルト・ミンツの任期満了とそれに伴う議会の解散に伴う選挙である。「ん、イグナシオか。何、ちょっと気に入らない男がいたからそいつに嫌がらせをしてやらうと思つてな。」

「おお、誰だが皆目見当が付かないがそうか。しかしここでハガキ大の紙を今か今かと待つてゐる奴らが気に食わないというのはわかるぞ。」

イグナシオは投票箱に貼られている各種ウエンリスタ政党の代表の顔を見渡しながらそう言つた。

「かつての過激派がいつの間にか主流になつてゐる時世だぜ？ 政治に嫌気がさすのは当たり前だろうが。」

「おいおい、政治に食わしてもらつてる軍人がそれを言うのか？」

「政治に食わしてもらつての自覚はあるが奴ら俺の非常勤参謀としての平穏な生活をぶち壊しやがつた。おかげで今は司令官殿さ。部隊は存在しないが。ところでお前も俺の部隊に配属されたと聞いたが、どこの部署だ?」

ヘンドリックは話を切り替えた。サラゴサも同じく一階級昇進して新しい役職に就いているはずだ。それが何な理由のか。

「参謀だ。しかも後方と来た。」

「いいなあ。代われ。」

「物資の計算だと面倒くさいぞ。」

「やめとくか。」

「その方がいい。」

全く、めんどくさがりのところは昔つからちつとも変わってない。サラゴサは旧友の顔を見ながらそんなことを思つた。

「しかしボリシェヴィキ各派のすごい人だかりつぱりよ。これじや俺の一票も蠍の斧同然だろうな。」

ヘンドリックは先ほど見て來たボリシェヴィキの投票箱に集う人だかりを思い返しながらこちた。

「特にすごいのは救国自由人民戦線だ。列が外まで並んでいやがつた。それにここにあ

「いつが来ていたらしい。」

「あいつ？ 誰なんだ？」

イグナシオがヘンドリックが言う「あいつ」とやらがどの政治家のことか気になつた。
彼がそこまで言うくらいの政治家が議会にいるのだろうか？

「あいつはあいつだよ。ウイリアム・ダドリー・シモンズだ。」

ウイリアム・ダドリー・シモンズ。よく朝一にニュースを軽く見るイグナシオからすれば聞きなれた名前であつた。つい最近救国自由人民戦線の党首になつたばかりの議員である。

「シモンズか？ まあ確かにあのトリユーニヒトに似てるところがあるわな。でもそれだけだろ？」

「お前聞いていないのか？ 新規部隊の新設案を議会に提出したのはあいつ率いる救国自由人民戦線だぞ？ それでボルシエヴィキの中核なもんだから当然可決さ。」

大体二ヶ月前の新聞の政治欄に確かに救国自由人民戦線による新規部隊新設案が提出されたという記述があつたことを、イグナシオは今思い出した。

「…まあここではなんだ。近くに喫茶店があるからそこでゆっくりと…」

突如つんざくような爆発音が一人の耳孔を貫いた。

爆発音にしては少し鈍いような感じはしたものの大さから考えて間違ひ無く近く

で起きたものだろう。

「な、なんだあ？！外からだな。一体何が…」

ヘンドリックは駆け寄った窓から信じられないものを見た。投票所に使われている学校の正門あたりに黒い煙と何かが爆発したような跡が見受けられたからだ。

「お、おいイグナシオ、これってあれか、テロリズムというやつか。投票所を狙つてくるなんて最悪な野郎だな。」

「ああ、十中八九投票所を狙つたテロリズムだろうな。大体反帝人派あたりだろう。殺人狂の集団め。」

反帝人派こと全銀河反人類武装戦線は国父ヤン・ウェンリーを死に追いやつた人類はその種の一粒に至るまで滅びるべきと主張するウェンリスタの一派というよりは殺人集団といった方が適切な一派である。そのやり方はオーソドックスなものから過激なものまでバラエティ豊かであり、他のウェンリスタからはおろか民衆にまで嫌われているテロリスト組織である。

二人が場が騒がしくなつたのを感じ振り返ると、何人かがパニックに陥つたらしく、市民の義務を果たそうとしていた有権者達の喧騒に満ち溢れていた。

「皆様落ち着いてください！まだどこかに爆弾が仕掛けられている恐れがあります！係員の指示に従つて速やかに避難してください！皆様落ち着いてください！落ち着いて

!

係員が必死になつて場を落ち着かせ、避難させようと必死に努力していた。

「全く、この慌てつぶり。こんな時こそ落ち着かないといけないのにさ。」

「言つてる場合か。早いところ係員の指示に従つてずらかるぞ。もう投票はしたんだろう。」

そう言つてイグナシオは係員の示した道に従つてその場を去つた。ヘンドリックは慌てて悪友の跡を追いかけた。

廊下はいち早く係員の指示に従つた市民や後から慌ててやつてきた市民達によつてまさしくおしくらまんじゅうと形容出来る状況となつていた。身動きはおろか、呼吸すらもおぼつかない。

「おい、イグナシオ！どこだ！どこにいるんだ！くそつ、はぐれちまつた。」

ヘンドリックは運悪くイグナシオとはぐれたらしく、必死になつて彼と合流しようとした人の海の中でもがいていた。

（あいつ運動神経はいい方だからな。もう出口に近いところにいるだろう。にしてもこの状況、もし爆弾持ち込んだ奴がいたら纏めてあの世行きだぞ！係員は本当に何をやつてたんだ！）

ヘンドリックは内心そう毒づき、有権者達を整理させなかつた係員達にこれまで内心

で毒づいた。バーラトは選挙の開票の時ももたつくが一般係員ももたつく有様であつた。

そんな中、彼は一人の男とぶつかつた。冴えない禿頭の中年男性で、急いで出口へ出ようとしたところヘンドリックにぶつかつた形になつたようである。

「痛つ！おい！ちゃんと前見ろ！ぶつかつたぞ！ついでに足も踏んでる。」

「あつ、すいません。急いでいるんです。」

「全く…！」

ヘンドリックは男の着ているセーターの内側に黒い箱状のものがネットクホールから見え隠れするのをその目で確認した。もしかすると…

「おい！そのセーターの内側の黒いものは何だ？携帯端末やラジオの類にしては大きすぎると思うが…」

男は一瞬青ざめた顔になると途端に後ろを向き人の海をかき分けて出口を目指そうとした。間違いない。あれは逃げる市民にいつの間にか紛れ込んだテロリストだ。彼は確信を持つてこれまで人の海をかき分けて男を追つた。

「ビンゴ！待て！爆弾テロリスト！」

しかしヘンドリックは国父と比較するとだいぶんマシであるが運動神経が鈍い人間である。人の海をかき分けられずすぐさま距離を離された。

「くそつ、こうなつたら：イグナシオ！聞こえるか！爆弾テロリストが紛れていた！出口に向かつて突っ走っている！捕まえてくれ！」

何？分かつた！というハリの利いた男の声が喧騒に紛れて聞こえたような気がした。爆弾テロリストと聞いた市民達はまたしてもパニックになつたようで我先にと出口に向かつて殺到した。

ヘンドリックはその勢いを上手いこと利用してなんとか鮑詰めの廊下から出口に向かつて出ることに成功した。

「はあ、はあ：やつと出れたぞ。待て！テロリスト！大人しくお繩についたらどうだ！」

「もう捕まつたぞ。」

出口付近で待つていたであろうイグナシオが混雑を経てヘトヘトになつたヘンドリックにそう言つた。

「何？押さえておけよ！何やつてるんだよ！」

「テロリストならあそここの白シャツの集団にとつ捕まつたぞ。」

イグナシオの示した方に目を向けると確かに白シャツの屈強な男2、3人に先程のテロリストが捕まつているのが見えた。少し遠くに視線を合わせると同じく白シャツの男が爆弾の機能を停止する作業を行つて いるようだ。

「えーっと、あれは救国自由人民戦線の白シャツ隊か。まさか投票所に張つていたとは

な。民主主義の理念を踏み躡るふてえやろうだ。からくりがわかつたぞ。」

「あいつらがいなけりや今頃お前もお陀仏だつただろうに。」

白シャツ隊の隊長らしき男が一通りの通報とテロリストの行動を制限したことを確認すると、メガホンを市民達に向けて構えた。

「市民の皆さん！投票所に爆弾を仕掛け国父とユリアン・ミンツが残した民主主義の理念を市民の皆さんのが命ごと吹き飛ばそうとしたふてぶてしいテロリストは我々が全て捕まえました！安心して投票に戻つてください！」

先程の喧騒とは打つて変わつて別の意味の喧騒、歓声がどつと湧き上がつた。見ると男の他に二、三人が同じく電柱に縛られているのを見てとれた。

隊長が一通り話し終えると、こちらの元へ歩み寄つてくるのを確認できた。ヘンドリックはすぐさま身構えた。いつも批判ばかりしているので命の危機と感じたのだ。

「ヘンドリック・ファン・リーベック大佐ですね。貴方がテロリストを見つけたというのをサラゴサ少佐から聞きました。党首に代わり人々の命と民主主義の火を守つたことを感謝したい。」

「は、はあ、それはどうも。」

ヘンドリックは差し出された手を取り何回か弱々しく縦に振つた。まさか過激派の戦闘部隊の責任者から感謝される日が来るとは。

「私はジョン・ベルトラム元少佐だ。今はご縁があつて白シャツ隊の隊長をやらせてもらつていて。これは連絡先だ。受け取ってくれ。」

「は、はあ。ありがたく受け取らせていただきます……」

「なに、謙遜することはない。事実なら君は卑劣なテロリズムから市民達の命を救つた英雄なのだから。」

英雄。まさか自分がそんな仰々しい単語で形容されるとは。

程なくして警察官数名とパトカー数台が到着した。警察官は嫌そうな顔で電柱の繩を解くと、テロリスト達をパトカーに乗せて近隣の警察署へと連行した。何名かの白シャツ隊員も事情聴取のためにこれまたパトカーに乗せられているのをヘンドリックの目は見逃さなかつた。

「なあ、イグナシオさんよ。俺英雄だつてよ。過激派から言わるとなんか釈然としないな。」

「まあとりあえず好意は受け取つておけ。」

ヘンドリックとイグナシオはそんなやりとりをしながら、近隣のカフェへと歩を進めた。

このような事態も各地で確認されながらも、宇宙暦880年度総選挙はなんとか一区切りがついた。

やはり得票数としてはボルシェヴィキ各政党の割合が大きく、とりわけその中で救国自由人民戦線の割合が半数を超えていないとはいへ八月人民党を少しだけであるが議席数を上回つたことが大いに驚きを与えた選挙であつた。

ボルシェヴィキ連立政権は頭を大きく変えて継続することとなつた。

この後に決められた主席は救国自由人民戦線党首ウイリアム・ダドリー・シモンズに決定した。ウエンリスタ政権がバーラト自治共和国に誕生した、まさにその瞬間であつた。

動き出す世界 帝国編

新帝国暦81年7月27日未明、ローエングラム朝第5代皇帝ハインリヒ一世が崩御した。享年35歳、死因はブラウンシュヴァイク熱であつた。亡き息子と同じ病気に罹り、跡を追うようにして死んでいった。

彼の後に立つたのは彼の兄ルイトポルト大公の長男であるフランツであつた。国家維新評議会はフランツを組みしやすい皇帝であると認識しその即位を承認。

ここに第6代皇帝フランツ一世が誕生することと相なつた。

「こんな見せ物なんかを見て何が楽しいんだろうね、彼らは。」

銀河帝国皇帝フランツ・フォン・ローエングラム＝ジグマリンゲンは、帝冠を手に取りその頭に載せながらそのようなことを考えていた。

本来であれば彼は皇帝に即位することはあり得ない人間であり、彼自身も皇帝に即位する気はさらさら無かつたのである。それがなぜこうなつたかと言えば直系の皇族が彼しかいなかつたからである。

彼の父親ジグマリンゲン大公ルイトポルトは愚帝ラインハルト二世の次弟にあたり、無念帝ハインリヒ一世の兄にあたる人物であつた。ラインハルト二世が不審死しな

かつたりループレヒト皇太子が病で夭折しなかつたらフランツは一生大公であつただろう。

彼は皇帝の血というものを嫌悪していた。なぜなら皇帝の血を引いている父が悪魔の如き仕打ちを彼に施したからであつた。

野心あふれるルイトポルト苛烈大公は愚帝の不審死を裏で糸を引いていた疑いのあつた人間であり、彼が崩御した後やつと帝位が自分に回つてくると思つていたのであつたが、いざ蓋を開けてみると即位したのは弟のハインリヒ大公であつた。彼はルイトポルトと比較すると気弱で無能であり、明らかに宮廷内派閥によつて傀儡に立てられたのは誰の目にも明らかであつた。

ルイトポルト大公は無念と怒りに包まれた。そして彼はその発散先を家族に求めた。フランツはそのような父の虐待の中で幼年期と少年期を過ごした。何かをすれば父に否定され、何もしなければ父に人格をなじられ、父が苛立てば蹴られたり殴られたりした。

そのような行いを家族に対して行つたルイトポルト大公は、フランツが16になる時に『屋敷に押し入つた強盗団により射殺された。』

無論皇族とあろう者が強盗団に殺されることはありえない。屋敷には軍隊でなければ侵入できないほどの警備がなされていたからだ。

たちまちフランツが犯人であると槍玉に挙げられたのだが気弱と見られていた彼が父を殺すなどありえないと思はれ、結局使用人の一団が強盗団として処刑される運びとなつた。

このような波乱な人生を送ってきた結果、彼は全てが馬鹿らしく感じるようになつてしまつた。行動の一つ一つ、事象の一つ一つを無意味と感じるようになつてしまつたのである。

フランツは王笏、宝珠を一通り受け取ると、ゆっくりと会場となつてゐる謁見室の、その豪華にしつらえられた玉座に腰掛けた。たちまちにして拍手と歓声が場を包み込んだ。感染症対策の一環として皇宫前のメックリンガー広場と中継で繋がつており、彼らの様子がリアルタイムで分かるようにセットティングされているのだ。

フランツはちらと列席している閣僚たちを見た。そのどれもが軍服を着込んでおり、その中でも中央の小太りの厳つい男が特に目立つた。エルнст・アドルフ・ルーデンドルフ上級大将、現在の帝国における事実上の最高主権者である。

国家維新評議会は氣弱な彼をよく言えば組みしやすい、悪く言えば傀儡に相応しい皇帝であると認識し、その即位を承認した。

自分は彼らの国家改造とやらの体のいい表看板にされたのだ。太祖ラインハルトの血筋とやらは、下々のものの体のいい道具にいつの間にか成り下がつていたのだ。

「本当に馬鹿らしいな。何もかも、何もかも。」

彼は誰ともなく小さな声でそう呟いた。軍服の彼らを見る目は綺麗なスカイブルーであつたが、その瞳は泥の様に濁りきっていた。

「当初は心配したんだが、いやあ、本当に様になつてゐるな、あいつ！」

グリューネワルト大公子であるアンドレアスは即位式の中継をヴエルテーゼ離宮三階にある皇族用の中継会場に設られたモニターに映る皇帝の姿を見ながらその様な感想を隣に座る人物に漏らした。

「うむ、そうだな。凛とした佇まい、そこから生じる威厳。これなら帝国の未来を担えよう。」

隣に座る人物であるキルヒアイス大公子ジグムントはアンドレアスにその様に返した。この二人は同じ年であり昔から同じ窯の飯を食べて暮らしてきた幼馴染である。

グリューネワルト、キルヒアイスの両大公家はマリーンドルフ大公家と並ぶ御三家と呼ばれる家柄である。その起源はアレクサンドル帝の次男、三男、四男が同家に養子に出されたことから端を発し、領地こそ持たないが皇室の藩屏として今日まで存続してきた。

「にしたつてランツエリンの野郎遅いな。交通整理が行われてゐるから渋滞はないと思うが何やつてるんだ？もうあいつ即位してしまつたぞ？」

アンドレアスは自分の右横に空いている椅子に目を移しながら、もう一人来るはずであろう客の行方を心配する様な言葉を発した。

「ふむ…もうそろそろついてもおかしくないはずなんだが…何かあつたか？」
二人がランツエリンなる人物の行方を心配しているその時、階下から足音が聞こえた。足音はどんどん近づいてゆき、とうとう近くに来ているのが分かるほどの大さになつた。

程なくして扉が開けられ、端麗であるがいかにも気弱そうな男が入ってきた。ランツエリン・フォン・マリーエンドルフ。かの大皇后の父ランツの養子に入つたアレクサンドル帝の四男から端を発する御三家の御曹司、純然たる皇族である。

「ランツエリン！お前何してたんだよ！もうあいつ即位してしまつたぞ！」

「いやあ、ごめんね。帝都の屋敷じやなくて郊外の別荘にいたもんだから遅くなつちやつた。」

「そういうのはあらかじめ連絡してもらいたい。いや、貴様の体質のことだ。帝都よりも郊外にいる方が何かと楽だというの分かるが。」

「ごめんごめん。」

ランツエリンは一通り二人に謝ると、用意してあつた椅子にゆつくりと腰掛けた。
「あの子、本当に皇帝になつちやつたんだ。：確かまだ19でしょ？本当なら帝都の大

学に通つて、そこで青春を送るはずだったのに。」

ランツエリンは画面に映る自分よりも4、5ほど年下の皇帝を見つめながらその様な感想を漏らした。皇帝は一見すると絶対者の様に思えるが実は違う。亡きハインリヒ帝やアレクサンドル帝からも分かる様に実際は玉座に縛られた宇宙で一番偉いと言われる奴隸である。

「仕方ねえだろ。ハインリヒ帝が息子と一緒におつ死んじまつたんだからさ。もつとも、息子が運良く生き残つても乳児の皇帝が即位するだけだが。」

アンドレアスはぶつきらぼうにランツエリンにそう答えた。

「こいつの人を食つた様な言い方は目を瞑るとして：確かに、愚帝が若くして死に、先帝が一人息子を亡くし、苛烈大公が殺された今となつては、あやつしか帝位を継ぐものはいないだろう。…もつとも、本人はそれをどう思つているかだが。」

ジグムントは前二者の言葉にそのような言を以て反応した。

「もつとも俺はあやつのことを名君になれる器だとは思つてゐる。苛烈大公から受けついだ才覚と思慮深いところがあるのだ。きっと傀儡の器に收まらず、帝国になんらかの変革をもたらしてくれると、俺は信じてゐるが。」

ジグムントは画面に映る皇帝を目に捉えながら肯定的な評価を下した。

「そうか？俺はなんやかんやであいつは傀儡のままだと思うぜ？だいたい、今の帝国の

問題があいつ一人で背負えるわけがない。きっとルーデンドルフに甘んじるさ。」

一方でアンドレアスの評価は否定的だ。今の帝国の問題は個人で背負うには大きくなりすぎた。彼が一人で背負おうとしてもどこかでパンクすると判断したからだ。

「…どれも違うと思うよ。」

ランツエリンは一人の会話を聞いてそう呟いた。

「ほう？ 違うとはどういう訳だ？」

「まあこれは僕が抱いた感想なんだけどね。：僕は彼にプライベートの場で何度か会つたことがあるんだ。君たちは彼の目を見たことがあるかい？」

ランツエリンは二人にそう問い合わせた。言われてみれば、ランツとプライベートの場で会つたことは片手で数えるほどしかない。

「瞳がものすごく濁つてたんだ。あの濁りようはまず平穩に育つていたならありえないんだ。」

「目の病気かなんかじやないのか？ 持病を隠していたという事例は歴史を紐解けば何個かかるが。」

アンドレアスはランツが目の持病を持つていたためそう見えたのだろうと懸念を語つた。だがランツエリンは首を横に二、三回ほど振り、

「違う。彼が目の病気だということは聞いていない。」

と俯きながらそう言つた。彼は話を続ける。

「…その時に彼と何回か話したんだけどね。殆どの言葉が呪詛とも取れる言葉だつた。対象はぼやかしていく分からぬいけど。」

呪詛。その言葉に二人は硬直してしまつた。一体何に対しても？何故？二人の心中は疑問の言葉で一杯一杯になつた。

「ジグムントの言う通り、彼は確かに才覚がある。皇帝には相応しいだろう。でも…」ランツエリンはテレビの画面を見つめた。端麗な19の皇帝が、今まさしく太祖廟に即位の報告をするためにリムジンに乗り込もうとしているところだ。

「僕は彼が皇帝になるべきではないと思う。：彼の心中は間違いなく憎しみと諦念に溢れている。そんな人間が権力を握つてしまつたら。」

間違いなく帝国は終わる。

皇族に用意された離宮の三階の一室は、俄かに静まり返つた。

水面下の共同戦線

シモンズ政権の対帝国全権委員長であるアレン・モーリス・ブルック元大将は皇宮こと獅子の泉宮殿においてしつかりと感染症対策をした上で即位式の夜の立食パーティーに臨んでいた。

(帝都における演習や駐在武官の任で何度も立ち寄ったことがあるが：今回は感染症もあってかまるつきり人がいないな。)

ブルックが抱いた感想はまさしくそれであつた。普段は人で溢れかえる皇宮が、必要最低限の人間のみ入れましたと言わんばかりに空いているのだ。

今回の帝都における新帝即位式への使節団派遣は感染症も相まってお流れになると誰もが予想していたが、フエザーンとの繋がりを維持したいブルックとその麾下の政治家たちの一派、ウェンリースタ統制派と呼ばれる派閥の強い反対によつて最低限の感染症対策と帰国時の検疫の必須の条件付きでなんとか使節団派遣に漕ぎ着けることができたのだ。

それもこれも彼と統制派の政党、バーラト民主委員会がボルシエヴィキの穩健派として食い込み、議席の増加の恩恵を受けたからに他ならない。

今回の選挙でボルシェヴィキ内の有力派閥になれたことで今回のフェザーン行きはなんとか叶えられたようなものである。

それにしても。皇宮はこのよう静けさである。ブルツクの耳にはひそひそ話しているであろう小さな声と換気扇の音しか聞こえない。

料理も最低限の人数を心がけているからか、前に来た時よりも格段に少ない。先程口に入れたローストビーフにしてもサイズが小さくなつたように見受けられた。

料理のことはさておき。今の帝国の実質的な最高主権者であるルーデンドルフ上級大将とおそらくこの場に来ているであろう皇帝には是非とも挨拶に伺いたいと彼は考えていた。バーラトはいくら過激派がのさばつっていても帝国の自治領である。最低限の礼は尽くさなければならぬ。

見渡すと評議会の議員の一人かはたまた現役時代の部下なのかわからないが軍服を着込んだ誰かと話しているであろう小太りの厳しい男を見出した。あれがルーデンドルフ国家議長なのだろう。

彼はルーデンドルフが一通り話し終えて一人になつた瞬間を見計らつて、彼に近づいた。

「お初にお目にかかります、議長。新しく全権委員長に任命されたアレン・モーリス・ブルツクと申します。新帝の登極、共和主義者としても甚だめでたく…」

「フン、共和主義者か。私に何か用でもあるのか？」

ルーデンドルフはアレンを一瞥すると、不機嫌そうに鼻を鳴らしてそう言つた。

「いえ、とりわけ用というものではなく、ただ一国の公使としてご挨拶をさせていただこうと…」

「それを態々言いにきたのか？ご苦労なことだな。もう挨拶とやらは終わつただろう。さつさと別の者に挨拶に行つたらどうだ？卿は見たところそう言つたおべつか使いが大得意そうちからなあ？」

嫌味と取れる言葉をアレンに叩きつけると、ルーデンドルフはさあ、さつさと行つたとばかりの手振りをアレンに向けて行つた。

(：国家議長は共和主義を親の仇のように思つてゐると聞く。これ以上はやめておいた方がいいだろう。)

アレンは明らかに侮蔑に対しそう思つて国家議長から足早に離れることにした。一通り挨拶は終わつたのだ。次は皇帝だ。彼は会場内のどこかにいるであろう皇帝を探そうとあちこち見回した。

ところが皇帝らしき人物は何処にもいないではないか！事前に政府から受け取つた情報によれば皇帝は19歳、美しい銀の髪を蓄えていると聞いたが、何処にもその影は見当たらず、どこもかしこも脂の乗つた成人済みの紳士淑女のみであつた。

彼は途方に暮れてしまつた。このままでは芳しくない成果であつたと政府に報告しなければならない。そうなつたら彼の、統制派の望むフェザーンとのなあなあの繋がりを維持することはもうできないだろう。

「…あの、もし。バーラト自治共和国代表のアレン・モーリス・ブルック氏ですね?」

ブルックは肩を叩かれる感触を感じ、ゆっくりと上半身を振り返つてみた。いかにも氣弱そうな眼鏡の中年男性が、こちらに向けて恐る恐ると言つた感じで笑顔を振り向けていた。

「私、フェルディナント・ブリューニングという者です。今は一官僚の身ですが…あのキヤゼルヌ大将の後継者という氏に一度会つてみたかつたんです。」

ブリューニングと名乗つた官僚はそう言つてこれまた恐る恐ると言つた感じで右手を差し出した。

「…初めてまして。この度新しくバーラト自治共和国対帝国全権委員長に就任させていただいたアレン・モーリス・ブルックです。しかし私のことをよくご存知でしたな。こう見えても影が薄いとよく言われますので。」

「いえいえ! ブルック氏は全然影が薄くないですよ。むしろこの場において強烈な存在感を發揮しております。」

「…そうですか。」

ブルックは世辞を耳で受け取りながら、この官僚が何を目的として接触してきたのかを察そうとしていた。明らかに一官僚に過ぎない人間が一国の代表に接近するとは、何かあるのだろう。

「ところで、フランツ陛下は何処に？私は彼を探していたところなのですが。」

「陛下はこの場が大変苦手ということですので、ご自身の部屋にいらっしゃいます。：

何かありましたら侍従長が外で待機していますので伝えておきますが…」

「…そうですか。なら、後から言伝を頼みましょ…うかな。ところで。」

ブルックはここで一気に話を変えて真意を聞き出すことにした。どうも自分は物資の計算は得意だが策略は苦手のようだと彼は内心自嘲した。

「一官僚のあなたが一国の代表である私に接触したということは、何か要件があつてのことだと見受けられます。…それをお聞かせ願えないでしょ…うか。」

ブリューニングは驚いた表情を一瞬見せたが、やがて平静を取り戻して

「分かりました。私の真意をお話ししましょ…う。…ここでは何なので応接間の方で…」

とブルックにルーデンドルフの方を見ながらそう耳打ちして、出入り口である巨大なチーク製の扉の方に歩みを進めた。ブルックもその音を追つて、会場となつて…いるホールから出た。

これまた煌びやかなシャンデリアに照らされた広い廊下を二人が進むこと数分、一室

のドアの前にたどり着くとブリューニングはドアノブに手を掛け、さつと開けて部屋に入った。その際に早く入るように促したのでブルックもさつと入室した。

応接間はこれまた別の意味で煌びやかな部屋であつた。鹿や熊と思わしき剥製が何個か飾られており、名画や剣、火縄銃といった小物が壁に架けられていた。

ブリューニングは上座のソファにゆっくりと腰を下ろした。ブルックも釣られて下座のソファに腰掛けた。

「ここには機密保持のため監視カメラや盗聴器の類は設置されていません。安心していただきたい。…さて。」

ブリューニングはさつきの柔軟な表情から打つて変わって厳しい面持ちに変貌した。「ブルック元大将、あなたは今の銀河についてどのような意見をお持ちか。」

ブルックは大変驚いた。一官僚がいきなり世界情勢について聞いてくるのである。
「…今の世界情勢は一言で言えば希望を持つ隙がない、と言えますかな。帝国では経済格差の拡大と今回の疫病、バーラトでは不景気とインフラの劣化、そして両方で過激思想の勃興、ですかな。」

最も、我々もユリアン・ミンツから見てしまえば充分過激思想ですが、と付け加えておいた。

「まあ、端的に表すとそうなりますね。私も同意見です。」

ブリューニングは一旦席を離れると、あらかじめ用意してあつたであろうティーセットを机の上に運んでからこれまたあらかじめ用意してた茶をカップに注ぎ、ブルックに渡した。

「しかし、これからこの状況がさらに悪化することになるかもしません。：あの国家維新評議会を名乗る悪鬼どものお陰で。」

「悪鬼とは穏やかな表現ではないですね。彼らは仮にも国を、そして銀河を立て直そうと立ち上がった人間たちでしょう。」

「古今東西軍が政治の手綱を握つてうまく行つた試しは、ほんの一握りしかありません。その一握りも、致命的な遺産を後世に残したこともあります。」

ブリューニングはそう言つてから紅茶を一口ほど喉に流し込んだ。

「改めて私のことを紹介しましよう。官僚開明派と呼ばれる人間たちの不肖領袖を務めていることになつているフェルディナント・ブリューニングです。」

ブリューニングはそう言つてまた笑顔で右手を差し出した。今度は堂々とした様子だ。

「…改めて、アレン・モーリス・ブルックです。その様子ですと私にも何かをして欲しいとお思いで？」

「ええ、あなたにもこの銀河を平穏なものにするよう努めてもらいます。」

銀河を平穏なものにすることは、なんとも大きく言つたものだ。ブルツクは目の前の男に内心そう思つた。

「聞くところによれば、バーラトでは与党がより過激な派閥へと変わつたと聞きました。」

「救国自由人民戦線ですな。あれと比べると救国軍事連盟の連中が可愛らしいものです。」

ブルツクはメンシェヴィキに属している明らかに場違いの派閥、救国軍事連盟こと維新派の名を挙げた。彼らはバーラト民主委員会や救国自由人民戦線の属しているボルシェヴィキと袂を分かち、自由派と連合して野党勢力として議会の一角を占めている人間たちである。

「もう一つ言い忘れたことですが歴史から見てこれら過激な思想を持つ人間が上に立つとこれまたうまくいかないもので。彼らを放置しておくと近々大乱が起きると踏んでいるのです。」

「大乱とはまた壮大な。：しかしあれでもわりかし穩健な方ですが。」

事実そうである。救国自由人民戦線はかつては街中で暴力を使用するほどの過激な政党であつた。彼らが巧妙な選挙戦術を駆使するようになつたのはシモンズに代替わりしてからである。彼はなんやかんやで過激派を抑え込む役割を果たしているのだ。

「聞くところによればシモンズは根はお人好しな性分のこと。いずれ人民の彼に対する期待が大きくなり、それに応えようとして……」

「いずれ戦争に踏み切る、というわけですかな。」

「左様です。」

ブルックはそう言つてから紅茶を喉に流し込んだ。

「破滅的な戦争はバーラトも我が帝国も望まぬものであることは明確です。そこで、もしシモンズとやらが間違いを犯した時、改めて貴方が政権を握り、あるべき道に戻して欲しいのです。」

ブリューニングの提案には流石のブルックも驚きを隠せなかつた。仮にも民主的に選ばれた政権を、いざとなつたら倒せというのである。

「ま、待つてください！シモンズ政権は仮にも民主的に選ばれた政権、武力で倒すことはどういうことかは救国軍事会議を見れば明らかです！それに私は元とは言え軍人、軍人が政治を握つてうまく行つた試しはないと言つたのは貴方でしょう！」

「何も武力でとは言つていない。選挙で倒せばよろしいでしょう。それに、あなたはかつて軍人であつたとしても今は政治家だ。あなたには政治のセンスがあることはよく分かっておりますし、それは今のバーラト民主委員会を見ればよく分かります。」

ブリューニングは穏やかな声でそう彼を諭してから紅茶を一杯口に運んだ。

「それにバーラト民主委員会の議席数はボルシエヴィキ全体を見ても無視できない。あなたはシモンズが道を間違えた時にそれを止めることができるのです。武力によらず、民主的な手段で。」

たしかに、バーラト民主委員会の議席数は救国自由人民戦線、八月人民党に並び第三位の議席数だ。充分止められる数だろう。不安だつたら八月人民党と組めばいい。

「我々も国家維新評議会を倒すための策は練つてあります。：我々は太祖獅子大帝が臣民のために作りたもうたこの帝国が壊れていくのを、座して見ることができないのです。」

ブリューニングはそう言つてから項垂れた。かすかに彼が啜り泣くような音がブルックの耳に何回か入つてくる。

「…分かりました。顔を上げてください。私如きが力になれるかは分かりませんが：我々はフェザーンとの関係性を重視するものです。力になります。」

その言葉を聞いた途端、ブリューニングの顔がグッと持ち上がり、こちらを向いた後、につこりと最初に見た笑顔を彼に向けて咲かせた。顔には涙の跡がいくつかあるのがブルックには見てとれた。

「助力の程、ありがとうございます。我々が政権を取った暁には新領土の文治化、自治拡大を約束しましょう。これならバーラトと帝国の利にもなりましょう。」

ブリューニングはそう言つて右手を差し出した。

「正直、我々も過激派である自覚があります。ですがどうも我々は過激派の中でも穩健派のようだ。過激派の尻は我々が拭います。國父も『ベストよりもベターが良い』と仰っていますしね。」

ブルックは応えるように笑顔を作つて、ブリューニングの手を両手で取り、二、三回ほど上下に振つた。

ここに、後世の歴史書で幻の密約と呼ばれることになるフェザーン密約が成立した。希望は未だして残されていた。

第二部 スタート・ダッシュ

クリーニング・オブ・デモクラシー

「戦争にNO! シモンズにNO! ボルシェヴィキにNO! バーラトに戦火を呼び込むな！」

いくつかの旗、プラカードを抱えた群衆が秋のハイネセンポリスの大通りを練り歩いていた。旧同盟の平和主義政党である反戦市民連合の流れを汲む「バーラト市民平和連合」の過激派である。彼らもまた国父ヤン・ウェンリーはジエシカ・エドワーズとの繋がりがあつたとの根拠からウェンリースタを名乗っている一派であつた。

「シモンズは戦火を巻き起こそうとしている！ 独立経済圏にNOを言い渡そう！」

あまり統制が取れているとは言い難い隊列を組みながら進む彼らの前に、ヘルメットと防護装備で武装した男たちと彼らによつて支えられたジュラルミン製の長方形の盾が姿を現した。共和国警察機動隊である。

「シモンズの犬、平和の敵、トリユーニヒトの尻尾の先っぽが！ そこを退け！」

デモ隊の先頭の男がメガホンを構えて機動隊に怒鳴りかける。しかし機動隊は叫びを受けても動じなかつた。

「そうだー！シモンズの犬め！そこを退け！」

「戦争やめろー！再軍備やめろー！」

「子供たちを戦争に巻き込むなー！」

「国父は誰よりも平和を望んでいたのではなかつたのかー！貴様らそれでも国父の思想的後継者かー！」

先頭の男の叫びに続いてデモ隊から何人かが叫び声を上げた。

「クソ、ウエンリスタめ：!!調子に乗りやがつて：!!」

「隊長、催涙弾の使用許可はまだですか！奴らは当局の許可を貰つていません！」

機動隊からも眼前の団体に対しても不満を漏らす声が次々と出ていた。中には催涙弾の使用を検討している隊員も出る始末だ。

このまま両者が衝突するかと思われた矢先であつた。突如、ただでさえ統制の取れていないデモ隊の隊列に対しても襲撃をかける白シャツの集団が現れた。

救国自由人民戦線の準軍事組織である白シャツ隊である。

「デモ隊の諸君に告ぐ！直接行動により平和をもたらすという美名のもとに行なつている貴様らがデモと称して行なつてきた狼藉の数々、とうてい見逃してはおけぬ！聞けば最低限の手続きすら行なつてはいないようではないか！シモンズ閣下に代わつて我ら白シャツ隊が貴様らを誅伐する！」

その指揮官らしき男、ジョン・ベルトランはメガホンを構えてデモ隊に向かつてそう叫んだ。

「シモンズの犬め！現れやがったな！」

「平和の敵だ！容赦するな！」

「殺せ！平和のために殺せ！」

デモ隊は旗、プラカードを掲げて白シャツ隊に向けて無秩序に突撃を掛けた。

「言つても聞かないか！大局を見ぬ理想主義者が！応戦しろ！」

ベルトランは白シャツ隊に突撃してくるデモ隊にそう指示を出した。

「全く、ベルトランはやり過ぎたな。」

主席公邸の一室で現バラート自治共和国主席ウイリアム・ダドリー・シモンズはフリーダム・ボイス紙の一面記事を見ながらそう言つた。

「死者重軽傷者合わせて212人。その内白シャツ隊の犠牲者は135人ほどときたもんだ。本当、どいつもこいつも血気が盛んだな。」

シモンズはグラスの中に注いだブランデーに一口つけながら新聞をテーブルの上に置いた。

「全く、人が議会や最高評議会で意識統一に苦労しているというのにねえ。」

シモンズはまたしてもブランデーで一息ついて、窓の外に映るハイネセンポリスの街

並みと星空を眺めながらそうごちた。

帝国の中にあつて帝国と拮抗する、あるいはそれを凌駕し得る独立経済圏によりバラトをかつてイゼルローン革命政府の兵士であつた祖父、祖母が誇らしげに語つていたような誇りある街並みと誇りある共和革命の国家にする。それこそが彼の政治における絶対にして唯一の目標であつた。その為には分たれぬ政府、分たれぬ議会、分たれぬ国家が必要である。

だがそれは茨の道であつた。いざ政治家になつてみると分裂した党、そして分裂した議会という現実に突き当たつた。議会内の派閥を利用し、主席にまで成り上がつた今までえも変わりなく無意味な議論を繰り返している。

ただ一つにして分たれぬ国家バラトを作らなければならない。それこそが帝国を跳ね返し、国父とユリアン・ミンツの革命を守る唯一の方法であるというのに。彼は力強く拳を握り、やがて脱力してため息をついた。

ふと先程傍らのテーブルに置いた新聞に目を移した。思えば彼らとて同じ国父の思想的後継者と名乗つてゐるのである。だがいつしかその繋がりは忘れ去られてしまい、テロリスト同然にまで成り下がる派閥まで現れた。なんと嘆かわしいことか。
(…待て、テロリスト同然?)

テロリストという言葉でシモンズの灰色の脳細胞に名案の火が灯つた。ひょっとし

たら、ひよつとするならば。これだけで分たれぬ議会は達成できるかも知れぬ。

早速彼は机の上で充電してあつた携帯端末を手に取つて、とある番号を入力した。

「…ああ、ベルトラム君か。お勤めご苦労様。確かにこの後は記者会見と聞いたが…ああ、そうか。確か、デモ隊は火炎瓶などの武器類を装備していると聞いたが？…なるほど。うん、分かつた。」

シモンズはメモ帳から紙を一枚乱雑に破くと、ベルトラムから電話越しに聞き取つた情報をメモしていく。

「それとだな。隊員の一部がデモ隊の一部を拘束して情報を吐かせたということも耳にしたが…なるほど。一部党員の暴走と。いや、それはいいんだ。何、ちよつとした名案を思いついてね。ちよつとそちらにも協力してもらうよ。バーラトと革命の防衛のためにね。」

シモンズは穏やかな声でベルトラムにそう言つたが、その顔は裏腹に口角が大きく吊り上がりつていた。

バーラト自治共和国代議員は俄かに騒がしくなつていた。最もこれだけではいつも通りであるが今日はボルシエヴィキもメンシェヴィキも一段と増して騒がしくなつていた。

バーラト市民平和連合の一部の党員が市民に対する大規模な暴力行為を働き、その結

果としてテロリスト認定をされた。最もこれだけで騒がしくなるのはメンシェヴィキ、それも自由の擁護者を自称する自由派だけである。問題はそれだけではないのだ。

バーラト市民平和連合は全銀河反人類武装戦線と連携して一部議員と接触、シンパにすることによって議会を通じて公然と影響力を拡大していたというのが判明したからである。それも一派閥だけではない。全派閥にテロリストが紛れ込んでいたのだ。

そんな喧騒の中で主席シモンズが登壇した。

「シモンズ！ どうどう見境が無くなつたか！」

「民主主義の死刑執行書にサインしたな！」

「ルドルフ二世が！ 国父に土下座して詫びろ！ 焼けた鉄板の上でな！」

メンシェヴィキの議席から野次が彼に向けて飛んできた。コーヴエン、フーリエといつた自由派の議員が野次を飛ばしているのをシモンズはしつかりと見て取れた。

「：諸君、静肅にお願いしたい。これは一人のバーラト市民として、そして民衆に選ばれた政治家として話すべきことである。」

途端に大半の議席の騒がしさが止んだ。最も一部の議員は相変わらず野次を飛ばしてはいるが。

「諸君、今回一部の政治団体をテロリストとして認定したことは誠に残念だと思う。民主制の根幹である多様な意見のすり合わせによる政治運用の原則が損なわれたのみな

らず、あろうがことがそれが国父の望んでいたであろう平和を唱える団体であつたからだ。」

シモンズは閉じた目をゆつくりと開いた。

「しかし、その平和を唱える団体があろうことか全人類を抹殺せんとするテロリストと手を組み、その影響力を議会の全ての政党にまで広げ、国民に暴力を振るうことによつて主張を無理矢理にでも実現しようと試みたのである。苦渋の決断ではあるが私は彼らを許さないという決断を下させてもらつた。

：さて、諸君。諸君らの中にそんな彼らと手を組み、行動を見逃すどころか積極的に支援を行う議員がいたと聞く。しかも全ての政党に、だ。」

途端に全ての議席がどよめきだした。

「諸君に改めて問いたい。諸君らが座つている議席とは何のためにあるのか、誰のためにあるのかを。私は胸を張つて答えることができる。それはバーラトの市民のため、そして自由と民主のためである！」

それなのに諸君らはその椅子に座りながら何をやつていたのか！市民を嬉々として殺戮するテロリストと伍し、それを気付かながらも見逃したのではないか！

翻つて今のバーラトを見てみよ！諸君らの怠惰が招いたことが目にありありと映るであろう！

私は怒りとともに忸怩たる思いに胸を取られている！国父ヤン・ウェンリーとその後継者ユリアン・ミンツが夢見た民主制の末路とは、このようなものであるかと！市民のことを考えず、イデオロギーに囚われ、主権者たる市民を嬉々として殺すことを戸惑わない者こそが政治を回すことになると！

私はこのような状況を断じて許さない！全ての人民の自由を、その足で踏み躡る行為であるからだ！」

そうだ！我々もだ！とボルシエヴィキ側から賛同の声がシモンズの耳に入ってきた。「諸君！バーラトは危機にある。外からは帝国の政治、経済的圧力、内からはテロリズムの脅威が足音を立てて刃を研ぎ澄ませながら迫っている！議員たちよ！まだ市民の守護者たらんとする心ある議員たちよ！我々は一つとならなければならぬ！一丸となつてテロリズム、そして帝国の脅威と戦い、バーラトを今再びかつての、ユリアン・ミンツが残した民主主義の種を大樹としてサジタリウス腕に築かねばならぬ！」

我々が今を生き抜くために！未来を生き抜くために！我々は敵と戦わねばならぬのだ！戦い無くして自由は、平和はあり得ないのだから！私は弾劾する！自由の敵を、民衆の敵を、平和の敵を！」

民主万歳、自由万歳、革命万歳、國父万歳！とシモンズは締めくくり、右手で拳を作り大きく頭上へ振り上げた。

瞬く間に困惑している一部を除いた拍手が響き渡った。

「主席！発言を許可してもらつてもよろしいでしようか！」

ボルシェヴィキ、救国自由人民戦線の議席から一人の議員が立ち上がつた。

「私ジョージ・ウイルクスはジャン・シャトルー議員がバーラト平和市民連合と繫がりがあると聞き及びました！」

次に崇敬会の議席から一人の議員が立ち上がつた。

「このロドリーゴ・パトリオは同胞フェリックス・デュゴミ工議員がテロリストから賄賂を受け取つたと聞きましたぞ！」

続々と議員が立ち上がる。

「私アントナン・ドレグスラーは同志オズワルド・コーヴエンがバーラト平和市民連合と繫がりがあると聞きました！アツテンボロー提督に謝らせたいです！」

「私アルトゥール・ザイズラーは同胞エンリケ・カスタネールがテロリストと伍していると聞きました！」

「隣のアキオ・イツカワ議員がテロリストと繫がっています！」

続々と議員たちが声を上げる。

シモンズは彼らの告発を聞いて勝利を確信した。

クリーン・オブ・デモクラシー。

直訳すると民主主義の掃除と呼ばれるこの奇妙な大肅清は、10月12日の代議員会期の満了をもつて大々的に行われた。

テロリストと繋がりがある、とされた議員たちは会期が終わると同時に国家騒乱帮助罪により逮捕された。

彼らはその後行われた弁護人すらつけてもらえない裁判により殆どが死刑及び終身刑、無期懲役といった重罪が適用された。

残された遺族はこの結果に大きく抗議したがその殆どが突如現れた黒ずくめの男たちによつて「行方不明」にされた。

11月に入つてからシモンズ政権は補欠選挙を実施、あらかじめ用意されていた各派のシモンズのシンパたちにより殆どの議席が埋め尽くされることとなつた。

11月8日、救国自由人民戦線は代議院にて「バーラトの諸問題解決のための挙国一致政権の樹立に関する法案」を提出、全会一致の可決により単一政党「全バーラトウェンリスタ統一同盟」が成立することとなつた。

かつてユリアン・ミンツが夢見た民主主義の理想はかくしてヤン・ウエンリーの顔を見たことがない者たちにより大きく歪められることとなつた。

血の聖靈降誕祭

国家維新評議会が計画している「ヴァルフラムを悼む会」を始めとした反帝国テロリストの一斉検挙作戦は予想に反して進捗が芳しくなかつた。

というのも国家維新評議会、すなわち軍部とケスラー閥と呼ばれる帝都警備軍、憲兵、警察、陸上軍、装甲擲弾兵、そして皇帝親衛隊と言つた艦隊以外の広範な組織に広がりを見せる派閥の存在であつた。

ウルリッヒ・ケスラー元帥の名を冠する彼らはクーデター以前にことあるごとに軍部と対立し、政治の主導権を巡つて度々争つた、まさしく天敵ともいえる存在であつた。

このケスラー閥が今回の一斉検挙作戦に関して明確に反対の意を示したのだ。政敵が上からああせよこうせよと命令してくるのだ。逆らいたくなるのも無理がない話である。

ヴエルテーゼ離宮一階会議室ではそんな彼らを巡つて何名かの評議会議員が集まつて話し合いが行われていた。主な閣僚として国家議長ルーデンドルフはもちろんのこと副議長兼國務尚書フォルベック、内務尚書オスマイヤー、司法尚書ファルケンホルスト、内国安全保障局長アイヒマンなど錚々たる顔ぶれが実体、立体映像問わず並んでい

た。

「今回の件を見るに最早ケスラー閣は社稷を害する革命分子でありこれを生かしておくことは人体に害をなす寄生虫を放置しておくことに他ならない。私はこのケスラー元帥の名を冠する寄生虫どもをこれを機に一匹残らず駆逐するべきであると提案する。」

国家維新評議会の最右翼であるファルケンホルストは訥々と、だが言葉に熱を多く含ませて閣僚たちにそう提言した。

「しかしケスラー閣は寄生虫であれども有用な人物が何名か存在するのは事実です。ここは駆逐とまで行かずとも我らがコントロールできるようその影響力を断ち、弱らせておくべきではないでしようか。」

アイヒマンがファルケンホルストの提言に対し今度は冷めたような口調で反論した。
確かにケスラー閣にはオーディン方面軍司令官フォン・フーチエル、装甲擲弾兵総監フォン・ヴィツツレーベンなどその道においてその名ありとも言える面子が何名か見受けられた。

「弱らせておくだと！そんなのでは甘い！大義を蔑ろにし臣下の礼を弁えず好き勝手に振る舞い、あまつさえ陛下にとつて代わつて国政を壟斷せんとする革命分子を弱らせて放つておこうと言うのか!?都合の良いことを申すな！」

「ですがケスラー閣が有能な人物の宝庫になつてゐることは他ならぬ事実でしょう。太

祖獅子大帝は能力があれば門閥貴族に与した者でさえ登用した事実をお忘れか。」

「たしかに太祖獅子大帝は能力さえあれば如何なる者でも登用した。しかし帝国を搖るがし、実権を握ろうとした革命分子までは登用していない！」

「ロイエンタール大提督のことをお忘れか！あれは地球人どもの陰謀とはいえ最後には帝国と大帝に弓を引いたが、良き忠臣だつたのだ。」

アイヒマンとファルケンホルストはそういつた調子で意見を戦わせていたがついには、

「ルーデンドルフ議長の意見はどのようなものか、お聞かせ願いたい。」

と自分たちの長に最終的な意見を要求した。

無論、この国家議長の腹はもう決まっていた。

「最早彼奴等に対しては言うまでもないだろう。これを機に徹底的に叩く。聾貞などなし。どのような者でさえ徹底的に叩く。帝国の復活に邪魔者は要らぬ。」

ルーデンドルフは威厳のある声でゆっくりと結論を出した。もとより彼らは帝国の分断の一因となつてゐるのだ。大義のために彼らを殺す。これはルーデンドルフにとつて決定事項であつた。

「…徹底的に叩く、か。しかしどうやつて叩く？彼らは曲がりなりにも私達と張り合つてきた派閥だ。ただでは倒れないぞ？」

それまで口をつぐんでいた副議長フォルベックがルーデンドルフの結論に對して疑問を投げかけた。彼は陸上軍において唯一の國家評議会議員であり、またクセの強い彼らの中において常に穩健派であった。

「それについては一つ考えがあります。バーラトの共和主義者と同じやり方を使うのです。」

オスマイヤーが口を開いた。

「即ちケスラー閥と反帝国テロリストの繋がりをでっち上げ、それを証拠として彼らの主だつた人物を失脚させる。反逆者と繋がりがあつたのです。これにより彼らの影響力はもはや無いに等しいものとなりましょ。」

バーラトの大肅清及びその手法については帝国側もしつかりと情報を掴んでいた。なるほど確かにその方法なら確実に肅清できるだろう。

「異議があります。」

オスマイヤーの提案に意義を投げかけるものが現れた。帝国情報取調局長のゲーレンである。

「もしそれが決定したとしてそれを実行するのは我々情報取調局の出番となるわけです。情報取調局がどのような場所かはご存知でしょう。」

言われてみれば確かにその通りであると列席の人々はそう思った。情報取調局でこ

ちらの味方はゲーレン含む上層部の一部でありそれ以外は全てケスラー閣の人間である。どこかで派閥を守るために握りつぶされるのがオチだろう。下手をすればこちらを潰すための恰好の材料を提供することになりかねない。

「……これに関しては陛下に勅令を出させ反逆者に仕立て上げる、というのはどうでしょうか。」

列席の一団はアイヒマンのこの提案に対し驚きの声を発した。

「我ら國家維新評議会の利点はそのまま内閣として機能していること、即ち体制側であると言うことに他なりません。体制側であると言うことは即ち陛下をはじめ皇室を手中に収めている、と言うことです。陛下に働きかけ、彼らを第一の反逆者とする勅令を引き出すことができれば、ケスラー閣の排除に軍や艦隊を動かすことなど容易いことです。」

アイヒマンは先ほどと変わらない冷めた声で驚くべき案を紡ぎ出す。確かにその案なら妨害を受けることなく彼らを排除することができるだろう。できるだろうが……「しかし……もしそれを実行し、失敗すれば……帝国を二分する内戦が起ころう！今の帝国で内戦を起こしてみろ！それこそ世界の終わりだ！」

フォルベックが叫ぶ。ケスラー閣は帝国の陸上戦力の大半を掌握している。もしアイヒマンの提言したそれが失敗することがあるならば、宇宙と惑星を二分する内戦が起

ころだろう。そんなことがあれば、それ即ち世界の終わりである。ローエングラム朝は、言うなれば世界なのだから。

「第一、どうやつてその勅令を引き出すのだ！まさか陛下を銃で脅して引き出させようとするわけでは無いだろうな！」

「フォルベック閣下、こちらの資料をご覧ください。」

アイヒマンがフォルベックの反応を冷たくあしらうと、会議机の中央に何枚かのテキストデータが立体映像として出力された。

「これは…」

一同が息を呑む。そこに書かれていたこと、それが意味することは…

「ケスラー閣め、クーデターを計画しているということか。」

ルードンドルフが書かれていることに唸つてから震えた声でそう言つた。

「この書類はいわば誇張表現が使用された資料というもの。陛下から勅令を引き出すにあたりこの書類を用います。ケスラー閣にクーデターの動きあり、早急に我ら軍部に鎮圧の勅を、と。」

「誇張された：つまりクーデターを計画している跳ね返りがいるというわけだな。」

「左様。跳ね返りの青年将校がクーデターを計画していますが所詮計画倒れです。」

ルードンドルフは眼前の捏造資料に目を通してから腕を組んで一通り考える動作を

した。確かにこれなら有効な打撃を与えるかもしれない。使わない手はない。

「：分かつた。アイヒマン局長。貴官の案を採用する。奏上は任せてくれたまえ。ご苦労だつた。」

ルーデンドルフはアイヒマンの案を採用することとした。アイヒマンは何も言わず、ルーデンドルフに一礼をした。

「へえ、帝都警備軍司令官シュトロハイム大将と憲兵総監シュタウフェンベルク上級大將らが中心となつてクーデター、ねえ。」

銀河帝国第六代皇帝フランツ一世はルーデンドルフから手渡されたいくつかの資料を眺めながらそう言つた。

どうせこれも嫌いな奴を蹴落とすためでしかないのでだろう。フランツはルーデンドルフの内の醜い野心を見抜いていた。

(全く、どいつもこいつも自分の嫌いな奴を蹴落とすために上の人に媚びへつらう。醜い、大変醜いね。)

そしてその人たちの上に立つて彼らの行く末を左右する勅令を発する皇帝とはなんと滑稽なものだろう。操り人形でありながらその言葉は全てのもの之上にあるのだ。馬鹿らしいことこの上ない。

(でもまあ、シユトロハイムとシユタウフェンベルクの取り巻きが消えればちょっとは面白くはあるかな。彼らは妙に真面目で能力があるから。だから、消えたらきっと面白いことになるぞ。)

フランツはそう思い、ふふ、と笑いながらシユトロハイムとシユタウフェンベルクを始めとするケスラー閥の終焉を意味する文書に軽くサインをした。

「…そうだ、良いことを思いついた。」

フランツは悪戯を思いついた子供のように調子のいい声でそう言うと、書類に何かを一筆軽く加えた。

帝国暦81年の聖靈降誕祭の日は帝国において歴史に残る一大転換点の時代であり、またこれまでフェザーンが送ってきた聖靈降誕祭の日の中でもとびきり血生臭い日となつた。

皇帝フランツ一世がケスラー閥と呼ばれる政治派閥がクーデターを計画していることを感知、国家維新評議会議長ルードンドルフと軍部に「ノイエ・シユタウフェンの如く」鎮圧を命令したのだ。

国家議長ルードンドルフはこの勅命を受けて地上軍參謀總長リュッケ元帥と宇宙艦隊司令長官フェヒナー元帥にクーデター鎮圧部隊の編成を命令。直ちにフェザーンに

駐留している艦艇5000隻、地上軍50万をもつてして鎮圧軍を編成し、その日のうちに鎮圧行動に当たらせた。

これらの動きに困惑したのがケスラー閣の部隊であつた。追い詰められた彼らは首都警備軍、憲兵隊をもつてして玉体を確保しようと先んじてクーデターを起こしたが、フォルベック中将指揮の3個師団と衝突、民間人を巻き込んだ凄惨な市街戦ののち帝都の外郭を包囲した鎮圧軍により一兵も残らずに鎮圧された。

地上での蜂起を聞きつけたケスラー閣の艦隊も装甲擲弾兵を伴つて帝都に急行しようと試みたが待ち受けていたマンハイム中将指揮の五千隻の一斉放火により活躍することなく宇宙の塵と消えることとなつた。

帝都での安定の確保を確認したルーデンドルフは各地でケスラー閣の公職追放令を発令、同時に各地に中継されたケスラー閣とみなされた主要人物に対する欠席裁判で死刑に次ぐ刑である帝国からの追放刑、帝国アハト刑を宣告した。

各地、とりわけ旧帝国領であつたオリオン腕で官民共同によるケスラー閣狩りが横行することとなつた。密告が奨励され、長く寄り添つた夫や恋人でさえケスラー閣と判明した瞬間軍や警察に売られることが多発し、リンチが横行した。例え女性や障害者であつても差別することはなく、ケスラー閣であると分かつた瞬間彼らももれなくリンチされた。

このケスラー闇という枠組みは大変曖昧なものであつたため、ケスラー闇でない者も被害に遭うことが多発した。

運悪くこの時節はブラウンシュヴァイク熱が流行のしていた時期であり、ストレスが溜まっていたことも相まって、人々はこの魔女狩りに熱狂することになった。もちろん感染者もこの狂乱の被害を被つてゐる。

かくしてオリオン腕を中心に年の暮れから年明けしばらく経つてまで、人々は血と死体に熱狂することとなつた。

「ふふつ、やつぱり面白いことになつた。ねえ、もつと面白くしてよ。そしてこの僕を楽しませておくれよ。」

フランツ一世は自室に備え付けられたモニターでその様子をつぶさに伝える報道を見ながら、ほくそ笑んでそう言つた。

これの後、國家維新評議会は各地で狂乱の副産物である治安悪化の回復を兼ねた反帝国テロリストに対する一斉検挙作戦を発令。この狂乱は急速に収まつていくこととなり、4月になるとばつたりと止んでしまつた。

後世の歴史ではこの狂乱のきっかけとなつた新帝国暦81年12月25日を指して「血の聖靈降誕祭」と呼ぶようになる。

歴史のページが捲られて

ハイネセンポリスから西に250km離れた山岳地帯の村。そこに一人の寝たきりの老人がいた。

ユリアン・ミンツ。国父ヤン・ウェンリーの養子でありバーラト自治共和国の建国者、共和国二代目主席であり帝国が霸權を握った銀河において民主主義の種を植えた偉人の中の偉人である。

そんな彼は長い間政界において存在感を發揮した後840年代に引退、歴史書の執筆をしながら余生を過ごし、つい最近になつて寝たきり老人になつてしまつた。

最近はもう何が何だかわからなくなってきた。いつたい自分が誰なのか、ここはどこなのか、それすらも分からぬ。ぼやけた感覚の中で生きている。ただずつと昔に誰か大きい大切な人がいて、大切な人たちがいて……それから……何か大切なことを忘れているような：

「あ～あ、お父さんつたら、またお漏らしちゃつて。ほら、替えましょうね。」隣で編み物をしていた老婆がユリアンに向けてそう声をかけた。

この女性は彼の妻カーテローゼ・フォン・クロイツエルではない。彼の娘である四女

マリアであつた。亡くなつた母に代わり父を支えると決めてからずつとこの村にいる。

「カ…カリ…カリンかい…？」

「お父さん、違いますよ。あなたの可愛い娘のマリアですよ。さあさ、オムツを替えましょうね。」

マリアは父の言葉をさらりと流してオムツを手早く替えていく。もう父を支えて25年、寝たきり老人になつてから15年である。彼女にとつては手慣れたものであつた。

「マ、マリ、ア…？」

「はい、マリアはいつもここにいますよ。さあ、替え終わりましたよ。ゴロンとしましょうね。」

マリアは父を寝かしつけた後、ゆっくりとした足取りでロッキングチェアに戻り、読みかけていた小説を手に取つた。どうも最近は体にガタが来たようだ。自分の体が寿命を迎えるつある。自分が死んだらいつ誰が父の介護を行うのか：

「ただいま！」

彼女の耳に若い女性の声が聞こえてきた。彼女の唯一の血の繋がつた孫であるアンナ・ミンツのものであつた。

「アンナかい？おかえり。おやつなら机の上にあるよ！手洗いうがいしてきな！」

はーい、という一転して氣怠げな声が彼女の耳に入ってきた。よかつた、まだ耳は丈夫だ。

今彼女が目を通しているのは有名作家アステュート・ミラーの作品である「イゼルローンにて」と呼ばれる父が活躍していた時代の作品である。名無しの一兵士の視点からイゼルローン共和国の成立から消滅の過程を見ていくものだ。

マリアはこの作品が好きだった。父がどんな遺風で育ってきたのか、どんな情勢を乗り越えてきたのかがありありと感じられるからだ。8月の新政府の熱狂、民主主義を守るという誇り、シヴァ星域会戦の緊張感、そして…

「おばあちゃん！ ただいま！」

快活な女性の声、アンナ・ミンツの声で現実に引き戻された。目の前には近くの高校の制服を着た亡き息子の残した忘れ形見が、笑顔でこちらを覗き込んでいた。

「おや、アンナかい。全く、もう一回言わなくともいいのに…」

「だつておばあちゃん、本を読み出すとずっと夢中になっているもん。それより、はい！これ！」

アンナはそういうと包装紙に包まれたケーキを一個、彼女の読んでいた本の上にポン、と置いた。マドレーヌである。

「おや、アンタのために二個用意したというのに：いいのかい？」

「私、帰りに友達とケーキ食べに行つてたから！」

どうも娘は買い食いをしていたようだ。育ち盛りの人間は息子も娘もよく食べるようだ。そういえばアルベルト兄さんの孫なんかステーキ500グラムをペロリと平らげたらしい。

「そんなことよりさ。」

アンナはマリアの隣のベッドに寝込む老人を侮蔑のこもった目で見つめた。

「まだ介護してたの？こんな奴。」

アンナは侮蔑のこもった目で見つめながら明らかに侮蔑とも取れる言葉を老人に吐きかけた。

「アンナ」

「だつてこんな奴と言われても仕方ないことしてきただじやん。」

「怒るよ」

「なんならこんな奴じやなくてこいつって言い換えようか？いい加減死ねばいいのにね。そうすれば晩節を汚さなくても」

「いい加減におし！」

マリアは力強く椅子から立ち上がり父を侮蔑する孫を力強い声で叱り続けた。いつもからか、彼女は父を見るたびにいつも侮蔑の言葉を吐くようになった。高校生となつた

今となつても相変わらず侮蔑の言葉を吐き続ける。

「だつて！…いつウエンリスモを生んだ張本人じやん！…こんなこと言われたつて仕方ないことしかしてきていたじやん！」

アンナはユリアンを指差しながら祖母に向かつて反論した。当のユリアンは口を開けてぐつすりと寝ていた。

「おばあちゃんは覚えていないかもしないけどね！お父さんとお母さんはウエンリスタに殺されたんだよ！惨たらしく！…こんな奴がお父さんとお母さんを殺したんだ！こんなこと言われて然るべきなんだ！」

アンナは涙を流しながら、憎しみのこもつた力強い目で寝たきり老人を親の仇かのよう睨みつけた。

マリアは歯を食いしばった。確かに思い返せばアンナが父に對して侮蔑の言を吐くようになったのは彼女が7歳の頃、村で救国自由人民戦線との諍いがあつた日であつた。

革命の英雄ユリアン・ミンツを手中に收めたい救国自由人民戦線はこの村に党的支部を置こうとし、それを止めようとした村の名主であるマリアの息子夫婦が交渉に向かつたところ、翌日には慘たらしく殺されて遺体は木にくくりつけられていたのだ。

彼女が當時抱いた憎しみを考えれば確かにそうだけどウエンリストに向いて然るべ

きだらう。しかし彼女の憎しみはそれ以上だつた。そのきつかけ、ユリアン・ミンツにいつからか憎悪が向いたのだ。

「本当は止めるべきなのに！こいつは歴史に逃げたんだ！立派な現実逃避だよ！お陰で奴らが！ウエンリスタが！こいつのいた場所を全て奪つて！みんなを傷つけているんだ！」

涙が床に何滴か落ちる。アンナは一通り叫喚した後、

「部屋に入つてこないで！寝るから！」

と言い、わざと足音を大きく立てて部屋から出て行つた。

部屋にはマリアと年老いた父の二人が取り残された。

「…い、今の、は？」

ユリアンはマリアに寝ている間に耳に入つてきた騒音について尋ねた。だがもうユリアンの耳はそれがどんな意味を持つ騒音なのかを認識できない。

「…なんでもありません。なんでもありませんよ。お父さん。」

「ああ、う？」

マリアはポカーン、とした顔を浮かべる父にそう諭した。息子は殺され、孫は明らかに敵意を向けている。もう父のそばに居られるのは他ならぬ自分だけだ。せめて、せめて最期の時間だけは一緒にいてあげないと。彼女は父を見て改めてそう思った。

彼女の耳に騒音が聞こえてきた。物と物がぶつかる音、たくさんの人々の声。

どこかの政治団体の行進だろう。おそらく、麓の街からやつてきたに違いない。最近全バーラトウェンリスタ統一同盟なる政党ができてからここに来る頻度が多くなった。何せここはユリアン・ミンツの隠居地だ。示威行動にはうつてつけだろう。

「…なんでもありませんよ。さあ、もう一度ゴロンとしましょうね。」

マリアは年老いた父の後継者のデモ運動を見せまいと父に就寝を促し、布団をゆっくりと彼の体にかけた。

「兄弟たちよ！ 武器を取りれ！ 同盟旗を掲げよ！ 兄弟たちよ！ 何を恐れるか！ これは聖なる戦いなのだ！」

全バーラトウェンリスタ統一同盟の旗、三色旗に国父の肖像画が描かれた旗を振り回して党歌をけたましくワゴン車に乗せたスピーカーから鳴り響かせながら、一つの一团が萎びた山間の村の道を行進していた。

「ヤン・ウェンリーのための行動部隊」と名乗る彼らはつい最近まで救国自由人民戦線の外郭組織として機能していたが党首がシモンズに変わった途端に縁を切られた過激派ウェンリスターの組織であつた。

麓のティラスボルの街を拠点にしていた彼らはユリアン・ミンツを名誉党首として政

界に打つて出るために一度この村を訪れたことがあるが、現地住民の反対に遭い、やむを得ず代表を殺害して脅迫した後撤退した過去を持つ反帝人派や平和派とは別のベクトルの過激派であつた。

今、その団体が再びこの村に現れた。全バーラトウエンリスタ統一同盟結党に伴うウェンリスモの主流化に伴い、政界進出の好機来ると読んだのだ。

「全人民がこれから戦いに震えている！もう我々はローエングラムを恐れることはない！奴等が策謀しているのは明白だ！今こそ団結し対決するときだ！」

一団はけたたましく鳴り響く歌によつて近所迷惑をもたらしながら通りを進んでいき、やがて一つの家の前に止まつた。ユリアン・ミンツの隠居所とされている一軒家である。

「総員！革命の英雄ユリアン・ミンツに敬礼！」

団長らしき男がそう号令すると統一された綺麗な動きで団員たちは一軒家に向かつて敬礼した。

「党旗の設営作業にかかり！」

号令一下、男たちが車から旗、棒などを取り出し、各々設営に取り掛かつた。

十数分経つた頃、ミンツ家の玄関の前には統一同盟の旗が翻る2本のポールが立つに至つた。

「今日からここは全バーラトウェンリスタ統一同盟の物である！総員、万歳三唱！」

「万歳！万歳！万歳！」と党員たちは団長の鶴の一声で三唱した。これでミンツ家は統一同盟の事務所となつた。統一同盟万歳！民主万歳！自由万歳！革命万歳！国父万歳！

「ちよつと！あんたち何やつてんのよ！」

「団員たちが良いムードに包まれていて怒気を孕んだ若い女の声が響いてきた。アンナ・ミンツである。

「見ればわかるだろう。今日からここは全バーラトウェンリスタ統一同盟が接収した。「誰に許可取つてこんなもの立てているのよ！ここは私たちの家よ！」

アンナは旗がはためくポールを指差してそう言つた。こんな物があつては大迷惑だ。ましてやウエンリスモの象徴だつたら！

「こんな物とはなんだ！これは国父と民主主義の精神を示す旗だ。光榮だらう。」

「こんなの立てられる家の人の気持ちを考えなさいよ！これだからウエンリスタは苦手なのよ！」

アンナはこんな物！と吐き捨ててからポールに向かつて唾を吐きかけた。たちまち団長の顔に青筋が立つ。

「この小姑娘があ…!!国父の旗になんてことを…!!正義の鉄槌を喰らうがいい！」

団長は怒声を発してアンナの頬に拳の一撃を見舞つた。アンナは臆せずにきつ、と睨みつけた。

「なんだその目は！貴様！さては反民主主義者だな！矯正してや…」「や、やめるんじゃ！その旗を…その旗を飾るのは、やめるんじゃ！」

不意に上から老人の声が聞こえてきた。上を見ると老人が窓から上半身を出していた。

「ミンツ元主席…！」

「ヤン提督の肖像画を旗にするのはやめるんじゃ…」、個人崇拜に墮してはならん…、「個人崇拜に墮した民主主義は、民主主義ではない！ルドルフ大帝と同じじゃ！」

老人は声こそ弱々しいが団員、そしてひ孫に必死に訴えかけていた。その言葉の一つ一つにはかつて民主主義を守るために人頭に立つた英雄が出せる一種の貫禄という物が、まじまじと滲み出ていた。

「ひ、ひいおじいちゃん！そんなに乗り出したら…」

「わ、わしがこの村に引きこもつている間にこんなことになつてたとは知らなんだ！わしは最後まで責任を持つべきだったのじゃ…その旗を飾るのはやめよ！」

「そ、そんな…元主席がそんなことを言うなんて…」

「夢だ！これは夢なんだ！」

団員たちがユリアンの訴えを耳にして戸惑うものが少なからず出現した。それほど影響力のある人物だつたのだろう。アンナは自分が恥ずかしくなつてきた。

「ヤン提督はそんなことを望んでいない！その旗を飾るのはやめよ！その旗を……！」

老人の体が前につんのめつたと思いきや、数秒後には老人の体が宙に投げ出された。

「ひいおじいちゃん！」

老人の体は惑星ハイネセンの重力に従つて落ちていき、やがて……

軍楽隊が国歌を兼ねた党歌を演奏する。5月3日のハイネセンボリスの天気は日本晴だ。

一つの棺を中心に防衛隊の部隊が列を連ねて寄り添う。今日は一つの時代を駆け抜けた英雄の国葬の日である。

ユリアン・ミンツ。享年99歳。死因は転落死。民主主義の種をバーラト星系に植えた男は、あつけない最期を迎えるに至つた。

「不思議だね。ひいおじいちゃんはあの旗はやめろと訴えたのに、みんなあの旗を掲げてるや。」

アンナ・ミンツは葬列を見ながらぼやくようにそう言つた。隣の祖母マリアは先ほどから泣きつぱなしだ。

「…ひいおじいちゃんが最後まで言つていたヤン提督つてどんな人だつたんだろ。」

アンナは旗に描かれた一人の男の肖像画を見ながら、そう呟いた。ひいおじいちゃんはあの肖像画の男をヤン提督と言つた。曾祖父と関わりがあつたと言うことは間違いない。それも、英雄としての一歩を踏み出すほどに。

「…私、馬鹿だ。何にも知らなくて、感情に任せて。ひいおじいちゃんを最後までこんな奴呼ばわりしちやつた。」

アンナは俯きながらそう言つた。そして自分がこれまで曾祖父にしてきた仕打ちを心の中で恥じた。

「…ひいおじいちゃんはウエンリスターと戦つていたんだ。不条理と戦つていたんだ！それなのに…それなのに…!!私は…!!」

涙が溢れ出した。アンナは袖で何度も何度も拭つたが、どんどん溢れ出してくる。それは今まで彼女が曾祖父に伝えきれなかつた想いのようであつた。

「…私、決めたよ。シモンズ、そしてウエンリスモと戦つていくよ。そしてひいおじいちゃんが目指していた世界を、ヤン提督が目指していた世界を、私が作るんだ！」

彼女は目の前を通り過ぎて行つた曾祖父の棺を涙目で捉えながら、そう誓いを立てた。

誓いの言葉はその場にいた誰も耳にすることはなくハイネセンポリスの日本晴の青

空に消えていった。

或る提督の後悔

「また、この夢か…」

フェリックス・ミツターマイヤー元帝国宇宙軍元帥、御年81歳は時々見る悪夢から目が覚めた。最近はとりわけよくこの夢を見るようになった。もうそろそろ死期が近いのだろうか。

ゆっくりとベッドから出て寝巻きから着替え、洗面台に移動して顔を勢いよく洗つた。鏡を見るとどうも最近青白くなつたように感じられる。悪夢を見たからであることと歳のせいだから仕方ないだろうと彼は割り切つた。

寝室から出て食堂に行くと既に朝食が用意してあつた。数少ない使用人は別の仕事に取り掛かつたらしく、妻は死に別れ娘と息子は別居しているのでここで一人寂しく朝食を摂るのが彼の朝の日課である。

いつもはこの前に少しばかし日課のランニングを行うのであるが今日は生憎の雨であり、断念せざるを得なかつた。歳をとつても健康的な体であらねばならぬというローエングラム朝軍人の生涯のテーマであつた。

朝食の後は仕事に取り掛かる…というところであるが彼は軍を退役して年金で悠々

自適の生活を送つてゐる身である。今日は読みかけの本を片付けることにした。

元帝国元帥ともなれば支給される年金は莫大なものとなる。その額は一般的な平民の年収の十倍以上とも言われている。彼の養父、故ウォルフ Gang · ミッターマイヤー元帥以来の伝統だ。

さて食事を終えて自室に戻つた彼は机の上に伏せてある本、「ロイエンタール大提督伝」を手に取つて昨日最後に目を通したページから順に読み進めていった。

ロイエンタール大提督は彼にとつてとても懐かしい何かを感じる人物であつた。冷静にして沈着、緻密な戦略を練り、ただ一人の友とともに皇帝と帝国のために戦う。士官学校の門を叩いた時、彼が意識したのはこのロイエンタール大提督であつた。

士官学校を出て50年ほど軍で奉公し、その結果として自分はロイエンタール大提督に近づけたのだろうか。いや、まだ全然近づけてないだろうと彼は首を横に振つた。大提督は30代で名を残せたのに、自分が名を残せたのは60になつてからだ。あまりにも遅すぎると断じなければならない。

フェリックスはページを一枚めくつた。そこにはロイエンタール大提督の在りし日の姿が写真という形で一ページまるごと載つていた。

似ている。フェリックスはこのページを見るたびにいつも思うのだ。目を除けば明らかに若い日の自分にそっくりなのだ。

養父ウォルフガングは自分の本当の父のことをついぞ教えてくれなかつた。父とは似ても似つかぬのに可愛がつてくれた父はどうとう何も言わずに、あの日の晩に自分の息子に殺された。

：聞けば大提督は養父の友人で女性遍歴が多くあつたと聞く。自分はその時にできた子供の誰かしらの一人かもしねれない。

「やめだやめだ。深みにはまつてしまふ。」

彼はそう言つて本に葉を挟んでぱん、と閉じた。

ふと写真立てに目がいつた。そこには亡き父と母、自分、そして癖つ毛の金髪が特徴的な、到底父とは似つかない顔つきの亡き弟、ヴァルフラムがムスツとした顔で写真に写つていた。

(…あの時俺がヴァルフラムの異変に気づいてさえいれば、あいつに寄り添えてさえいれば、あんなことにはならなかつたのだろうか。)

フェリックスは亡き弟の、父を殺すに至つた心中に想いを馳せた。

ヴァルフラムはフェリックスが15の時にできた待望の弟である。この時の彼は予てから弟が欲しくて何度も両親にねだつたものであつた。

だが弟をその手に抱えた時の父の顔は喜びに満ちたものではなく、かえつて不機嫌そうな表情であった。今思えば、ここからがあの悲劇の始まりなのだろう。

父は何かとヴォルフラムに辛くあたつた。ヴォルフラムは頭が鈍く、成績が悪ければ激しい声で叱り飛ばし、時々だが殴られることもあつたという。

自分と比べられることもよくあつたという。尤もこれを知らされたのは弟の刑が執行されてからであつたが。

そんなことの繰り返しでどんどんと弟の成績は乱降下していき、とうとう父はヴォルフラムの顔を見るたびに叱り飛ばすようになったという。とうとう彼は耐えかねて引きこもるようになつた。

この時の自分は軍務に精を出しており、到底弟のことにかまつている暇はなかつた。気がついたら彼は引きこもつており、自分が実家に帰つても決して開けることはなかつたという。

：そしてあの日の晩。忘れる事のない新帝国暦35年9月12日の夜のことであつた。

ベランダから何か鈍いものが叩きつける音を聞いた自分は急いで駆けつけ、ヴォルフラムが父を殺したところを目撃したのである。

その時の彼の目と言葉が、未だに自分の心に染み付いて離さない。彼は濁つた目をしてこう言つたのだ。

「…兄さん、あんたはいいよな。俺がどんなに助けを求めても幸せそうな顔で知らんぷ

りだ。あなたが俺に励ましの言葉の一つくらい送つてくれたなら、こんなことにはならなかつたのにな。」

「弟は最後まで自分を信頼していたのだろう。最初に祝福してくれた自分を信じて、どんなに比較対象になつても、それでもと信じて助けを求めたのだろう。途端に自分が情けなく思えてくる。」

「思えば今の銀河の惨状も、弟が死刑で命を落としてから顕在化したものだ。弟の怨念が、銀河の全ての人間を呪おうとしていると思えてならない時がある。」

「いつしか自分が死ぬ時、それは弟の怨念に呑まれて死ぬことになるだろう。当然のことだ。自分は自己の満足のために弟を切り捨てたのだから。」

物思いに耽つていると、机上の端末から通話が来たことを知らせるコールが何回か鳴り響いているのに気がついた。フェリックスは慌てて通話に出た。

「…ミッターマイヤー元帥ですか。私です。ルーテンドルフです。」

自分に通話をしてきたのは懐かしい顔であつた。エルнст・アドルフ・ルーテンドルフ。自分が艦隊司令官に任命された時の最年少の幕僚であり、最終的には自分の艦隊の参謀長にまでのし上がつた男である。

「おお、お前か。この老骨に何か用でもあるのかね。」

「いえ、暇ができたものでしてな。恩義ある司令官閣下に久方ぶりにこうして電話をか

けたというわけです。元気そうで何よりです。」

「ほほう、それは殊勝な心掛けだ。だがお前は今や宰相閣下だろう。別にそう改めなくてもいいぞ。ああ、そうそう。」

フェリックスは懐かしい相手に気になつたことを話すことになった。

「お前さん、前々から邪魔だと言つていたケスラー閣を肅清したと聞いたが？ 昨日使用人たちはその話で持ちきりだつたぞ。」

フェリックスは電話の相手に厳しい口調でそう言つた。

「…ええ、その通りです。さすがは元帥ですな。耳の良さは衰えていないとみえる。」

「当然だ。まだ儂をなめるんじやないぞ。そのことを責めたいのじやない。やり方の問題だ。お前さん、厳密な定義を付けずにケスラー閣全てを帝国アハト刑にかけただろう。」

フェリックスが責め立てる口調で言う。帝国アハト刑、それが意味することは相手を何をしても良い存在にしてしまうということである。それがどういう意味を持つのか。「九百六十万。今回の件で被害を受けた人数だ。死者は百万を超えるのは確定事項だな。：お前さん、これだけの人数を傷つけて一体何をしたい？ 国家の諸機構とは、究極的に言つてしまえば国民を守るためのものだ。国民を傷つけてまで一体何をしたいんだ？ まさかアウグスト流血帝になりたいというだけでやつたのではないだろうな？」

フェリックスは間断なくルーデンドルフを責め立てる。その言葉の一つ一つには不甲斐ない部下に対する怒りが滲み出ていた。艦隊の時はこのような不甲斐なさはなかつたのだが。

「……ノイエ・シュタウフエン公の如くせよ、と勅令にありましたので。私はそのようにしただけです。」

「ほう？ 勅令にそのようなことが書いてあつたからそうしたのか。だが勅令を引き出したのはお前さんをはじめとする国家維新評議会だという噂だぞ？ そのことについてはどう言い訳するんだ？ ん？」

電話の相手は数十秒黙つた後、口を開いた。

「……我らの大義、ローエングラム朝の改造のためです。大義のために彼らは不要だつたのです。いわば必要な犠牲というやつです。」

「……ほう、不要とな。必要な犠牲、とな。」

フェリックスは少しばかし考へる仕草をした後、頭で構築した言葉を口に出した。

「儂の艦隊の幕僚たち。あいつらを覚えておるか？」

「ええ、昨日のように覚えております。」

「あの幕僚たちはな。お前さんのような過激派からシユツツラー後方参謀のような穏やかな人間までいろんな人間がいた。それで儂の艦隊は回っていたというわけだ。」

「ええ、アムリツツアから新領土の果てまで。懐かしい思い出と共に過ぎましたな。」「儂含めたあやつらがもしも国家維新評議会の大義とやらの邪魔になつたら、容赦なく消せるか?」

ルーデンドルフは驚いたような唸り声を上げてから2、3秒ほど間を開けて、「…もし我らの邪魔になるようでしたら、容赦なく排除させてもらいます。我らの大義、ローエングラム朝の改造の邪魔になるのでしたら。もつとも、司令官閣下に限つてはそういうことを願いますが。」

と回答した。

ふーん、とフェリックスはルーデンドルフの回答を吟味した。

「…お前さん、変わつてないな。一つの信念のためならどこまでも正面からぶつかつていつた。たとえその相手が儂であつたとしても。」「でしたら…!!」

「だがな、儂はそういうところを直せと言つたんじやぞ。融通の悪さはいつか破滅を生むと。腹芸を覚えろと。そうすればお前さんの望みに近づけるとも言つたぞ。」

フェリックスは若い頃のルーデンドルフを思い出した。彼は正義感が強く、ことあるごとに不正を糾弾していき、自分を含む上司たちと積極的に論を戦わせていた。今もまたその気持ちに立ち返りかけていた。

「なあ、お前さん。お前さんらの大義であるローエングラム朝の改造という大義は誰のためのものだ？陛下か？国民か？おそらく正義感の強いお前のことだから両方だろう。だが大義のために犠牲を強い続けてみろ。：行き着く先は大義すら忘れた修羅の道だぞ。」

地球教のアーカイブか何かで見た戦の神の名を挙げてフエリックスはルーデンドルフのあり方を糾弾した。上のものが間違いを指摘してくれること、それはある意味幸運なことである。フエリックスはそれを怠つた故に修羅に至つた一人の男を知つていた。

「…ツ！」

「今のお前さんの在り方、そして国家維新評議会の在り方を今一度見直してみるんじやな。国家維新評議会が、帝国が修羅の道へと行かないためにも。もう通信料がもつたらないので切るぞ！」

フエリックスはそう言つて一方的に通話を切つた。通話を切つた後、彼は自分の部下だつた男のことについて物思いに耽つた。

（…もしヴォルフラムの頭が鈍くなかつたら、間違いなくルー・デンドルフになつていただらうな。）

彼は自分の部下に弟の影を見出し、そして深くため息をついた。

新帝国暦82年6月の雨は、相変わらず続いていた。

張り子の部隊と司令官

「あーあ、なんで仕事場に行くたんびに国父の顔を拝まにやならんのだ。」

ヘンドリック・ファン・リーベック防衛隊大佐は惑星バーラト星系中縁部に存在する宇宙艦隊の基地である小惑星帯宇宙港にて掲揚されている三色旗に国父の肖像画が象どられた新国旗を見ながらそう思つた。

こここのところ、といつても彼にとつては生まれてからずつとあるが、国父崇拜が加速してきたと常々思つてしまつ。前述のような国父の肖像画付き国旗はもちろんのこと、公共施設への国父肖像画及び胸像の設置の義務化、公共事業とうそぶいた国父廟の大改築計画、國父ヤン元帥の語録の役所での配布など国家ができる限りの力を使って國父ヤン・ウンリーへの帰依を奨励しようとしているかのようであつた。

無論民間でも國父信仰は前にも増してヒートアップしており、24時間戦えますかを謳つたドリンク剤や薬用酒のパッケージはもちろん、「日常でも使える！ヤン元帥と楊家将の言葉！」や「ヤン元帥・楊家将占い」、「就職に使える！國父に学ぶ面接」と題された本を見た時は流石にちよつとのことでは動じないヘンドリックも思わずドン引きしたほどである。

まあそれはともかくとして。彼はどつちかというとこの傾向に対してあんまり好ましく思つていなかつた。自由主義、民主主義国家の精神である個人崇拜の否定に反するし、なによりも何か宗教国家っぽくて抵抗感がある。ユリアン・ミンツも個人崇拜を批判して死んだっぽいではないか。

「まつたく、いつの間にバーラトは宗教国家になつたのだが。」

ちなみに彼が国父の部下である楊家将の中で一番好きな人物はパトリチエフ副参謀長である。

そうこうしているうちに目的の建物、彼の部隊である新設艦隊の司令部に到着したようであつた。ここも相変わらず三色の国父肖像画が自動空調設備に反応して元気にはためいていた。

「整列！ ヘンドリック・ファン・リーベック大佐に、敬礼！」

正門から建物に続く道に何人かのライフルを抱えた兵士たちが新司令官を迎えるために整列しているようであつた。

「こりやまた俺如きにおおげさなことをするねえ。」

ヘンドリックはなんだか小つ恥ずかしくなつてきたかのようで、後頭部を右手でボリボリと搔きながら弱々しい足取りで建物の中へと入つていった。

建物の内部は小綺麗に整つていた。ヘンドリックはこれまた敬礼してきた受付の兵

士に敬礼を仕返すと、指定された場所、作戦会議室に続く道順を示されてそのように従つた。

エレベーターで上方に昇つて数十秒ほど。ヘンドリックはエレベーターを降りると長細い廊下を歩いて行き、やがて一つの部屋のドアの前に立つた。

「…はあ、これで俺も名実共に司令官様か。ああ、めんどくさいなあ。あんま何もしかつた非常勤参謀時代が懐かしい。」

そう言つてから彼はドアノブに手を伸ばしてそれを回し、部屋の中へと入つていった。

作戦会議室には見慣れた顔一名を除いてほぼ知らない顔ぶればかりであつた。まあヘンドリックは新任の司令官であるから当たり前なのであるが。見知った顔一名と見知らぬ顔数名が彼の方を見た。

「…あー、えーとだな。新しくこの部隊の司令官に就任した者なんだが…集まる場所、ここで合つてる?」

「合つてます。」

ヘンドリックの質問にキツパリと返事をしたのが中尉の階級章を帯びた、ストレートボブに切り揃えられた黒髪が特徴的な女性士官であつた。

「…呆然としているで早いところ部屋に入つたらどうです? 正直言つて時間の無駄で

す。」

ヘンドリックが呆然としているのを見抜いたのか、彼女はこれまた手痛い言葉をヘンドリックにぶつけた。ヘンドリックは促される形になつたが部屋に入つた。ヘンドリックは机の空いているスペース、一番上座に当たる場所に移動すると、少し咳払いをしてから自己紹介をした。

「あー…初めてまして。私がこの新設した部隊の初代司令官を拝命させてもらつたヘンドリック・ファン・リーベック大佐である。まあ正直自慢できるものと言えば士官学校の学科を首席で卒業したくらいなんだが…まあ、任期を通してだな。ワイドボーン提督にならないくらいには頑張っていきたいと、私は思う。ので幕僚の皆さん、よろしくお願ひします。」

全くめちゃくちゃなスピーチだな、と彼は自分の言つたことを心の中で突つ込んだ。
「まあそんなにかしこまらなくとも。気楽にやればいいと思いますよ。初めまして。参考長のコンラッド・エイブス中佐です。」

コンラッド・エイブスと名乗つた気弱そうな眼鏡の中年男がこちらに右手を差し伸べた。ヘンドリックは両手でそれを受け取つて何回か上下に振つた。

「司令官職は初めてと伺いましたが…」

「ええ、お恥ずかしながら。前任は本星軌道警備小艦隊の参謀でした。」

「ほう、本星のほうの。私は以前防衛衛星部隊の隊長を務めておりましてな。まだノウハウが足りないでしよう。何かあつたら存分に聞いてください。力になりますよ。」

「はあ。ではお言葉に甘えて。」

次に握手を求めてきたのはキツネのような印象を与える男であつた。

「あなたが新任の司令官で？ 情報参謀のティードリヒ・ハウス。階級は少佐です。」

ヘンドリックはまたも同じく両手で手に取つて何回か上下に振つた。

「私司令と同期なんですよ。まさか首席が入つてくるなんて。」

「え？ そうか？ そういうやちらつと見たことがあるような…まあよろしく頼むよ。」

次に握手を求めてきたのは見たことがある顔、悪友イグナシオであつた。

「お前本当にこの艦隊の後方参謀になつたんだな。」

「おうよ。それにしても、お前あのスピーチはないと思うぜ。途中で敬語になつてたしよ。」

「よせやい。緊張してたんだ。」

その後もヘンドリックは握手を求める幕僚たちと握手をするのに必死であつた。一番若手の作戦参謀のダミアン・フランソワ大尉、温和なおばちゃんを思わせる人事参謀のチョウ・フーチエン少佐、へちやむくれた顔だが根は温厚な通信参謀のシロウ・ヒフミ大尉など、この場にいるのは一般幕僚だけであつたが個性豊かなメンツであるとヘン

ドリックはそう思つた。

そして最後の一人。

ヘンドリックは後ろに向き直つた。先程のストレートボブカットの中尉が相変わらず厳しい目つきでこちらを見ている。

「ああ、その子は新しく副官になつたハルナ・エイカーズ中尉といつてな。お前副官はせめて能力が高い奴がいいとリクエストしただろ。そんで参謀長の部下の中尉に白羽の矢が立つたの。」

参謀長にありがとうと後で言つておけよ、とイグナシオはそう付け加えた。イグナシオはリクエストに応えてくれたようだが：いかんせん性格が厳しい。もうちよつと優しい奴がいいと付け加えればよかつたかな、とヘンドリックは日頃から身についた自分のものぐさを深く呪つた。

「あー…君が新しく副官になつたエイカーズ中尉だね？ ヘンドリック・ファン・リーベック大佐だ。長い付き合いになるかも知れないが：いや、それとも短い付き合いになるのか？まあ、よろしく頼むよ。」

ヘンドリックはそう言つて右手を差し出した。エイカーズは疑うかのような目でヘンドリックの顔と右目を吟味すると、彼の右手を手に取つた。

「…言つておきますが。」

エイカーズは冷たい口調で何か言いたげそうにそう言つた。何か文句があるんだろ
うか?とヘンドリックは訝しんだ。

「私はあなたをまだ司令官とは認めていません。第一、あなたは全体的に緊張感、威厳が
無さすぎます。もし少なくとも私に認められたいのであれば、まずそこを治すようにし
てください。」

エイカーズはそう言つてから手をスッと離し、踵を返して定位位置についた。
(全く、手厳しいお嬢さんだな。まつ、期待できそうな人材らしいし、慣れていくしかな
いか。)

ヘンドリックはこれからある程度の付き合いになるのは間違いないであろう副官の
横顔を見ながら、これから前途にため息をついた。

「…何見ているんですか?」

「ああ、すまん。」

前言撤回する。今を含めたこれから前途に彼は大きくため息をついた。

「ところでイグナシオ、部隊の司令官に就いたのはいいが、俺は何をすればいいんだ?
「俺に聞くなよ。隣に優秀な副官がいるだろ?」

宇宙港に繋がる道でヘンドリックとイグナシオ、そしてエイカーズの三人は並んで歩

いていた。というのもどうも早速この部隊に艦艇が配備されていたらしく、それがどのようなものであるかを検分するためであつた。

「どうわけだ。エイカーズ中尉、俺は何をすればいいんだ？」

エイカーズは振り向いてヘンドリックの目を一通り見つめた後、

「大体は書類業務とお考えください。後は実際に宇宙空間に出て慣熟航海、戦闘訓練も行います。定期的に隊員の慰撫もお忘れなく。」

と言つて振り向いてしまつた。

「だとさ。書類は慣れっこだが実際に動かなきやならんらしい。」

「運動だと思えばいいさ。気が楽になるぞ。」

「そうするかあ。」

ヘンドリックはサラゴサとそんなことを話しながら歩いていた。

歩いているとやがて宇宙港にたどり着いた。すでに何隻かの戦闘艦が入港しているらしく、慌ただしい様子であつた。

「…あれ全部新造艦だと聞いたが？」

「全く、軍拡を行うというのは本当だつたらしいな。見た限りだと二百から三百ほどか。」

ヘンドリックとイグナシオは港に停泊している艦艇群を見ながらそのようなやりと

りを行なつた。やはり政府は軍拡志向らしい。

「噂ではもつともつと増やすらしいぞ。何しろ、政府は帝国と真正面から対決する気らしい。」

「うへえ、防衛費持つかなあ。年金カットということになつたら官邸前で座り込みしてやる。」

シモンズ政権は一体何をやらかそうとしているのか。二人は他愛のない話をしながらそのようなことを思った。

：そういうえばこの部隊には何隻程が割り当てられているのだろうか。ふとヘンドリックはそこら辺が気になつた。

「なあ、エイカーズ中尉。ここに停泊している艦艇のうち一体何隻が我が部隊に」「この区画に停泊している艦艇253隻すべてです。内訳は旗艦含む戦艦26隻、巡洋艦82隻、駆逐艦145隻です。」

即答であつた。まさか全部が自分の指揮下に入るとは。

「もつともこれは現時点での数値であり時が進むに従い数を増していきます。」

ヘンドリックの耳にさらなる追い討ちがかかる。今の数だけでも苦労しそうだというのに、さらに増えるだつて!?

「おいイグナシオ、どうしよう。俺こんなにも指揮できる自信がないよ。さらに増えて

いくんだぜ？もう心折れそう。」

「大丈夫だ。俺も心が折れそうだ。主に業務の面でな。」

ヘンドリックはそう言つて慰める悪友の顔を見たがこちらよりも余裕そうだ。

(体力のあるやつはやっぱり違うなあ)

とヘンドリックはそのように思つてしまつた。

改めて港を見回して、ひと回りほど大きい艦船が目に入つた。もしかしたらあれが：「エイカーズ中尉、あそここのひと回り大きい船だが……もしやあの船が」

「ええ、あれが旗艦『ユリシーズ』です。通信能力が高められており大艦隊の旗艦としても十分機能します。」

「ユリシーズとはまた縁起の良い名前だなあ……」

『ユリシーズ』。その名前は自由惑星同盟、イゼルローン共和国において燐然と輝く名前である。撃沈することなく動乱の時代を駆け抜け、国父の旗艦にもなつたことがあるたいへん縁起のいい名前である。

(絶対あれ象徴として建造されたものだよ。)

ヘンドリックはトイレに駆け込みたくなる衝動を必死になつて抑えた。

しかし、大艦隊の旗艦としても十分通用するとエイカーズ中尉の言葉が気になつた。もしかしたら、政府は本当に大艦隊を作り上げる気かもしれない。かつてのイゼル

ローン共和国の規模は間違いないだろう。：もしかすると、最終的には自由惑星同盟に匹敵するほどの戦力を指向するかもしれない。

（そうだとしたら多分無人艦を増やすか省力化に注力するんだろうな。絶対バーラト星糸じや支えきれん。しかし経済基盤が気になるところだな。）

ヘンドリックは艦艇群を眺めながらこれからのバーラトの行く末に深く想いを馳せた。

宇宙暦881年7月30日。疫病とテロリズムの混乱に喘ぐ帝国の目を縫つて一つの艦隊が誕生した。

艦艇数は253隻の小艦隊であるが、この艦隊がヘンドリック・ファン・リーベック共々後の銀河の歴史に大きく関わっていくこととなる。

バーラト自治共和国軍第一独立艦隊「ヤン・イレギュラーズ」。この艦隊は今日をもつて深い闇に向かう歴史に産声を上げた。

新参謀長就任

「おお、素晴らしい…」

この度新しく新領土駐留艦隊の参謀長に就任したテオドール・デイルревアンカー准将はとあるものを見ながら感嘆の声を上げた。

「この緻密な書き込み、そこから生み出される圧倒的な質感、醸し出す神秘性：何から今まで素晴らしい…」

デイルревアンカーは趣味として美術品の蒐集を行つてゐる。彼がそこまでいうのならそれはきっと素晴らしいものだ。

「国家維新評議会はいい仕事をしてくれた。ここまで素晴らしい描き上げてくれる絵師を探してくれたとはな。にしても本当に素晴らしい…」

彼は目をつぶつて絵の魅力を存分に堪能すると目を見開き、改めて彼が称賛してやまないとあるものを見た。

「やはり一流の画家によつて描かれた太祖！これこそ真に帝国に必要なものであつた！まさしく大神が眼前に現れたようである！」

デイルревアンカーの眼前、そこには大きく飾られた太祖の肖像画が大きく飾られて

いた。

共和主義者が国父信仰を大きくアピールしたのと同時期、帝国でも同じような試みが行われた。即ち太祖ラインハルト大帝の個人崇拜の一般化の試みであった。

最もこれは分断が著しい帝国では至極真っ当な政策であり、いつか必ずどこかの時点に行わなければならなかつたものを、国家維新評議会が今となつて行つたのだ。

ケスラー閣を肅清した国家維新評議会は6月の勅令で「太祖ラインハルトは分かたれた銀河を一つのものとするために現れた大神オーディンの地上における化身、現人神である」と定義し、その御影を表した肖像画、胸像類の設置の奨励と各地に大帝と7元帥の像の建立、皇宮と各種離宮に巨大大帝肖像画の設置などを行つた。ここで障害となつたのが大帝の等身大以上の銅像を建立してはならないという勅令であつたが、像部分は大帝の体格ぴつたりに作られていること、大部分は台座部分であること、何よりもその主たるものは肖像画であることを理由に適用されないという決断を評議会は下した。

デイルревアンカーが感嘆の念を抱いているその肖像画もそのような政策のもとでバーミリオンの総督府に隣接された新領土駐留艦隊司令部のホールに飾られているものであつた。

その様子を苦々しい目で見て いるものがいた。同艦隊の司令官であるアルブレヒト・ゴルツマイヤー大将である。

ゴルツマイヤーはいつの間にか良民扱いされていた新領土の亡命者家庭の出身であり帝国本土と比較して大帝への馴染みが少なかつたため、新しく就任した参謀長が何が良くて肖像画を眺めているのかが全く理解できなかつた。

この肖像画を設置したのはあくまで憲兵隊を引き連れた内務省官僚に「要請」されたからであり、このような男を喜ばせるために設置したわけではない。

「…参謀長、今まで大帝の肖像画を眺めているのかね。かれこれ一時間はそうしているぞ。」

耐えきれなくなつたゴルツマイヤーはついに参謀長に文句を垂れた。ディルレヴァンカーナーの怪鳥を思わせる顔がこちらを向くと、数瞬後には顔を歪めた。

「提督、美しいものを美しいと言つてこそ人間であります。ましてやオーデインの化身たる獅子大帝の御影。まさしく至上の美であります。それを称えてこそ初めて帝国人なのです。称えない者は帝国アハト刑に処されても仕方ない。」

こう言つたことを真顔で言つてくるから彼は問題なのだ。ゴルツマイヤーは深く頭を擡げた。能力こそは高いのだがいかんせん思想が過激だ。帝国内の分断を招いているのは、実はこの他の者を認めない態度ではないのか。

「分かった。分かったから。君はとある情報を報告しにきたのだろう。大帝の美しさに見惚れるのもいいが、業務を忘れては困る。」

デイルレヴァンカーはまたしても嫌そうな顔をするとすぐに切り替えたのか真顔に戻り、司令官のデスクに幾つかの書類を置いた。

「情報部が面白い情報を掴みましてな。ここから3・6光年先の星域に関するところで、どうも彼らは極秘に新造艦を建造しているとのことで。」

「再武装路線に舵を切つたか。政権交代があつた時から何か行動を起こすと思つていたが。」

バーラトの再武装路線は政権交代の時からいつか起ころうと踏んでいたことである。だが彼はそのことをある意味楽観視していた。

昨今の「リツテンハイム海賊艦隊」をはじめとする艦隊規模の兵力を持つ海賊がよく航路上に出現するのは日常茶飯事と成り果てたことである。バーラトの増強された兵力はある意味心強い側面もあつた。何せ、正規軍を動員せずして海賊に当てることができるのだから。彼らはいまだに帝国に逆らえない。

「こちらから遺憾の意を出せばそれで済む問題ではないのかね。逆に心強いではないか。海賊に当たられる兵力が多くなるのだからな。」

「甘い！ それでは甘すぎる！」

だん、とデイルレヴァンカーはデスクに両の手を叩きつけた。顔は軟弱な意見を捻り出した司令官に対する怒りが滲み出ている。

「このまま共和主義者をのさばらせておけば帝国の分断が加速することは明白！絶対に帝国内での発言力を増やすための軍拡であります！彼らをこれ以上增長させぬよう強硬策に打つて出る必要があると、小官は愚考します！」

「…具体的にどのようにだ？」

「ジョリオ・フランクールの如くするのです！奴らの持つ全ての財を、艦隊の兵装で全て焼き尽くすのです！」

全く、口で言うのは簡単だなとゴルツマイヤーは思った。バーラトのこととなるいつも彼はこのような強硬策を提案する。

「現実的ではない提案だな。」

「なんですか!?」

デイルレヴァンカーはこれまで机をばん、と強く叩いて抗議した。

「…君の主義主張のためにわざわざ艦隊を動かすのかね？軍隊とは巨大な官僚組織というふことを忘れてはいるわけではないだろうな。」

ゴルツマイヤーはそう言つてから一旦コーヒーを一口呑んだ。

「次に、だ。メリットがない。新領土全体を無闇に混乱させるだけでなく経済が混乱している我が帝国の大手な収入源であるバーラトを態々焼くというのはどういうわけか分かつて言つているのだろうな。」

これは事実である。帝国経済が混乱した今となつてはバーラトの賠償金と駐留料、そして高関税は空っぽの国庫を潤す貴重な収入源だ。

「最後に、だ。今我が艦隊で疫病が流行つてるのは君も知つての通りだろう。それを無視して君は艦隊と地上軍を進発させろと言つてはいるのかね？ 多大な犠牲が出る行軍となるな。」

ブラウンシュヴィアイク熱の脅威は新領土にまで届いていた。すでに提督の知る範囲でも一部の艦船はこの脅威の病原体のため動けないことを強いられており、無理矢理動かすことがあつたら脱落間違いなしだろう。

「第一、バーラトは自治を認められているとはいへ我が帝国の領土。陛下の所有物である帝国の領土を、これまた陛下の財産である艦隊で焼いて、どう陛下に申し開きするのかね？」

デイルレヴァンカーの顔がだんだんと真っ赤に染まる。時々こう冷静さを欠くところがあるので、この機に是非とも直してもらいたいものだとゴルツマイヤーはそう思つた。

「今回の件については弁務官による警告と遺憾の意を表明するだけにとどめておく。これはすでに総督と話し合つた上での決定だ。艦隊の参謀長如きがねじ曲げられる決定だと思うなよ？」

デイルレヴァンカーは何かをぶつぶつと言うと、踵を返して扉を乱暴に開けて執務室から出て行つた。

ゴルツマイヤーはそれを見ながら飲みかけのコーヒーを口に含んだ。

しばらく経つと彼と入れ替わりで一人の男が書類の束を持つて執務室に入ってきた。これまた新しく着任した副官のヴィンツェンツ・シュミット中尉である。

「提督、新しい書類を持ってきました。目を通しておいてください。」

「ああ、ありがとうございます。にしても、君も苦労しているな。私の副官に加えてあの参謀長の監視業務も兼ねているのだろう。辛くはないかね？」

「いえ、こういう兼業は慣れきつているので。ご心配ありがとうございます。」

「いや、いいんだ。ああ、そうだ。今度幕僚全員で君達の歓迎式を開こうと考えているが、どうかね？」

「それはいいですね。でもしつかり感染症対策を行つてくださいよ？全滅なんてことになつたら目も当てられませんから。」

「はは、そうだな。」

新しく着任した副官と一通り会話をすると、ゴルツマイヤーはシュミットが持つてきた書類の一つを手に取つてじつとそれを眺めた。どうもまた感染者が出た艦船が増えたらしい。艦船のしばらくの隔離を求めたその書類を彼は軽くサインした。

全く、なかなかいい副官を寄越してくれたじやないか。ここだけは中央に感謝するのであつた。

「畜生！大義を知らぬ蒙昧めが！新領土を守る将帥があの有様であるとはな！」

デイルレヴァンカーは基地の廊下を歩きながら自身の司令官に向かつてそのようなことを毒づいた。

全く、ここに着任してからいいことが何一つない。

司令はあるのような人物であるし、幕僚や部下からは何か若干引き気味に対応されし、なによりも同じく新しく着任した副官がよりもよつてオーデインで説教をかましああの非愛国的な将校だつた！

「蒙昧どもが！何のための帝国軍か！陛下の手となり足となり、帝国に立ち塞がる脅威を粉碎するのが帝国軍の役割であろうが！」

そのようなことを毒づいていると誰かとぶつかつたようだ。どうも歩哨の一人であつたらしい。デイルレヴァンカーはきつ、と睨みつけると歩哨はひいつ、と情けない声をあげて早足で立ち去つて行つた。

（全く、歩哨であつてもあの有様だ。ほんのこれしきのことで情けない悲鳴を上げる！）

デイルレヴァンカーはさらに早足で廊下を歩き、やがて一つの扉をくぐつた。扉の先

は全面ガラス張りの休憩室であつた。

彼は自販機で適當な飲み物を買うと椅子にどんと座り、星空を見据えながら飲み物に口をつけた。

星空にはひとぎわ輝く忌々しい一等星がその存在感を誇示していた。ここから3.6光年先の恒星バーラトである。

(忌々しいバーラトめ！共和主義者の星め！見ていろ！いつかあの星をゴキブリすら住めぬ星に造り替えてくれる！)

彼は親の仇を見るが如く目で3.6光年先に横たえるその忌々しい一等星を睨みつけた。

エル・ファシルにて

「バーラト人を殺せ！バーラト人を追放しろ！帝国人を殺せ！帝国人を追放しろ！」熱狂がその場で渦を巻いていた。反帝国、反バーラト、自国第一主義を掲げるエル・ファシル民族独立革命党の支持者によるデモである。

新領土、とりわけエル・ファシルにおける反帝国、反バーラトの機運は他のそれと比較して目に余るものがあつた。ある意味それも当然かも知れない。帝国からは高関税、高額の軍隊駐留料を課せられ、民衆の懷柔のために残された自治議会は総督の諮問機関以上の意味合いを持たず、何よりもその総督が帝国の価値観を押し付けるような政策を行つのである。エル・ファシル人は傲慢な統治者に怒り心頭であつた。

一方反バーラトの機運は歴史的なものであつた。忘れもしない80年前、エル・ファシル独立政府の時代であつた。エル・ファシル民衆の心にも燐然と輝く同政府の革命政府の司令官ヤン・ウンリーが暗殺された時、ユリアン・ミンツを始めとした彼の不肖の部下たちはあろうことか主席フランチエシク・ロムスキと代表団たちの遺体を置き去りにしたのだ！その上イゼルローン要塞を占拠し勝手極まる軍閥政府を打ち立てるという暴挙に打つて出た。

エル・ファシルはこの時から見捨てられたのだ！バーラトからも、民主主義からも、誰からも！その上に彼らはバーラトに民主主義の自治共和国を打ち立てたのだ、これが許せるか！いや、許せない！

この時以来から80年の時をかけて醸成されたエル・ファシル人の二つの国家への恨みつらみは、一つの政治的運動を生み出した。それこそが狂信的な自国民第一主義を掲げ、手段を問わず総督府を撃滅しようとするエル・ファシル民族独立革命党である。

軍服を思わせる党制服を着込んだ男たちが十字架を掲げて隊の先頭を行進する。そこに立てかけられていたのは全裸にされていた人間である。彼らはバーラトから出稼ぎや学業のためにエル・ファシルにやつってきた者たちであり、彼ら独立革命党にとつては「ゴミ屑にも等しい」者たちであつた。

「総督府の諸君！議会の諸君！民衆の諸君！隊列の先頭を見よ！十字架にかけられた者たちを見よ！この者たちこそゴミ屑にも等しき存在、存在してはいけない存在、生まではいけなかつた存在たち、ウエンリスタである！バーラトは、労働者と偽つてウエンリスモ革命を起こすための工作員を送り込んできたのだ！」

メガホンで増幅されたダミの利いた声がそちらじゆうに響き渡る。党首アルフレート・ヒムレーのものである。バーラトは確かに工作員を送り込んではいるが十字架にかけられた彼らはそんなものとは関係なく、濡れ衣を着せられた者であつた。

「活目せよ！これより我らは彼らに對して裁きを下す！彼らより流れたる穢れた血によつて改めて自らが行つた罪を認識するが良い！」

党首がそう演説すると十字架の隣にいた党員たちに槍を構えるよう指示が飛んできた。彼らが槍を準備するとすかさず突き立てるよう指示が飛ぶ。

彼らは槍を十字架に架けられた哀れな者たちに突きつけた。たちまち血飛沫が飛び、老若男女問わない叫び声が辺り一面に轟いた。党員たちは笑みを浮かべながら何度も彼らを槍で突き立てた。デモ隊はこれを見てさらに狂乱の叫びを上げた。

「見たか！まさしく今、バーラトの穢れたる血が母なるエル・ファシルの地を穢したその瞬間を！総督府の諸君よ！議会の諸君よ！これ以上母なる地を穢したくないのであれば！愛着を持つのであれば！バーラトに対する經濟制裁を断行せよ！さすれば我らは先頭において穢れたる血を大地に流すことはないであろう！」

ヒムレーがダミ声をがなり立てる。デモ隊はさらに狂乱した。熱狂はしばらくは続きそうである。

「君！何をしているのかね！さつさと鎮圧命令を下したまえ！」

エル・ファシル総督グスタフ・シユリーダーは机を両拳で打ち付けながら眼前の男、ナサニエル・ミドルトン陸上警備隊中将に鎮圧するよう叫んだ。太り気味の顔には、若干

の脂汗が浮かんでいるのをミドルトンの目は捉えていた。

「お言葉ですが総督、彼らは正式な手続きを踏んでデモ活動を行なっています。新領土における政治活動に関する規定3条によれば登録政治団体による届け出を出したデモは原則として認められるとありますが。」

「あんなのは新領土民を落ち着かせるための方便に決まつていると知つてているだろう！このまま暴動にまで発展しては総督、皇帝陛下に何と弁明すれば良いのかわからん！どれだけ犠牲が出てもいい、鎮圧しろ！いいか！これは命令だ！」

総督はナサニエルにそう言うと頭に手を当てて何かをぶつぶつ言い出した。小心者のこの総督のことである。どう弁明すれば良いのかを必死になつて考えているのだろう。心なしか脂汗が先ほどよりも多くなつたように見受けられた。

「…分かりました。報告によれば死者も出ているとのこと。警務局に機動隊の派遣を要請しておきましょう。」

ナサニエルは机上で震える総督に対し、そう言つてから総督執務室から出て行つた。

ナサニエルは廊下をしばらく歩いて行つて一つの部屋、総督府に備え付けられた喫煙室に入ると胸ポケットからタバコを一本取り出して口にくわえ、火をつけた。

(…全く、新しく就任した総督はこの体たらくだとはな。やはりどれだけ優秀と言えども本領と新領土では要求されるものは全く違うものらしい。)

ナサニエルは口から煙を吐き出しながら新しく就任した総督に對して心の中でそう毒突いた。帝国人には権利というものが分からないらしい。早速戦車や歩兵でぶつ殺せと命令してくるとは。

前の総督がケスラー閣だとかいう派閥の疑いをかけられて解任され、その後任としてあの小太りの男が就任してから、ナサニエルが摂取するニコチンの量が増加した。エル・ファシルの現実が見えていないようでことあることにぶつ飛んだ政策を乱発しているのだ。先程の軍隊による鎮圧命令もそうである。

「全く、あんな男でも従わないといけないとはな。軍人つてのはろくなもんではない。」

彼はまたニコチンを摂取して、煙を吐き出してからそう呟いた。

「何もそこまでいうもんじやないと思いませんよ。あんなんだつて自治議会は尊重しています。」

不意に横から声が聞こえてきた。振り向くとそこには宇宙警備隊の制服を纏つた

飄々とした雰囲気の顔の良い男がいた。階級章は大佐のものを佩用している。

「フイリップ・ヴァロア大佐か。人の呴きに応えるのはやめてもらおうか。悪い癖だぞ。」

「いやねえ、何か意味深なつぶやきをしているなら応えたくなるというのが人の性ですよ。少なくとも、私にとつては。」

「フイリップ・ヴァロアと呼ばれた男はそう言うとポケットからタバコの箱を取りだして一本口にくわえた。

「我々は少なくとも限定的ではありますが民主主義が認められた土地の人間です。政府が曲がりなりにも何か間違いを犯したとき、一人の人間として考えた上で抗議する。それこそがこの国の軍人のあり方というものじやないですかね？」

「…いつものロムスキー・ウェンリスモか？それは公務員の考え方でないとは何度も言つてゐるはずだが？」

「自分はなかなかいい考えだとは思うんですがねえ。ヤン元帥の真髓を言い表していて。」

ヴァロアはそう言つてライターを取り出し、タバコに火をつけた。

ロムスキー・ウェンリスモはエル・ファシルで発達したウェンリスモであつてウェンリスモでないもの、もう一つのウェンリスモと言えるものであつた。それは軍人の規範として成立し、今日に至るまでエル・ファシル警備隊軍人のあり方として定着して行つた。

勘違いしてはならないがエル・ファシル人は郷父ロムスキーと共に民主主義を守るために戦つたヤン・ウェンリー本人は敬愛している。問題なのはそのあり方を歪めたユリアン・ミンツをはじめとする不肖の後継者たちなのである。

「俺はあまり気に入らんな。ヤン元帥は跳ねつ返りだつたじやないか。跳ねつ返りは少なくとも軍隊にはいらん。」

「異端はどこにいても一定数は必要ですよ。道を違えた時にもう一つの道を示せるのは他ならぬ異端ですから。」

「…どうだが。出る杭は必ず打たれるぞ。今の帝国はそれをやる気が満々だ。」
ナサニエルはロムスキー・ウエンリスモを気に入らない人間の側であつた。軍隊、ひいては公務員とは政府の決定に黙々と従わなければならぬ存在である。その中に異端を植え付ける思想など、決してあつてはならない。

「そう言つた意味で組織に異端を生み出す思想はやめておいた方がいいぞ。いつか圧倒的な力に潰されるのがオチだからな。」

ナサニエルはそう言つて吸い終わつたタバコを備え付けの灰皿の端に押し付けて、程なくして放り込んだ。

「…忠告ありがとうござりますよ。先輩。でもまあ、可能性の一つとして頭の片隅に入れておいた方がいいとは思いますがねえ。」

「…」

ナサニエルは何も言わずに喫煙所から出て行つた。

(全く、とんだ後輩を持つたものだな。まるでアツテンボローだ。)

ナサニエルは再び廊下を歩きながら、自分の後輩のことを心の中でそう評価した。ふと彼は窓から外を見る。そこには十字架を掲げた党員たちに先導されたデモ隊が、未だに狂乱の渦を巻き起こしていた。

「今日は間違なく定時には帰れないな。」

さつさと警務局に機動隊を出動させてもらおう。彼はそう思うと足早に自分の執務室に向かって歩いて行つた。

蠢く者たち

新帝国暦82年度における帝国本領イゼルローン付近辺境の収穫高は壊滅的なものとなつた。

というのも今年は各惑星で冷害や熱波などの異常気象や蝗害などの自然災害が発生したのはもちろんのこと、ブラウンシュヴァイク熱流行に焦つた各惑星の総督たちが種蒔きの時期にロックダウンを強行し、そもそもその収穫量が結果として少なくなつてしまつたこと、さらには年始の官民問わずのケスラー閥の大肅清によりもたらされた混乱により農業に関与する人口の減少がその主な原因であつた。

当然ながらこの地域の農民たちは数少ない農作物で家計や食料をやりくりする羽目になつた。ここに追い討ちをかけてくるのが仕事はきつちりとやる総督府の役人たちである。役人たちは不作にもかかわらず規定の公平な税とやらを取り立て、足りない分は食糧用の作物を押収していった。

農民たちには冬を越せるか、それどころか家族全員を養えるかどうかすら怪しい保存作物と、同じく冬を越せる食物を買えるかどうか怪しいほどの金額が手元に残されるとになつた。

ここで頼るべきなのが獅子大帝の設立した農民金庫をはじめとした行政の力なのであるがこれらはすでにズタボロの体を表しており、さらには福祉政策も昨今の混乱でパンクと言わざるを得ない醜態を晒していた。

もはやこの星域の農民たちには頼るべきものがなかつた。ある星系では一揆が頻発し、ある星系では総督府前でのデモ行進が行われ、ある星系では食糧問屋に対する襲撃が行われた。

地方の混乱に対して次に割を食つたのがオーディンや帝都フェザーンといった食料品の輸入によつて賄われている輸入惑星である。なにぶん手元に入つてくる食料が少なくなつたのだ。このままではいつ暴動、革命の類いが起きててもおかしくはない。

ルーデンドルフ政権はこの危機を配給制の施行と警察、軍隊による強権的威圧によつて乗り切ろうとした。この政策は一定の効果を發揮し、都市惑星限定ではあるが一定の安定を確保することに成功した。

一方でこの動きを冷ややかに、そして誰よりも注力している者たちが、歴史の掃き溜めとも言える場所から確かにその存在感を發揮していた。

「最近はどんどん配給の量も少なくなつてきていてる。先週までは1650キロカロリー一分であつたが今や1300キロカロリー分だ。」

カイゼル髭が大きく目立つ中年男性、ゲルハルト・フォン・ハイルブロン元伯爵は、周囲に居並ぶ立体映像の男たちに愚痴に聞こえるような言葉を吐きかけた。

「最低限の数値じゃないか。よくこれで暴動が起きないものだな。」

立体映像の男たちの一人、スーツをびつちりと着飾ったアルベルト・フォン・ビンター・ポンメルン元伯爵はゲルハルトのぼやきに驚いたようにそう答えた。彼はまだマシな新領土にて都市惑星の現状が掴めていなかつたのだ。

「軍隊で無理やり抑え込んでるんだとさ！ いかにも金髪の孺子の取り巻きたちがやりそなことだ！」

いかにも亡靈のような痩せこけきつたフイリップ・フォン・ボーデン元伯爵が自信満々にそう言う。彼、正確には彼の家は金髪の孺子、すなわち獅子大帝ラインハルトに恨みがあつた。

もう大体察することは出来るのは思うがここに集まっているのは歴史の掃き溜めに移動せざるを得なかつた者たち、即ち旧ゴールデンバウム王朝の貴族の末裔たちであつた。

彼らのほとんどはローエングラム朝の体制が固まるに従つてその復権を諦める者が大多数であつたが一部の者たちは秘密裏に結社を組織し、ローエングラム朝打倒を最終目標とし、こうして会合をしばしば重ねていた。

が、昨今ではローエングラム朝の体制が揺らいできたのか、同調し、会合に加わる元貴族たちも徐々に増えていった。こうして増えていった貴族たちが集まっているのが、この会合である。

「そういえば副議長、今私のいる帝都の有様はこのようなものではあります、地方ではもつとひどいと聞きました。どのようなものです？」

ゲルハルトは副議長と呼ばれた男、ハインツ・ヴィルヘルム・フォン・ブルヴィッツ元侯爵にそう尋ねた。

「…正直言うとね、地獄としか言いようがない惨状だよ。食料は積極的に中央に回されるから飢饉が発生しているし、なんなら人肉食もちまちま発生していると聞いている。みんな明日の食事どころか、今日の食事にすら事欠く有様だよ。」

もつとも、それは私もだけどね、と元侯爵はにこやかにそう付け加えた。もつとも、その笑顔は元気なものとは到底いえなかつたが。

居並ぶ貴族たちは皆この惨状に絶句していた。あのブルヴィッツでさえもこの有様なのか！と。

ブルヴィッツは他の貴族領を食い物にしていくとはいえるローレン側辺境の中では目を引く発展をしてきた惑星である。ブルヴィッツ型成長戦略といえば聞こえは悪いが堅実に成長できる方法として各貴族、現在では総督が取り入れようとしたものだ。

そのブルヴィッツが、人が人を食う有様になつていたとは！　まさしく絶句としか言いようがなかつた。

「…なんという。なんということだ。」

「金髪の孺子の取り巻きどもの辞書には慈悲という言葉がないのか！」

「父祖は運命を受け入れたが撤回するべきであつたのだ！」

「孺子の王朝を打倒せよ！」

「絶好の好機来れり！　今がその機会だ！」

貴族たちは色めきだつた。ブルヴィッツの惨状を聞いて震え上がるものたちが続出したのだ。

「孺子に鉄槌を！　貴族に榮光を！」

「正当なる支配者の元に！」

「くたばれ孺子！」

たちまちこう言つたスローガンが会場内を飛び交つた。それは立体映像とスピーカーからであつたが、確かにそこから伝わつてくる熱狂が存在していた。

「議長！　もはやローエングラム朝の天命は尽きたのも同然！　一刻も早く領民をまとめ上げ、挙兵するのです！　ご決断を！」

ボーデン元伯爵は議長と呼んだ小太りの男、カール・フォン・クラインゲルト元子爵

に挙兵を呼びかけた。

「ならん！」

しかし議長が下した結論は彼らとは反対のもの、明確な*ナイイン*えの意思であつた。

「どうしてです！ブルヴィイツツの惨状を聞いたでしよう！もはやローエングラム朝に民をまとめ上げる力がないのは明白！このままおめおめと民を殺されるのを指を咥えて待つより、一撃を加えた方がいいでしよう！」

「それでもならん！少なくとも今挙兵すべきではないのだ！」

クライングルトは力強く叫んだ。老議長の気迫は伝わってきたようで、先ほどまで場を支配していた熱狂はたちまちのうちに冷めていった。

クライングルトは少し咳払いをしたのち、続けて言つた。

「確かにブルヴィイツツ、ひいてはイゼルローン側辺境の惨状は目を見張るものだ。だがしかし、ローエングラム朝の支配力は弱まつていても依然として健在というのは確かだ。今蜂起してみろ。たちまちのうちに叩き潰されることは間違ひ無い事実である。」

貴族たちは口々に同意の言葉を呴いた。確かに今蜂起すれば強力な軍事力を持つ帝國軍に捻り潰されるだけだ。

「少なくとも今ではない、と仰いましたよね？ということはいつかは蜂起するつもりですか？」

ヒンター・ポンメルン元伯爵は議長にそう質問した。

「卿たちはそのつもりで集まっているのだろう？私は卿らの重石として蜂起の時は今ではないという意見を示しただけだ。」

クラインゲルトはそう言つて椅子に深く腰掛け直した。

「付け加えていうとだな。君たち、蜂起するにあたつて戦力のアテはあるのかね？口一エングラム朝の基盤は宇宙軍だ。まず目前の宇宙軍を用意できない限り話にならんだろう。」

「宇宙軍のアテならあります。」

一人の貴族が挙手をした。ハイルブロン元伯爵である。

「ほう、どんなものかね？」

「リツテンハイム海賊艦隊です。かの艦隊を指導する御仁はあのリツテンハイム侯の曾孫。能力も高いと聞きます。」

リツテンハイムについてはクラインゲルトでもその悪名は聞き及んでいた。海賊艦隊の中でも100000を超す戦力を保有しており、狙つた獲物は逃さず、徹底して略奪する。彼らが通つた後はぺんぺん草すら生えないという。彼の持つ裏ルートも利用できるため確かに有望株だ。しかし。

「リツテンハイムか。しかし奴の悪名は聞いての通りだろう。正規軍として動くとした

ら不都合この上ないが。」

「彼が蜂起の列に加わるにあたり監視役を首脳部に入れることが条件にすればいいのです。私の執事に軍で奉職していた経験を持つ奴がいまして。それを入れましょ。」
ハイルブロンはクライングルトにリッテンハイムを組み込む策を説いた。確かに優秀な監視役を入れて首輪にはめ込んでさえしまえば、これほど強力な手札もないだろう。

「うむ。効果が見込める案だな。引き込むに当たつてやつてみろ。」

ハイルブロンは無言で一礼してから会議より退出した。

「では今の時点において蜂起は時期尚早、当面は蜂起に向けた戦力の確保ということでおろしいでしょうか?」

ブルヴィイツツ副議長がクライングルトに結論を求めてきた。クライングルトはうむ、と言つて頷いた。

「当面は戦力基盤の確保を第一とせよ。確保が終わり次第機を待つ。各員もそのようにせよ。決して今変な真似をすることはないよう。大神オーデインの御加護あらんことを。」

クライングルトはそう諸卿に結論付けお決まりの文句で締め括ると会議から退出した。

会議が一通り終わるとクライインゲルトはふう、と一息ついて椅子に深くもたれかけた。

思えば数奇な人生を辿つたものだ。荒れ果てた領地で育ち、荒れ果てていく帝国をこの目で見ていつのまにか老人になってしまった。同じ境遇の彼らを放つておけずいたらいつの間にか彼らの領袖に祭り上げられてしまった。

彼は窓から外を見た。沢山の元領民たちが元子爵の配給を求めて集まっている。

このような時こそどのような形であれ我ら貴族が立たねばならない。何かとお人好しなクライインゲルト元子爵は改めて元領民たちと荒涼な元々の領地の夕日を眺めながら、そんなことを思つてしまつた。

厳しい冬は、まだ終わる気配を見せらず、老いた虫たちは岩の下で蠢きを見せていた。

我らがための海賊人生よ

「あん？俺宛に招待状だあ？」

総勢15000もの大艦隊を率いる海賊の中の海賊、リツテンハイム海賊艦隊首領アルブレヒト・フォン・リツテンハイム＝アルテンブルクはリンゴを齧りながらそう尋ねた。

「うん。『再征服者』という組織から。首脳部宛ならともかく、アルブレヒト個人に宛ててくるなんて珍しいね。」

副首領のベルンハルト・フォン・アンスバッハはそう言つて手紙の入った封筒を丁寧に首領に渡した。首領はそれを乱暴に受け取つた。

「これハイルブロンのとこの紋章じやねえか。あいつ爺さんがリツプシユタツトで苦労したというのに懲りずに徒党を組んでいたのかよ。」

リツテンハイムは封蠅に刻印されている紋章を見て呆れながらそう言つた。彼とは曾祖父の頃からの長い付き合いだ。

「…知つているの？紋章。」

「大体は婆さんから教えてもらつた。お前んところも教えてもらわなかつたか？お前の

曾祖父さん確かブラウンシュヴァイクんとこの執事だつたはずだろ？」

「…わがなんないや。家族は僕が物心つく前に全員死んじやつたから。」

「…暇があつたら貴族家の紋章の本でも読んでおけ。お得意様だぞ。」

リツテンハイムはそう言つてから手紙の封蝋をペーパーナイフで切り、中の手紙に目を通した。

「…チッ。」

そうして彼は、手紙の中身を読んで軽く舌打ちをした。

「晚餐会へのお誘いだとさ。あいつ、こんなご時世だというのにわざわざこの俺をそう言つた催しに呼びやがつた。」

リツテンハイムは手紙をアンスバッハに見せながら嫌そうな顔をしてそう言つた。
「ははっ。晚餐会の招待状だつたんだね。職業柄、しようがないよ。」

「よくねえよ。晚餐会だなんて、マナーを意識しながらつまらねえ話に耳を傾けなければならねえ新手の拷問だ。あんなのに参加するくらいなら、帝国アハト刑とやらになつた方が幾分マシさ。」

「リツテンハイムそう言うの苦手だもんねえ。」

「全くだ。」

リツテンハイムはそう言うと手紙を乱暴に机に叩きつけ、執務机にドンと足を乗せて

椅子に大きくもたれかけた。

(全く、どいつもこいつも俺が大貴族様の血筋だと聞くと目の色を変えて擦り寄つてきやがる。)

アルブレヒトは名前からも分かるように80年前、オリオン腕に君臨していたゴーレデンバウム王朝随一の大貴族であるリッテンハイム侯爵家の末裔であつた。

リップシュタット戦役とその後の貴族階級の没落によりウイルヘルム・フォン・リッテンハイムの娘であるサビーネはリップシュタット盟約に参加した他の貴族たちと一緒に辺境に流されることとなつた。

普通なら彼らはここで全滅してもおかしくなかつたのであるが時節が彼らにチャンスを与えることになつた。大帝ラインハルトと尊厳帝アレクサンデルの治世から顕在化してきた諸問題は、彼らを取り巻く監視の目を緩ませ、彼らにより広範な行動の機会を与えた。

すでに辺境に一定のコミュニティを構えることに成功した元貴族たちはこの地に駐屯する帝国軍総督府、そして地球教徒のコミュニティと接触し、そこで大麻やアヘンケシといったサイオキシンよりは製造が容易い麻薬植物の栽培、加工、流通に従事し、ローエングラム朝が悪化していくにしたがつて富を増やしていき、とうとう自前の軍隊を養えるほどの富を獲得するに至つた。

富を獲得し自前の軍隊を得た彼らは次にそれらを用いて航路の間隙を縫つて略奪行を開始した。ここでリツブシュタット戦役で従軍した貴族たちの経験が活かされる形となり、軍縮の最中にあるローエングラム朝の宇宙軍を大きく苦しめることとなつた。

その彼らの中心となつたのがリツテンハイム侯女サビーネと彼女の夫君であり、貴族連合において補給に関わつた実務に強いアルテンブルク伯爵である。権威と実務が揃つた海賊艦隊はまさしく小ゴールデンバウム朝とでも呼ぶべき威容となつた。

アルブレヒトは海賊艦隊の3代目、すなわちサビーネの孫にあたる人物である。もつとも、彼は良くも悪くも自由な宇宙空間でその27年の生涯の大半を送つてきたため、権威的なものを嫌つてゐる人間であつたが。

そのアーナーキーな彼が未だに帝国にすり寄りながら生きてゐる元貴族に晩餐会に誘われた。おそらく自分の血筋に目をかけて。これだけでもう気に入らない。

「晩餐会なんて行くくらいならフェザーンを略奪した方がよっぽどマシだ。」

彼は机に乱雑に置かれた手紙を遠目で見ながらそう言った。

「そこまで言うかい？僕は晩餐会の方が楽だと思うんだけどなあ。」

「お前はまだ分かつてないな。海賊の本懐は、敵を叩きのめして徹底的に奪い、相手を徹底的に屈辱の海に沈め、財貨を積み上げ、女を両の腕に侍らせることだ。付き合いなんて海賊の本懐じやない。クソ喰らえだ。」

リツテンハイムはアンスバッハに対してそう力説した。その顔は彼がいつも掠奪の時に見せる、かつて貴族の家柄であつた者とは到底思えない獰猛な野獸を思わせる笑顔であつた。

「…昔つから本当に変わんないや。でもさつきも言つたけど、付き合いは大事だよ？諦めて言つてきなよ。」

アンスバッハはその笑顔から変わらぬ幼馴染に安堵して、彼に晩餐会に行く様促した。本当に昔から何も変わつていない。

「嫌だ、嫌だ！俺は晩餐会になんて行きたくない！ここにいるんだ！」

リツテンハイムは先ほどとは打つて変わつて子供の様に駄々を捏ね始めたが、やがてどうにもならないとわかつたのか、結局行くことを承諾した。

(つまんねえな…)

リツテンハイムは嫌そうな顔をしながらイゼルローン辺境に程近いどこぞの惑星のパーティ用に設けられたホールにいた。

「…ちょっと、聞いていますか？ここからが肝心なところなんですよ？」
「はいはい、聞いていますよ。」

リツテンハイムは先ほどからペラペラと自分のことについてマシンガンの様に話し

て いる貴族の相手をして いるのだつた。曰く、前から育てて いる蘭の花がうんたらだと
か熱帶魚がかんたらだとか受験を控えた息子がすんたらだとか：

彼は一刻も早くここから出たかつた。早いところ艦隊を率いて宇宙を飛び回り、惑星
を襲撃して酒を飲みながら略奪する自由な快感に身を委ねたかつた。

そういうえば彼の築き上げた後宮の美姫たちは今どうして いるのだろうか。おそらく
今の時間だつたらお茶の時間か読書会でもして いるだろ う。テニスをやつて いるかも
しれない。

「…やつぱり聞いてないで しよう。リツテンハイムの血筋に連なるものがまさかこんな
適当な人間だとは。これだから海賊とい うのは：」

どうもその様なことを考へて いたら目の前の相手が何やら立腹したらしく、ぶつくさ
ぶつくさと文句を言つて きた。話を聞いて いないだけでここまで言われるとは。
(こいつ…ぶん殴つて やろうか！)

彼は右手で叩いてやろうと考へたが、突然横から声が聞こえて きた。

「おお！ リツテンハイム侯！ ここにいらしたか！ いや何、尽きぬ話は色々とある。ひと
まずあちらで話そ うじやないか。ベルンハウゼン子爵、侯を借りて いくぞ。」

カイゼル髭の堂々たる男がリツテンハイムの右手を掴んでどこかに連れ去つて し
まつた。リツテンハイムは突然現れたこの男に困惑して何やらなんだかわからなく

なつてしまつた。

(今度はなんだよ…だから晩餐会つてのは嫌なんだ!)

リツテンハイムは連れ去られながら心の中で毒づいた。

やがてカイゼル髭の男は部屋の端に到着すると、リツテンハイムの右手を掴んだ手を離して改めて彼に向き直つた。

「初めまして、当代のリツテンハイム候。私はゲルハルト・フォン・ハイルブロンと申すもの。あなたの武名を聞き及んで不遜ながら今回のお晩餐会に招待させてもらいました。尽きぬ話はまずあれど…」

「長い。俺をこんな場所に呼び出して何の用だ。手短に言え。」

リツテンハイムはハイルブロンの形式的な挨拶をぶつた切つて用件を言うよう要求した。ハイルブロンは一瞬目の前の男の型破りぶりに困惑したが、やがて調子を取り戻して二、三回ほど咳払いをした後に本命に切り出した。

「さすがは侯、噂に違わず形式にとらわれない人柄ですな。さて…单刀直入に言いましょう。来るべき我ら『再征服者』の蜂起にあたり卿の艦隊に助力を請いたい。」

リツテンハイムは頭を二、三回ほど搔いてハイルブロンの言葉を吟味した。なるほど、すなわち傭兵扱いか。

「…内緒話のためにわざわざ俺をここに呼んだのか。くだらねえな。お前の言つている

意味分かつてゐるんだろうな?」

リツテンハイムはハイルブロンの言葉をくだらないと切り捨てた。彼には旧時代の最後の徒花として消えるつもりは毛頭なかつた。

「何もただで協力してくれとは言わん。それなりの見返りはある。」

「…ほう? 言つてみろ。」

リツテンハイムは少しばかし興味を見せたようだ。ハイルブロンは続けて言う。

「まず来るべき蜂起にあたつて我ら『再征服者』は卿に上級大将の位と宇宙艦隊司令長官の役職を与えた。我らの宇宙軍はそのほとんどが海賊と軍からの寝返りだ。大海賊たる卿ならばまとめあげられよう。」

「俺に宇宙軍の全權を与えるつもりか。面白え。」

宇宙艦隊の全權とは面白いことを言う。リツテンハイムはハイルブロンの提示した条件に興味を示した。それと同時に再征服者という組織に乗つてみようという気が彼の中で確かに生じた。

「まだまだあるぞ。来るべき蜂起にあたり卿の私有財産については総力を持つて補償しよう。決して卿がこれまで築き上げた財産に手をつけることはない、ということだ。」「分かつてるじゃねえか。少しばかし見直したぞ。」

リツテンハイムは舌なめずりをした。今や彼の全ての興味はこの男が示す条件に注

力していた。

「さうに、だ。これをやろう。『再征服者』が発行する私掠免許だ。これと幾ばくかの金を総督に提示すればおそらく見逃してもらえる。蜂起までに徹底的に弱らせろ！」

ハイルブロンはそう言つて懐から一枚の紙を取り出した。それは確かに私掠免許の形式をとつた文章であることをリツテンハイムは確認した。

「大盤振る舞いだな。だが……いいのか？ 今俺が配下を使ってこの書類とセットでやりとりを官憲にバラしたら、お前ら『再征服者』は終わりだぞ？」

リツテンハイムはここで鎌をかけてみることにした。この元貴族の男、ひいてはその裏にいる『再征服者』がどれだけの覚悟を持っているか試してみたくなったからだ。

「そうなつたら卿の身も終わりだ。大海賊が反乱分子に関わっているというのを自首した様な者だからな。ルーデンドルフ政権は大規模な検挙を行うだろうな。」

「言つてくれるじやねえか。じゃあ最後だ。もし蜂起した後に俺が裏切つたらどうする？ 俺は海賊だ。欲を満たせなかつたら徹底的に破壊する。そんなやつに全権を任せたんだ。そうなつても文句は言えねえだろうなあ？」

リツテンハイムはさらに鎌をかけた。彼の顔は獰猛な獣を思わせる笑みを浮かべていた。

「…そうなつたら我々は昔人の言うところの貴族の滅びの美学とやらに殉じるつもりいた。」

だ。もともと我らは偶然生き延びたに過ぎない者たちだ。いつそうなつたとしても文句は言えんさ。」

ハイルブロンのどこか諦念の含まれた言葉を聞いたリツテンハイムの顔は段々と素面の顔に戻つていつた。

「…言つてくれるじやあねえか。気に食わねえな。気に食わねえが…これだけ好条件だと協力せざるを得ないわなあ。いいぜ。お前らの最後の花火、協力してやるよ。」

リツテンハイムはそう言うと今度は打つて変わつて優しい笑みを浮かべて右手を差し出した。ハイルブロンはその右手を受け取つた。

「ありがとう。こちらから連絡員を何名か送らせてもらう。優秀な者ゆえそちらの首脳部でこき使つてやってほしい。」

「おいおい、首輪をはめ込むつもりか？まあいい、リツテンハイム海賊艦隊は優秀な者は歓迎だ。徹底的にこき使つてやるよ。」

「はは、さすがは侯だ。お見通しか。」

二人はそう言つたやりとりを行つた後、側の机に置いてあるワインの入つたグラスを手に取り、乾杯をした後、それを飲み干した。

ここに、リツテンハイムの血筋が改めて歴史の表舞台に出てくる準備は整つたのであつた。

第三部 急加速する世界

882年度の賭け

(全く、こんなことになるとは思いもしなかつたな。)

対帝国全権委員長アレン・モーリス・ブルックは変わり果てた自治共和国政界に思いを馳せながらそう思った。長い冬が終わりだんだんと暖かくなつてくるだろうと予測される宇宙暦882年の3月のことだった。

一昨年秋のクリーン・オブ・デモクラシーの衝撃とそれを覆い隠すように誕生した統一政党、全バラートウェンリスタ統一同盟（ABWUA）の設立とそれに伴う全政党の合流は彼にとってはまさしく寝耳に水とも言えるものであつた。突然行われた議会内大肅清を生き延びたと思つたら次は政党の合流という形での解体なのだ。無理もないだろう。

ABWUAはその設立以来一定の成果を挙げてきていた。とりわけ目を引くのが失業者の急激な減少だ。

シモンズ政権は国父廟の大改築などに代表される大規模公共事業を行うのみならず、エリューセラやリオヴエルデ、ケリム、タツシリといったバラートに対してもそこまで悪

感情を持つていのい旧同盟中央星域に対する秘密裏の経済協力協定とそれに伴うバルト資本の進出とともにに行われた技術者や医者の派遣によつて技術力の向上や今なお帝国各地で猛威を振るうブラウンシユヴァイク熱に対しての一一定の防疫効果などをもたらした。

また「帝国衰退に備えた非常措置」と称して事実上の軍拡を行なつたのも市民に大ウケしたようだ。軍事力の拡充は結果として失業者対策になるのももちろんのこと、帝国に一矢報い改めてサジタリウスを取り戻すための軍事力であることは市民には周知の事実だつたからである。おかげで今やバーラトは10,000隻以上もの大艦隊、数千万を数える地上軍を保有することとなつた。これで新領土総督府からは警告一つだけだというのだからどんどん増えるだろう。

もつともバーラト星系一つを持つてゐるに過ぎない自治共和国では大軍にすることも賄うことでもできない。そこでシモンズ政権は事実上のペーカンパニーを作り出しそこから手形を振り出すことによつて軍事費を無理矢理捻り出すという歴史のどこかで見たような魔術的、あるいはペテンとも呼べる手法で必要な軍事費を捻り出していふのだが……

さて話を戻してブルツクは今主席官邸の閣議で用いられる一室に並み居る閣僚と閣僚級高官の一人としてそこにいた。

議題はオリオン腕大飢饉に対する食糧供出の是非について。バーミリオンの新領土総督府の食糧供出に応えるか否か、応えたとしてもどのような形で供出するのかが決定される重大な閣議であつた。

「少なくとも一定数の食糧は供出するべきでしょう。我々は独自路線を歩み始めたとしても帝国の自治領であることには変わりありません。ここは少しでも帝国に対していい顔をしておく局面です。」

ブルツクは議場に自分の意見を投じた。彼と統制派の面々としてはフェザーンとは一定の関係を維持しておきたい。

「しかし我々が供出できる食料は微々たるものですよ？ バーラトは輸入惑星の上に多大な人口が集まる都市惑星です。下手に供出したら今度はこちらが飢えることになりかねませんが。」

穏やかな反対意見を言つたのは農政委員長のベルトルト・シャノワールだ。彼は旧八月人民党、現正統派出身の閣僚であり、長年農業政策に関わってきた官僚出身の人間だ。彼が慎重に言つたとなればより説得力が増す。

「ふん！ むしろ帝国を弱らせるいい機会だ！ この際だ！ ノーを突きつけてやれ！ 反動的帝国主義者には、飢餓がお似合いだ！」

打つて変わつて強硬論を訴えるのは自由派出身、親シモンズで名を馳せたイタロ・ボ

ルジヤ国防委員長である。シモンズに賛成しながら自由派の反骨精神を受け継いだ武闘派、革命の闘士とも言える政治家であつた。

「いや、いきなりノーを突きつけるのは不味いだろう。仮に突きつけるとしても代替品ときちんとした説明を揃えないと…」

先ほどからトイレに行きたそうな顔をしている男は正統派の政治家であるパーヴェル・ブルガーニン法秩序委員長である。警察官僚出身の彼はその経験を買われて入閣した人間である。ストレス性の胃痛持ちであるのがネックとなつてはいるが、そつなく委員会を統率している。

「しかし供出しないというわけにもいかないだろう。このままじゃ帝国とともに共倒れになる可能性がある。食料という形ではなくともなんらかの支援は必要だと思うが。」

シモンズの腹心、新体制派のチャールズ・モーズレーが口を開く。確かに未だ独立経済圏が構築されていない現状で帝国が倒れたら自治共和国も倒れかねない。政権を獲得して一年弱。その間に養われた視点が言葉として深く一同に語りかけていた。

「…」の件について主席としてはどうお考えで?」

ブルガーニンが視線をシモンズに向けた。黒のスーツに身を包みくすんだ金髪をオールバックにまとめた飄々とした男が議論を真剣に眺めているのをブルガーニンの目は捉えた。

「私かい？ 私としては少なからず供出せねばならないと思うが……」

シモンズはそう言つてから少しばかし考え込む仕草をして、やがて結論を出した。

「私としては一部合成食料品とその製造機器および技術、それともう一品を帝国に供出する形にしておきたい。」

合成食料品関係の製造機器および技術。その結論に閣僚たちは色めきだつた。

確かに合成食料品なら味、食感のグレードこそは落ちるが少ない材料で手軽に、そして多く作れる。今の帝国にとつては天からの贈り物に等しい存在だろう。

しかし閣僚たちが気になつたのはもう一品の方であつた。いつたい何を送るつもりなのか？

「失礼。主席、もう一品とおつしやられましたが：何を帝国に送るつもりで？」

少数派出身の財政委員長スヴェン・ビヨルンソンが主席に尋ねた。シモンズは待つてましたとばかりの嬉しそうな表情を浮かべこう言つた。

「何つて、アレだよ。ブラウンシュヴァイク熱のワクチンと特効薬。その試作品を帝国に送るのさ。」

またしても閣僚たちは色めきだつた。ワクチンの試作品が完成していた事実はもちらんのこと、それが帝国を利する行動にならないとは限らないからだ。まさか本当に帝國に塩を送るつもりなのか？

「主席！ どういうわけですか？ まさか帝国を本当に援助するつもりでしようか！？ 革命の大義を忘れたのですか！？」

国防委員長が主席に責め立てる。いくら親シモンズである彼といえども革命を踏み躊躇るようであるそれだけは許せなかつた。

「ボルジヤ君、君は勘違いしている。逆だ。」

「逆？！ どういうわけです！？」

「これを材料にして帝国に外交攻勢をかけるということだ。」

外交攻勢。確かにこの危機の時であれば有効に働くだろう。だが帝国と自治共和国の国力は雲泥の差がある。帝国を動かすことができるだろうか？ 閣僚たちは不安に包まれた。それを見たシモンズがゆっくりと口を開く。

「君たちは我々が乙計画、すなわち軍拡を始めたとき、帝国がどのような反応をしたかを覚えていいかい？ 答えは弁務官による警告一つと新領土総督府からの遺憾の意。これだけだ。」

閣僚たちは口々に噂しあつた。確かに帝国の反応は弁務官による警告一つと遺憾の意を表明するだけにとどまつた。普通なら経済制裁なり最悪懲罰作戦が行われるはずである。

「本当なら帝国は軍事作戦なり経済制裁なりを行なつてゐるはずなんだ。バーミリオン

に駐留している艦隊はそのためにある。にもかかわらず帝国は軽い反応だけで済ませた。なぜだと思う？ 答えは簡単さ。」

帝国はもはや死に体だからだ。シモンズはそう言つてからウインクした。
 「878年のクーデターと第6代皇帝フランツ一世が即位してからそれがさらに加速した。経済格差は加速し、疫病は止まる所を知らず、ついには有能な人材の肅清の余波で1000万もの被害者がが出た。今や帝国は帝都フェザーンであつても失業者どころか餓死者の死体が転がる始末だ。」

閣僚たち、とりわけブルックは息を呑んだ。まさか帝都フェザーンがそのようなことになつていたとは。ブルックが最後に見た一昨年であつても帝都は活気が見られたはずだつた。噂には聞いていたがまさかそれほどのものになつていたとは。

「そこで先ほど言つたワクチンと特効薬だ。食料と一緒にこれとその製造方法を加える。それだけで帝国は大喜びだろうな。何せ疫病の改善の可能性が高まるわけだから。ここだ。ここで仕掛ける。」

シモンズはそう言つてから机に置いてあるパソコンを弄り、立体プロジェクターに一つのデータを浮かび上がらせた。データには天文学的な数字が表示されており、閣僚たちは一目見てそれが何を示すのかを理解した。

「ワクチンと特効薬を引き換えに同盟時代に課せられた賠償金の大額減額を引き出す。

可能であれば一年から四年ほどの賠償金支払い一時停止もだ。帝国の現状を鑑みれば、全てとは言わないがある程度は呑むだろうと踏んでいる。」

プロジェクトの天文学的な数字がみるみる減つていき、その下に一年から四年ほど の賠償金支払い一時停止と銘打たれた。

閣僚たちはそれぞれ違う思いを抱いた。帝国を見返してやれると喜ぶ者、本当にこれ でいいのだろうかと思う者、時間は稼げたと安堵する者。千差万別であった。

ブルックは不安に思う方であった。もしこれが実現するようであればシモンズの人 気は鰐登りに上昇し、ついには誰も太刀打ちできなくなるだろう。ブリューニングの予 言が的中するかもしれない。

「要は最後に勝つていればいい。国父の言葉だ。これが実現するならばバーラトは死に 体の帝国を踏み越えていつしか世界となるだろう。」

シモンズはまたしてもウインクをしながら閣僚たちに向けてそう言つた。ブルック はそれを見ながら暗澹たる思いに包まれた。

シモンズのこの案は賛成多数で可決されることとなつた。

「ブルック君。君は帝国に伝手がいるようだね。なら通しやすくなることは間違ひな い。頼んだぞ。」

ブルックはシモンズの顔を見ながら、色々と諦めたようにため息をついた。

終わりの始まり

83年度の内閣改造で新しく民政尚書に任命されたフェルディナンド・ブリューニングはヴェルテーゼ離宮一階会議室にて深くため息をついた。自分の周りの閣僚が国家維新評議会、統合派の人間ばかりだからではない。議題が議題だからである。

バーラト自治共和国帝都駐留高等弁務官キースリング氏は一つの書類を国務尚書フォルベック中将に手渡した。それは兼ねてから帝国政府が期待していた食料供出に対する回答であつた。

結論から言つてしまえば良い意味で予想外の結果が返つてくることとなつた。合成食料とその製造機器に加え、ブラウンシュヴィアイク熱のワクチンと特効薬の試作品が送られてくるのだ。それと引き換えの条件に目をつぶればの話だが。

バーラト政府の要求はこうであつた。これらを提供する代わりに賠償金の大額減額、可能であるならば一年から四年の支払い猶予を認めるのこと。

当然ながら獅子の泉宮殿は大騒ぎになつた。これを呑めば人類統一政権である帝国の威信が大きく落ちることになりかねないからだ。共和主義の一自治領がこれを要求してきたことも、愛國者達のはらわたを煮えくり返らせた。

ブリューニングがため息をついたのはこれだけではない。なんと自治共和国政府はブルック氏の伝手を使つて極秘に圧力をかけてきたのだ。曰く統合派政権の中で唯一の開明派である貴殿が生き残るにはこの案を支持するほかないだろう、と。

「密約」の伝手が悪い意味で使われた形となつた。おそらくシモンズ政権は「密約」の存在を解像度は知らないが掴んでいるだろう。

現在彼の周りの閣僚たちの間で紛糾しているのがこの話題であつた。ブリューニングが見てみるに賛成意見よりも反対意見の方が勢いを増しているのが見てとれた。

「こんなもの呑むべきではない！一自治領の、それも共和主義者の足元を見るような要求など！帝国の沽券に関わる！」

力強く熱弁を振るうのは司法大臣のファルケンホルストである。相変わらずの根からのタ力派愛国官僚である彼は何よりもイデオロギーを重視する人間であり、正直言つてブリューニングが最も苦手とする人間であつた。

「しかし司法尚書殿、今や帝都でさえ餓死者の死体が溢れ、感染者が横行する始末。ここは臥薪嘗胆、ぐつと堪えて受け入れるべきではないのか？」

穏健な反対意見を表明したのが国務尚書のフォルベック中将である。この中ではわりかし付き合いやすい方であつた。

「國務尚書の言う通りです。もし今ここで提案を受け入れなければ被害はネズミ算式に

拡大することは目に見えています。受け入れるべきでしよう。」

ブリューニングはフォルベックの意見に同調した。

食料はもちろんのこと、ワクチンの試作品は帝国のためを考えるならここで手に入れたい。今の帝国本領の医療水準ではワクチンを一から作るのに10年以上の時間をするだろう。新領土から手本だけは手に入れておきたい。

だがなによりも反対意見を明示している人間がいた。議長ルーデンドルフ上級大将である。

「ならん！・絶対にならん！・自治領如き、それも共和主義者の要求を呑むことなど！時代が時代なら、艦隊を動かしてもまだ足りんわ！」

ルーデンドルフはその太い両腕をチーク製の長机にばん！と叩きつけながら叫んだ。確かに帝国のためを思うならこのような美味しい提案は呑むべきだろう。

しかし、長年帝国を守ってきた軍人としての、獅子大帝後に続くものとしてはすぐぶる不満であった。共和主義者の提案を呑むことなど、あつてはならないのだ！

「議長閣下の言う通りです。バーラトの賠償金及び駐留料は帝国の現時点における有力な財源。それに新領土を帝国に繋ぎ止める鎖の一端を果たしています。短期的な利益に釣られて長期的な利益を見逃す。これほど馬鹿馬鹿しいものはありますまい。」

理路整然と反対意見を述べたのは財務尚書のホレス・グレイリー・シャハトマンであ

る。元帝国中央銀行総裁でありフェザーン有数の企業の持ち主である彼は経済政策に疎い軍人たちの経済的な支えを行なつてゐる人物であつた。

「それに彼らを調子付かせるという恐れもあります。今ここで呑むとしたら次も同じことを要求してくるに違ひありません。そうですが、次は帝国本領の産業的防壁たる関税についてとやかく言つてくるかもしれません。」

シヤハトマンはそう言いながらタバコを灰皿に押し付けた。新領土に対する高関税、通称「アレクサンデルの防壁」は帝国本領の経済を守る障壁である。

もしバラートが帝国の足元を見て機を見てそれを要求してくるような事態になればどうするのか。防壁が破られれば新領土の商品が流れ込む事態になり、実質乗っ取られる形になるだろう。

「しかし帝国の現状を鑑みれば呑まないという選択肢はあり得ないでしよう。軍によつてなんとか暴動を未然に防いでいる状況ですよ? 条件の改正などはできなかつたのですか?」

「やつてはみたんだがこの条件でなければ今回の支援は見送らせていただく、と言う返事だ。」

「プライドだけでは食つてはいけますまいよ。」
「鎖が緩むような事態はあつてはなりません。」

「なんとしても呑むべきではないのだ！バーラトの増長は目に余る！」

「ああ、もうどうすれば…」

会議は踊る、されど進まずとはこのことだろう。実利とイデオロギーを天秤にかけた議論は遅々として進まなかつた。

結局結論として最終的な意見をカイザーの決定に委ねると言う決定を、議長ルーデンドルフは下すこととなつた。

「…なるほど。」

皇帝フランツ一世は眼前で平伏している軍人、ルーデンドルフから手渡された一枚の書類に目を通していた。バーラト自治共和国政府からの支援と引き換えの要求をしたためた文章である。

確かにルーデンドルフらの議論が紛糾するのもよく分かる。要は帝国の弱みに付けて恐れ多くも新領土の一領邦に過ぎない政府が色々と要求してきたのだ。
 （しかし…ここでこんな面白いことが起きるなんてね。）

フランツは書類に目を通しながらほくそ笑んだ。まさに寝耳に水とはこのこと。この時ばかりは信じてすらいない大神オーデインに感謝するほどであつた。
 （普通なら呑まないけど…）で呑んでみたら面白いことになりそうだな。バーラトは

最近軍拡をしていると聞くし。)

虐待児のカイザーはまたしても世の中を搔き乱すような決断をすることに決めたようだ。彼は書類から目を離しルーデンドルフに仄暗い目を向けた。

「彼らとの条件で締結しよう。」

「な、なんですか!? 陛下、本気なのですか!!」

ルーデンドルフがカイザーの決断に飛び上がるほど驚いたようで目をひん剥いでこちらを見つめていた。

「ああ、本気だ。少なくとも帝国の現状を鑑みれば、な。」

これは嘘でバーラトが帝国という秩序を搔き乱すのを手伝いたいという後ろめたい理由があることをルーデンドルフは知らなかつた。

もし知るようであれば間違いなく叩き殺されるだろうな。なんと言う大逆か。フランスは考えるだけで笑いそうになつたがなんとか堪えた。

「イゼルローン近辺での食糧危機は帝都に餓死者が出るほどの規模であり、その回復には数年要すると聞く。これによる経済被害は計り知れないものになるだろう。ひよつとしたらどこかで民衆の堪忍袋の尾が切れて革命が起きかねないかもしね。古今東西、革命とは食料不足で起きたのだからな。」

確かに歴史を鑑みるに革命はイデオロギーではなく食料不足で起きた。

古代フランスやロシアで起きた革命は記録的な不作や戦時体制による食料不足により起きたと言つても過言ではないし、あのルドルフ大帝期の共和主義暴動もその決起に記録的飢饉が大きく関わっていると学んだ。

変わった形ではコルネリアス一世の大親征に関してでありこれ以上の食料供出を恐れた一部貴族が私兵を引き連れて宫廷革命を起こしたとある。ルーデンドルフはこの青年帝の下した決断が英斷に思えてならなかつた。

最もこの口上はフランツが培われた天性の表現力で適当にでつち上げたものであり、ルーデンドルフはそのことを知る由もなかつたが。

「さうに先帝とその皇太子を害すまでに至つたブラウンシュヴァイク熱は依然として猖獗を極めており経済活動に依然として大きな影響を与えていた。現にくつか大企業が倒産しているであろう。座視できるものではない。」

フランツはさらに弁を振るう。これも天性の表現力ででつち上げたものであつた。

「朕は革命という概念そのものを許さぬ。出来るなら辞書から消してしまいたいのだ。帝国が炎に包まれ人民が苦しむようなことはあつてはならぬ。それを照らしてみるとこの申し出はまさしく天からの助けと見なすことができるではないか。故に、私はバーラト自治共和国の要求を呑もうと考えている。」

ルーデンドルフは彼の熱弁に感極まつたようで涙を流していた。フランツはそれを

見て馬鹿馬鹿しく感じた。

「陛下にそのような志があろうとは…民を思うその心、臣はいたく感極まりました。」

統合派は所詮はロマンチストだ。このロマンチストの集まりが5年も政権を動かしてきただの。よくもまあ破綻が来なかつたものだとフランスは内心感心した。いや、今がもう破綻かもしれないが。

「ともかくだ。余はこれを呑もうかと考えてゐる。何、これもひと時の我慢だ。かの大帝でさえ臥薪嘗胆の時があつたのだ。今がその時だと思い、努力する。後世の人民のために私は喜んで涙を呑もうではないか。」

フランスは感極まる重臣に向かつてそう声をかけた。最も彼は後世の人民のためなど一ミリたりとも考えておらず、全ては彼にとつて面白い世の中、混沌の世の中を見たいがためであつたが。

「すぐに外交団を結成し交渉に向かわせます…！」陛下の御身心を無駄にしないためにも

ルーデンドルフは咽び泣きながらそう言つた。

…！」

新帝国暦83年3月5日。一つの条約がここに結ばれた。

食料とワクチンの提供を受け入れる見返りとしてバーラト自治共和国に課せられた

賠償金の大幅減額、並びに二年の支払い猶予を設ける。

一領邦に過ぎない共和国が巨大な帝国に対して対等な条約を締結したのだ。締結地から「シャンプール条約」と名付けられたこの条約は後世から見ると帝国の終わりの始まりと捉えることが出来る。バーラト自治共和国に二年という大きな猶予時間を与えることになったからだ。

二年の猶予を得た自治共和国は賠償金に充てられた資金を経済と軍事に集中させることになり、新領土内での彼らの影響力がこの日を境にさらに高まることになった。

麗かな春の日に

惑星ハイネセンに待ちに待つた春休みシーズンがやつってきた。

建国の元勲であるユリアン・ミンツの曾孫に当たる17歳の少女、アンナ・ミンツは春の暖かい日差しが降り注ぐ曾祖父の部屋だった場所で遺品一つである幾つかの歴史に関する難しい文献のページを穴が開くほど見つめていた。

本の題名は「宇宙暦840年代の政治的動乱」と題された本であつた。内容は難しい表現が多く用されていたが彼女の通っているティラスボル第一高校では頭の良い方である彼女にはあまり障害にはならなかつた。

彼女の目は何行かの文章に釘付けになつていた。

『オルフェウスの豊琴事件』。これ教科書に載るくらいの大事件だけど：おかしいわね。専門書でも数行程度しか取り上げられないなんて。』

オルフェウスの豊琴事件はバーラト史の受験問題で必ずと言つていいほど出てくる有名な政治スキヤンダル事件である。

当時のバーラト自治共和国主席フレデリカ・グリーンヒル・ヤンがいくつかの医療法人、研究団体、IT企業に多額の献金を行い、それがマスコミに取り上げられた結果、そ

の長い政治生命を絶たれた事件であり、バーラト政治史を語る上で欠かせない事件であつた。

結果としてユリアン・ミンツ主席の誕生まで権力の空洞状態が生じ、当時バーラトが置かれていた、今よりも絶望的な状況も相まって議会内の過激派がさらに伸張した。言わずもがな、これが今のウエンリスタである。

彼女が不思議がつたのはこの事件の顛末が書かれたページであつた。教科書と同じで最低限の情報しか書かれていないのだ。

「宇宙暦840年代の政治的動乱」は曾祖父も編集に関わった、いわゆる専門書である。専門書なら普通は教科書では数行程度しか流さない、もしくはあまり載せない事柄を取り上げ、精密に解説するものである。事実この本は教科書では取り上げない内容も事細かく記されている。

しかし、この事件に関しては別なのだ。教科書と同じで数行程度、それも最低限の情報のみを記している。

(間違いなく何かがある。ウエンリスタですら隠したい何かが。)

アンナはこのページからある確信を持った。オルフェウスの豎琴事件。ウエンリスタ台頭のきっかけとなつたこの事件に、深い闇が隠されていることを。

「ひょっとしたらウエンリスタに大打撃を与えられるかも。」

彼女はそう言つて笑みを浮かべた。このウェンリスタが隠したい「何か」を知ることさえできれば、シモンズ政権、ひいてはウェンリスタと戦つていくことができるかもしない。敵を知る目的で行つた調べ物がこんな成果を生むとは。まさしく一石二鳥であつた。

しばらくしたらピンポンと呼び鈴の音が鳴り、彼女の意識は現実に戻つた。確か今日は親戚のお兄ちゃんが来る日だつたはずだ。

彼女は急いで階下に向かつて走つていった。

「時が経つのは意外と早いなあ。お前さんももう受験生か。」

アンナにとつて遠い親戚に当たる年上の男、アルベルト・ミンツ元主席の孫に当たるヘルベルト・ミンツは感慨深くそう言うと盃になみなみと注がれたコーラをぐいっと飲み干した。

「へへー、そうだよ。あと2年ほどでお酒が飲めるよ。」

アンナはにこやかな笑みを浮かべてそう答えた。ヘルベルト兄さんは昔から何かと世話をしてくれた。誕生日にプレゼントを送つてくれたり、勉強を教えてくれたり、ハイセンポリスに連れて行つてくれたり。

一人っ子であつたアンナにとつてヘルベルトはある意味兄と同じであつた。

「昔はこんなにちっこかつたのに今では俺とおんなじ背丈でこんなにいい女になつたときた。時の流れってのは怖いなあ。」

ヘルベルトはそう言つて筋肉質な手でアンナのミルクティーカラーの髪をよしよしと撫でた。

「もう！ ヘルベルトの兄ちゃんたら！ 昔からそこのところは変わらないんだから。」「はは。すまねえな。ところでマリアの婆さんはどこだ？ いつもならもうお菓子と一緒に登場というところだが……」

ヘルベルトはそう言うとリビングルームのあたりを見回した。いつもならとっくに席に着いているはずだが……今回はどうも見当たらない。

「あー……おばあちゃんなら、その……ちょっと今寝込んじゃつているの。」

アンナは申し訳なさそうにそう言つた。彼女の祖母マリア・ミンツは去年のあの日以来ずつと寝たきりになつてゐる。無理もない。長い間支えになろうとしてきた父が転落死という呆気ない最期を迎えたのだ。今や彼女は何をするにも氣力が湧かない状態になつておりただ残る余生を無氣力に過ごしている。

「……ああ、なるほどね。無理もねえや。いつも一緒にいた曾祖父さんが亡くなつたもんな。」

ヘルベルトはそう言つて胸ポケットからタバコを一本取り出し火をつけた。辺り一

面にニコチンのにおいが広がるがヘルベルトはいつもこうで機会さえあればタバコを吸う。アンナはもう慣れ切つたようなもんだつた。

「飯はマリアの婆さんが作つてたんだろ？どうしているんだ？」

「私が何とか作つているよ。私だつて料理できるんだから！」

マリアはそう言つてふんす、と自信ありげに胸を張つた。

「お前家事しながら勉強やるのか？そんなんじや落ちるぞ。曾祖父さんの蓄えがあるだろう。それで家政婦なり何なり雇え。」

「それじゃあいざれ貯金が尽きちゃうよ！今までひいおじいちゃんとおばあちゃんの年金で暮らしてきたんだよ！」

「俺からも仕送りを出してやる。これでもバーラト防衛隊の中尉なんだぞ…」「でも…」

それでもと食い下がろうとするアンナの頭に大きな手がポンと乗る。

「でもでも何でもお前さんはまだ子供だ。大人の世話になる特権ぐらい甘受してもいい年頃なんだ。だから黙つて受け入れろ。なに、そんくらい曾祖父さんも許してくれることさ。」

ヘルベルトはそう言つてアンナの薄茶色の長い髪をクシャクシャとなでまわした。アンナはどこかくすぐつたくて思わず笑つてしまつた。

「随分と長居してしまつたな。」

春の長くなりつつある夕日の中、ヘルベルトは自前の中古の軽自動車をハイネセンボリスまでの国道を走らせていた。
だんだんと暖かくなっているのか、今日は暖房をそれほど強くつけなくとも快適な環境で運転できた。

ユリアン・ミンツの隠居先、すなわちアンナの実家はあれほどの大事件があつたにもかかわらず相変わらずの佇まいであつた。

その住人であるアンナも悲しみに暮れている様子はあまりなく、いつも通りの元気で健気なアンナであつた。

今回の訪問はどちらかといえば様子見の面があつたが別段変わりない様子であり、ヘルベルトを大きく安堵させた。

「全く、心配したんだぞ。」

ヘルベルトは流れゆく道路を眺めながらそうごちた。

(…そいいえば。)

ヘルベルトは彼女に一つの事柄を聞き忘れていたことに今更ながら気がついた。

それはアンナがシモンズ政権、ひいてはウエンリスタに対して何かしらの復讐を志し

て いるとの噂であつた。

すなわち政治に興味を持ち、積極的に参加しようとしている。

「もし政治に興味を持つて いるというのが本当のことだつたら…警告の一つくらいしておけばよかつたな。」

ヘルベルトは そう言つて 大きく舌打ちをした。政治に参加する、とりわけ今のバーラト政治に参加すると言うことはどういうことか。それは彼の祖父、アルベルト・ミンツを見ればよくわかる ことであつた。台頭するウエンリスタの過激極まる政治闘争と段々と積み重なるプレッシャーに押し負けてついには体を壊し、今では病院で寝たきりである。

「頼むから嘘であつてほしいが…」

ヘルベルトは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。大事な親戚であるアンナをあのような世界には連れ出したくない。近くで政治に関わつた男を見てきた人間の切実な思いであつた。

(…気分を変えよう。)

ヘルベルトは そう思ひカーラジオをつけた。気分転換にはラジオが一番だ。

『…リオ・ヴエルデ、エリユーセラ星系ではウエンリスタ過激派の活動が日に日に盛んになつてきており、現地総督府は現地秩序警察に対するさらなる予算の増額を…』

カーラジオは暖かな運転席にその声を響かせ、麗かな春の暖かな夕陽が車内を暖かく照らし出していた。

ロスジエーンのチエスゲーム

「また戦果なしですかあ？」

惑星ロスジエーンの辺境都市カザリン・ケートヒエンブルクの内国安全保障局の庁舎にてウルタール星系出身のアンナ・アルフベン警部補はシーチキンを載せてマヨネーズをかけたパンを食べながらそう唸つた。視線の先には反帝国革命組織に関わる何枚かの資料があり、昼食を食べながらその中身を吟味している最中であつた。

「どうも新しく入ったヤツが勢い余つて殺してしまつたらしくて：全く、いざ人員不足が解消されると思つたらこれですからな。」

彼女の補佐役であるハインリヒ・マン巡査部長が厳しい顔をさらに厳しくさせてそう言つた。

「もう！アジトの場所を吐かせなきやいけないのに、殺してしまつたら元も子もないじやないですかあ！もう！これだから原理主義者はあ！」

アルフベン警部補は一通り叫び終わるとそのまま机の上に突つ伏してしまつた。

内国安全保障局が真に国家維新評議会政権に従順な存在に生まれ変わつたのは一昨年の年末から昨年春にかけての「血の聖靈降誕祭」とそれに続くケスラー閥の大肅清に

よるものであつた。

内国家安全保障局は確かに国家に従順な組織に生まれ変わつた。しかしそれを手にするまでのダメージが到底無視できないものであつた。ある程度の割合の貴重な人材を、この大肅清で失つたのである。一時期軍が治安維持の役割を担つたほどである。

新帝国暦83年4月現在、このダメージは徐々に回復しつつあるが、その入ってきた人材が問題であつた。殆どが統合派の愛国主義的教育を受けた人材だつたのである。

統合派は異なる思想を許容しない。ましてや国家に明確な害を与える思想は言うまでもない。情熱に燃えた若者たちはそうした思想の持ち主を徹底的に弾圧するようになつてしまつた。

こうした若者が輩出されるようになつたのは単に学芸尚書マルティン・ブーフラッカーの努力の賜物である。統合派の草創の中心となつていた彼は学芸尚書になるや独自の愛国主義的カリキュラムを作成し、地方を飛び回つてそれを徹底させている。御年90歳のくせに未だに健康体そのものなのだから、なかなかタチが悪い。

「もお……この分だともう永遠に足取りが掴めない今までしようかあ……」

警部補は涙目になりながら弱音を吐いた。このままだとさらに僻地に左遷されかねない。ローエングラム朝の官僚に無能者はいらない。惑星ロスジェーンでも僻地の部類なのにさらに僻地に飛ばされるのか。数ヶ月後には辺境の中の辺境、シベリア星系第

三惑星ドainaカンに赴任しているかも知れない。アルフベン警部補は深い息を吐いた。
「まあ、未来のことを考えたら鬼が笑うと言いますし…今ある情報でなんとか対策を立てましょう。」

マン巡査部長は落ち込む警部補を宥めるようにそう言つた。

「おい、昼飯のところ悪いがお前ら何かいい案はないか。結果出したらカツ丼奢つてやる。」

続いてマン巡査部長は大部屋の各デスクで昼飯を摑つている警官たちに案を求めた。
「んなもん決まつてますよ！拷問だ！拷問にかけましょう！」

早速過激な意見をひりだしたのはハンス・ツエーン巡査である。この面子の中では根っからの統合派、極右であった。

「却下！それやるからまともな情報を得られていないんだろうが！」

巡査部長は一喝した。

「古代ヨーロッパのシュタージの手法を真似るのはどうです？市民による情報網を作ることです。」

続いて案を述べたのはアルトウール・フォン・アイゼナッハ巡査である。こう見えても彼はあるのアイゼナッハ元帥のひ孫にあたるという意外な経歴の持ち主だ。
「効果は見込めそうだが却下！どれだけ時間がかかると思つている！」

またしても一喝した。アイゼナッハはちえつ、と言ひながら指をいじつた。

「秩序警察（クリ・ポ）との連携をさらに密に…はもうやつてゐるか。」

アルフ・ベネディクト巡査は何か意見を出そうとしたが、もうすでにやつてゐると気づいたらしくすぐさま取り下げる。

「もう軍の部隊に協力を要請しましよう。回復途上の我々じゃあ無理ですよ。」

諦め切つたような意見を出したのはフェルディナンド・ヴォルヴェーバー巡査だ。

「バカもん！ そう簡単に軍を動かせられるか！」

巡査部長はまたしても一喝した。

「お前ら！ まともな意見は出せんのか！ このままだと警部補がもつと田舎に飛ばされるぞ！ お前ら警部補を助けてやろうとする気概はないのか！ 男だろ！」

ハインリヒはなまつちよろい意見を出した巡査たちを険しい顔により皺を増やして叱責した。全く、うちの部下はどういつもヘンテコな意見しか出せないのか。彼は憤慨した。

「全くもう…」

「あ、あの…いいでしょか？」

一人の巡査が手を挙げた。新領土出身のチャン・ファン巡査である。

「…チャン巡査、言つてみろ。」

巡査部長は深みがある声で発言を許可する旨を言つた。

「今分かつてゐるアジトに私服警官をスパイとして入り込ませるとか…どうでしようかね？」

チヤンは弱々しい声でそう言つた。自信がないのか手が震えている。

巡査部長の厳しい顔にさらに皺が増えた。

「お前…私服警官なんてそんな危険じみたことができ」

「面白い案ですねえ。それでいきましょう。」

そう言つて彼を制したのはアルフベン警部補である。

「警部補、どうしてですか！どう見ても失敗するのが見え見えですよ！セクト主義者の巣窟に飛び込むのですぞ！」

巡査部長は警部補に抗議した。無理もない。ただでさえ少ない人員を危険な任務に回すのだ。抗議の一つもしたくなる。

「でもですよ。このままダラダラとやつてたら手がかりの一つも掴めませんよ。虎穴に入らずんば虎子を得ず。あえて敵の懷に飛び込むのもいいじゃないですか。」

それにこれ以上警察内から人殺しを量産させるわけにはいかないですし、とアルフベンは眼鏡を直しながら穏やかな声でそう言つた。

「…仮に実行するとして、実行役は誰になるんだ？言い出しつペのチヤンは確実として、

あともう一人欲しいな。』

『え、私がやるんですか!?』

「当然だろう。お前そこまで露骨な思想持つてないしな。それでだ。後一人やりたいといふ奴はおらんか?」

巡査部長は居並ぶ警察官たちにそう尋ねたが誰も手を挙げなかつた。ツエーン巡査に至つては嫌な顔をしているほどだ。

「全く、この部署のやる気のなさときたら…!!」

「あつ、私がやりましようかあ?」

そう言つて右手を挙手したのはアルフベン警部補であつた。

「警部補、あなたつて人は…!!」

巡査部長はこの何考へているかわからぬ若い警部補に何か言つてやろうと思つたが、どうせ何か言い返されるだけなのでガツクリと頃垂れた。

結局、反帝国革命組織に対する潜入捜査はアルフベン警部補とチャン巡査が担当することとなつた。

「何? 新しく加入したいやつが来ただと?」

反帝国・反統合派をスローガンとして掲げる革命組織「人民の護符」の首領であるテ

オドール・ルーデンドルフはチエスの駒を左手で器用に回しながら聞き返した。

「はあ。なんでも先の大蕭清の犠牲者の遺族でエルнст・アドルフの野郎に復讐したいと。」

「今のご時世にクソ親父に復讐したいという奴が現れるとはな。よほど醉狂な奴かよっぽどの馬鹿か。」

テオドールは駒をクルクルと器用に回して何事かを考えると、駒を勢いよく盤面に叩きつけた。

「チエックメイト。お前の負けだ。」

テオドールは一見獰猛そうな、しかして自信にありふれたような笑顔を男に向けてそう言つた。

「やつぱり委員長は強いですねえ…もう一局どうです？」

対局していた男、ホルスト・テールマンは盤面を見て頭をかきながらもう一局所望した。盤面は黒、すなわちテオドールがホルストの白を確実に追い込んでいた様を示していた。

「いや、いい。『悼む会』の連中と打ち合わせをしなければならないからな。」

テオドールはいかにも本望ではないという顔をしながらそう言つた。「人民の護符」は「悼む会」から派生した組織である。しかしその違いとして「悼む会」はがむしやら

な帝国への復讐を目指としているのに対し、「人民の護符」はその後の新政府の樹立を目的としている点である。テオドールから見てみれば、「悼む会」は殺人狂の連中に他ならなかつた。

テオドールは現在の帝国宰相ルーデンドルフ上級大将の長男である。ロスジェーン帝立大学に通う傍らこの世のどのようなものよりも嫌悪する父を否定するために革命組織に身を投じ、今まで活動してきた。

武力だけでは父を否定できない。父の理想を政治的に踏み躡り、否定し、作り変えなければならない。ヴォルフラム・ミツターマイヤーは確かに父を殺した。だが彼の全てを否定できたのだろうか。それと同じである。彼からしてみれば古巣である悼む会は論外とも言える団体であつた。

「全くあいつら、大肅清であれだけダメージを受けたというのにまだ懲りていらないのか……」

「まあそこまで言うことはないでしょう。彼らが被害担当になつてているから我々がこうして活動できるのですから。」

「だろうな。」

テオドールはそう言つてタバコを一本取り出して火をつけた。相変わらずニコチンの味は慣れないと。

「委員長！大変です！」

彼がそうしてニコチンを味わつていると一人の男が部屋に飛び込んできた。

「中央通りの同志に連絡に行つていた構成員が殺されました！内国安全保障局の奴らです！」

「何？それは本当か？」

「本當です！もう一人の連絡員は逮捕されました！」

テオドールは舌打ちした。おそらく統合派のシンパの警官が殺したのだろう。

テオドールはハンガーにかけてあるトレンチコートを羽織つた。

「おいホルスト。俺が代わりに連絡に行つてくる。『悼む会』の奴らとの連絡はおまえにまかせた。」

「了解しましたよ。」

テオドールは同志と一通り簡単なやりとりを済ませると、部屋から出ていった。

(全く、クソ親父はいつも俺の邪魔をしてばかりだ。)

テオドールは玄関に向かう道中でそう思い、誰にも聞こえないよう小さく舌打ちをした。

惑星ロスジェーンは今日も騒がしい。

テルヌーゼン進駐 1

宇宙暦882年6月、バーラト自治共和国主席ウイリアム・ダドリー・シモンズは一つの賭けに出ることにした。

すなわちバーラト領内で唯一の非武装地帯である第五惑星テルヌーゼンへの進駐と再武装化の試みである。

テルヌーゼンはバーラト星系の中で唯一非武装化が自治条約にて定められている惑星である。帝国軍が惑星ハイネセンに至るまでを考えると最終防衛ラインとしては大変優秀な立地である。

是非ともことその公転軌道上を要塞とせしめ、防備に不安の残るハイネセンの守りを固めたい。

そして今や戦闘艦のみで14,000以上という新領土有数の大艦隊を保有するバーラトの軍事力を進駐という形で誇示することによつて改めて新領土に更なる影響を及ぼしておきたい。

それこそがバーラト自治共和国首脳部、そしてシモンズの狙いであり、そしてまた挑戦であつた。

帝国に今やかつての力はなし。今しかこの千載一遇のチャンスを活かすことができないのだ。

閣議により3,000隻の戦闘艦隊、および25万人の陸上兵力を進駐させることが決定した。そしてその映えある役割に新設されたとある艦隊が選ばれる運びとなつた。

「それがなんでよりによつてうちの部隊なんだよ…」

バーラト自治共和国宇宙軍に大佐の階級と第一独立艦隊司令官という肩書で所属しているヘンドリック・ファン・リーベック大佐は送られてきた資料に目を通して半ば嘆きのような情けない声を上げた。

「まあ、仕方ないといえ巴仕方ないでしよう。閣議で決まつちやつたんですから。」

コンラッド・エイブス参謀長は落胆している司令官を慰めるようにそう言つた。
「三千隻程度の部隊なら他にもう編成されているだろう：：なんでよりによつて俺の部隊なんだよ…：：ちくしょ、クロムウェル大将め。謀つたな…」

しかし逆効果だつたらしく士官学校首席はそう言つて机の上に突つ伏してしまつた。プレッシャーには強い人間だと自認しているが流石に国家の命運に関わる事柄をいきなりポンと任されてしまえばこうもなろう。

「まあそれはそれとして。早いところ準備を進めてしまいましよう。」

「そうだ。早いところ準備をすすめてパツパツと終わらせればいいだけの話なんだ。サラゴサ少佐、物資および陸上部隊の積み込みは？」

ヘンドリックは仕方ないと割り切つたのか、すぐに顔を上げ、補給参謀に物資の積み込みの状況を尋ねた。

「順調にいけば後二日で終わるってところかね。今までにやつたことのない規模の積み込みだがスムーズにいっている。」

「訓練の成果だな。破綻しないように気をつけてくれ。エイカーズ中尉、艦隊の方の準備は？」

続いてヘンドリックはカミソリを思わせる鋭さの副官に艦隊の状況について尋ねた。副官は先ほどまで情けない醜態から一気に切り替わった司令官を見たためか、何やら複雑そうな表情を浮かべている。

「万全です。物資の積み込みと輸送艦隊への地上部隊の搭載さえ終えればいつでも出撃が可能です。」

「よし。艦隊はいつでも出発できるな。そして作戦参謀。：例のアレは？」

ヘンドリックは作戦参謀に例のアレと形容したものについて尋ねた。

「はい！テルヌーゼン軌道上、テルヌーゼン地表での戦闘を考慮して何パターンかを出しておきました！帝国軍が攻撃を仕掛けても万全です！」

ダミアン・フランソワ大尉は若い顔に脂汗を浮かべながら言い切った。

「場合によつてはシヴァ星域会戦以降の戦闘になりかねない。帝国のドンは統合派だからな。だから君にはこうしてある程度の作戦を組み立てるよう命令しておいたんだが：クロムウエル大将にどう説明しようかなあ、これ。」

ヘンドリックはそう言つて頭をぽりぽりと搔いた。全く、独断専行も甚だしい。ダミアンが組み立てた作戦群はもしものための保険で、撤退命令がすぐに出たら彼はすぐさま撤退する腹積もりでいた。

通信が入つたことを示すアラーム音が彼の耳の中に入ってきた。

「司令！地上部隊司令官アランゼーム中将がお見えです！」

どうも地上部隊の司令官が打ち合わせに来たようだ。ヘンドリックは頭をぽりぽりと搔きむしるのを止めた。

「分かった。すぐに行く。通しておいてくれ。」

今回の進駐における地上軍、および航空軍の総責任者であるフーゴ・アランゼーム中将は一言で言つてしまえば古代のアニメ作品に出てきた黄色いクマのキャラクターのような温厚な男であつた。無論、体格含めてである。

しかし彼を侮つてはならない。一見太つていそうに見える体のほとんどは鍛え抜か

れた筋肉に脂肪のコーティングが施された、いわばスモウのリキシのごとき体である。実際彼は軍の格闘技大会で何回か優勝を果たしている。

そんな彼の相手になるのが対照的なハンドリックなのであるが彼は物怖じもせずに会談に取り掛かった。

「帝国軍部隊がバーミリオンに存在する以上、まず敵艦隊は宇宙空間を経由してテルヌーゼンに進出しなければなりません。我が第一独立艦隊はまず軌道上に展開することにより帝国軍に対する警戒を行います。地上軍はその隙に指定地であるテルヌーゼン、ナイマーヘン、アントウェルペン、アクイタニアの4都市に進出、兵営建設作業を行なつてもらいたい。」

ハンドリックはテルヌーゼン軌道上とテルヌーゼン地表の地図を指し示しながらそう言つた。

「ふむふむ。私たちは頭上を気にすることなく作業に専念できると。そういうわけだね。」

「そのような認識で合っています。問題はこれを速やかに行わなければならぬということです。何せ電撃的に既成事実を作るという作業を行わなければならぬということですから。」

アランゼームはふむふむ、と言いながら資料をまじまじと見つめた。まあ出来がいい

ということは自負してはいるがこうしてまじまじと見つめられると、欠点を指摘されそ
うで恥ずかしくなる。ヘンドリックはそう思つた。

「ふむ。まあ大体分かったよ。要するに古代のラインラント進駐みたいなもんだね。政
府も思い切つた策を実行してきたもんだよ。」

「全くもつてその通りとしか言いようがありません。」

「まあそうだけどね。でもこれ見ていると懸念事項が一つ浮かび上がつてくるんだ。」

太つちよの陸軍中将は資料群を丁寧に机に置き、改めてヘンドリックを見据えた。

「私が懸念していることはね。ラインラント進駐のように遺憾の意だけでは済まさずに
進出してきた帝国軍部隊が攻撃をかけてくることにあるんだ。ほら、今の帝国政府はこ
ちらへの敵意を丸出しにしているだろ？ バーラトに敵意を持つてゐる将官を司令官に
してなんらかの手段で戦闘を仕掛けてくるかもしれない。」

不思議な説得力があつた。今の帝国がかつての帝国だつたらそんなことない、と一蹴
できただろう。しかし今の帝国政府のあり方が妙な説得力を持たせていた。

「……ない、とは言い切れませんね。戦闘に限らずなんらかの既成事実を作つた上で宣戦
布告、などを仕掛けてくるとは考へています。」

ヘンドリックは疑惑半分、確証半分といつた感じで返答した。

「しかし安心ください。我々第一独立艦隊はそれを見越して幾つかの作戦パターンを

構築しております。安心して、地上での作業に専念してください。」

ヘンドリックはそう言つて用意してあつたコーヒーヒーに口をつけた。コーヒーヒーの鋭い苦味が彼の口腔と喉を潤した。後でエイカーズ中尉を褒めておこう。ヘンドリックはそう決意した。

「頼もしい限りだね。じゃあ頭上は君たちに任せて、我々地上軍は地上軍で与えられた任務に専念しよう。それが民主主義国家の軍隊というものだ。」

「政党は一つしかありませんけどね。」

ヘンドリックとアランゼームは一通り笑つた後、改めてコーヒーヒーに口をつけた。

6月6日。ヘンドリック・ファン・リーベックは第一独立艦隊旗艦「ユリシーズ」の艦上の人となっていた。

目的地はテルヌーゼン。シヴァ星域会戦後にユリアン・ミンツとラインハルト帝の間で締結された自治条約の項目の一つを死文化しに、悪く言えば破りにいくのだ。

駐留基地の存在するオストロフスキーカ惑星帯から目標のテルヌーゼンまでは距離に換算して5光分ほど。星系内通常航行で大体2日といったところであった。

「本当に大丈夫かなあ…」

ヘンドリックはブリッジの提督席にだらしなくもたれかけながらそうごちた。今度

は帝国に武力で挑戦するのだ。そうも言いたくなる気持ちもわかる。

「大丈夫に決まつてんだろ。俺が補給を整えておいた艦隊だぞ。自信を持てよ。」

イグナシオ・サラゴサ少佐はだらしなくもたれかかる親友をそう励ました。

「まあ確かにそうかもしけんな。少なくともやること全てやつたんだ。」

ヘンドリックは椅子から起き上がりながらそう答えた。

「人事を尽くして天命を待つ、とも言いますからね。上手くいくかどうかは神のみぞ知るということですよ。まあ我々はやるべきことをやりましょう。」

続いてエイブス参謀長が激励する。自分よりも長い人生経験があるからなのか、妙な説得力を持っていた。

「エイカーズ中尉も何か言つてやつたらどうですか？下手したら司令が心配でトイレに籠りきりになるかもしれませんよ。」

「参謀長、いくらユリシーズのトイレが快適だからといってそこまではしませんよ。」

エイカーズを除く幕僚一同にたちまち笑いが広まつた。

エイカーズは何かを考える素振りをすると、ヘンドリックの膝に乗せられているベレー帽を掴み、彼の頭に載せた。

「任務中はせめて服装はきちんとしてください。服装の乱れは軍紀の乱れに繋がりますので。」

凛とした声でそう言うとエイカーズは次にヘンドリックの軍服のだらしない襟を直し始めた。

「…結婚相手、中尉にしたらどうだ？今よりもきっちとした生活になると思うぞ。」

「おいおいイグナシオ、それは俺がヤン元帥みたいだと言いたいのか？」

「少なくとも生活の面ではな。」

「ひでえな。」

またしてもブリッジ中に笑い声が広がった。今度は幕僚団のみならずそれに聞き耳を立てていたブリッジの兵士たちまでもが笑い声を上げていた。

宇宙暦882年6月8日。バーラト自治共和国は非武装地帯に定められていたテルヌーゼンへと兵を進めた。後の世に言うテルヌーゼン進駐である。

軌道上に展開した艦隊から降り立つた地上軍25万人は速やかに主要4都市をはじめとする都市部に進出。ここに兵営を建設する作業に取り掛かった。

この日は奇しくも帝国政府の各省庁の休日に定められていた日曜日であり、帝国がその情報を掴んだのは翌日9日の真っ昼間のことであつた。

帝国政府は新領土総督を通して抗議通信を送信、駐留艦隊司令長官ゴルツマイヤー大將に警告目的で何千隻かの艦隊をバーラト星域に派遣した。司令官は統合派のシンパ

で反民主共和制を公言してならないブルカウ少将であつた。

6月11日、ヘンドリック・ファン・リーベック率いる自治共和国艦隊とブルカウ少将率いる帝国艦隊がテルヌーゼン軌道上で睨み合う形となつた。実弾こそ伴わないそれは、他ならぬ戦争の始まりであると、誰の目からも明らかであつた。

テルヌーゼン進駐 2

「大将！なぜ即時攻撃の命令を下さないのだ！」

新領土全ての総督の地位にある男、アシュレイ・リデル・トリューニヒトは目の前の軍服を纏つた恰幅のいい男に鼓膜が破れんばかりの声で抗議した。

「閣下、あくまで我々の目的は即時撤退のための警告を発することあります。無用な攻撃は無駄な戦闘を生みかねません。」

「そんなのは建前だ！ バーラトのウエンリスタどもに一撃を加える！ これこそがルーデンドルフ閣下、そして皇帝陛下が真に望まれてのことだろう！」

（やれやれ、これがあの化け狐トリューニヒトの末裔か。）

ゴルツマイヤーは目の前で力説している男をある種の哀れみの視線をもつてそう評価した。

アシュレイ・リデル・トリューニヒト。今年で37歳になる彼は自由惑星同盟最後の国家元首であり、そして帝国に立憲民主制を根付かせようと暗躍していた、まさに怪物とも言える男であつた怪人ヨブ・トリューニヒトの子孫にあたる男である。

その性格はまさしく虎の威を借る狐。典型的な小心者であつた。常に何かに付き纏

わなければ生きていけず、そのためには最も力を持つものに媚を売ることを生涯の試みとする。

例として彼の近年の政治的動向を挙げてみよう。彼はクーデターまでは開明派として各地で開明的とされる政治に着手し、開明派においてその人ありと名を馳せていてが、いざクーデターが成功したら手のひらを返して統合派のシンパとして一転して開明派とケスラー閣の弾圧に加担した。

アシュレイ・リデル・トリューニヒトにとつて思想信条とはバーラトの初代情報委員長の言うところの生きるための方便でしかないのだ。

今必死で主張している攻撃論も中央政界において統合派にいい印象を与えるためであろう。

(全く、子孫のこの醜態をあの怪物が見たらどう思うことか。)

ゴルツマイヤーは哀れみの視線を向けながらため息を吐きそうになつたがグツと我慢した。目の前の男は相変わらず疲れを知らずに喋り続けている。こういうところだけは先祖にそつくりである。

「分かりました。総督の仰ることはよく分かりましたとも。要するに総督はテルヌーゼンに展開しているバーラト軍に一撃を加え、それを口実に宣戦を布告し、バーラトを取り潰そうとのお考えでいらっしゃるわけですね。」

「おお！分かつてくれるか！ならさつさと命令を」

「総督は新領土に無益な争いをばら撒きたいとお考えですか？今ここで卓越した軍量を持つに至ったバーラトと剣戟を交えた場合、新領土に多かれ少なかれ悪影響が出ることは間違いないこと。宰相、そして皇帝陛下はよく思われないでしような。それをよくご存知なのは他ならぬあなたでしょう？」

ゴルツマイヤーはそう吐き捨てるよう言い、「それでは、私めは残された業務を片付けなければいけませんので」と言つて総督執務室から退室した。

退室する間際にアシュレイの無念そうに何か言いたそうな表情を浮かべているのが目に見てとれた。

デイルレヴァンカーは受話器を握る手の力を強めながら歯噛みした。総督を動かして攻撃命令を出させることに失敗したのである。

バーラトがテルヌーゼンに進駐との報を受け取つたとき、彼は思わず狂喜乱舞してしまつた。

無理もない。ついにバーラトを合法的に取り潰せるチャンスが到来したのである！

このチャンスを逃してしまえば次はいつ来るのかもう分からない。いや、もう最後かもしれない。大神オーディンから与えられたチャンスは今しかないのだ。

彼はすぐさま総督府に接触をかけた。総督のトリューニヒトは小心者で党同伐異の見本のような人間である。すかさず中央への出世を餌にしてあの頭の固い、大義を知らぬ蒙昧な司令長官に攻撃命令を出させるように要求した。

ところが司令長官は頑なに攻撃命令を出さないどころか、一発説教をかましたと聞く！

上位命令者に当たる総督の命令を拒否し、あまつさえ一発説教をかましたことは許されることではないが、何よりも機を見ることができない男であつたとは！今バーラトを攻撃しないでいつ攻撃するのか！

あのままバーラトを放つておいたら、民主共和主義の害毒が神聖な帝国を蝕むというのに！

「…分かつた。こちらからも司令長官に一言言つておく。ご苦労だつた。」

そう言つて彼は受話器をガチャン！と乱暴に元に戻し、一発壁を殴つてから次やるべきことについて思考を巡らせた。

（あの蒙昧に何か言つても無駄だろう。かくなる上はブルカウ少将に極秘回線で攻撃命令を出すか？いや、それだとバレた時が一番怖い。やはりブルカウ少将の自主性に任せることか…）

彼がそう思考を巡らせているとまたしても電話がけたたましい音を立てて着信が来

たことを周囲の空間に伝達し始めた。デイルレヴァンカーは一旦思考を巡らせるプロセスを中断して再び受話器を掴んだ。

「私だ。デイルレヴァンカーだ。今度は一体何があつた？」

電話の相手は先ほどの総督府の職員ではないようだ。

「こちらは司令部通信課ですが、ブルカウ少将がしきりに攻撃許可を求める通信を送つてきまして：司令長官に指示を仰ぎたいのですが、その様子だと不在ですかね？」
渡りに船であった。ここでブルカウ少将に攻撃の命令を司令長官代理として出せば、すぐバラトに攻撃できるではないか。

（ブルカウ少将に今度高い酒を振る舞つてやらないとな。）

デイルレヴァンカーのハゲタカのような顔は思わずニヤついていた。

「司令長官は不在だ。よつて私が代理として指示を伝える。そうだな…3回撤退警告を発して」

「参謀長、誰と話しているんだ？」

デイルレヴァンカーは思わず声のした方向に視線を向けた。そこにはゴルツマイヤー司令長官が走つてきたのか荒い息を立てながら見つめていた。

「いえ、司令部通信課の方から電話でしてな。ブルカウ少将になんと伝えれば良いのかと…」

「貸せ。あとは私がやる。」

ゴルツマイヤーはそう言つて受話器をひつたくつた。

「私だ。何？ブルカウ少将がしきりに攻撃命令を要求しているだと？引き続きその場に留まり警告を発しろと伝える。逆らつたら軍法会議にかけてやると脅しをかけてやれ。」

ゴルツマイヤーは一通り言つてから受話器を置き、デイルレヴァンカーを一瞥してから椅子に腰掛けた。

「参謀長。」

「はつ、なんでしようか。」

司令長官の睨みつけるような視線が参謀長に突き刺さる。

「先ほどの通信課との連絡についてだが、まさか独断で攻撃命令を出そうと考えてはいなかつただろうな。」

デイルレヴァンカーは舌打ちをしそうになつたがうまく抑えることができた。まったく、どうしてこの男は変なところで勘が働くのだ。

「何を馬鹿なことを。私だつて自分の職務は弁えておりますとも。」

「ふん。それはどうかな。バーラトを目の敵にしている貴官のことだ。いかにもこの機会にやりそุดがな。」

司令長官はそう言つてから机に置いてある書類を手に取り一瞥してから、ペンを取つて一通りサインをした。

「参謀長。貴官の思想はもうこの際は問わん。勝手な行動は謹んでもらおう。でなければ軍法会議にかけるよう参謀本部に直訴することになる。肝に銘じておけ。」

デイルレヴァンカーは苦虫を噛み潰したような表情を一瞬浮かべた。やはり総督府の職員を動かしているのが見抜かれているのだろう。

「…はっ。」

デイルレヴァンカーはなんとか顔を元に戻して敬礼した。

「…依然として警告を発しつつ待機、だと?!」

ブルカウ少将は憤った。再三攻撃の許可を送つてゐるのにいざ司令部から帰つてきた答えは相変わらずの「変更がない限り警告を発しつつ待機せよ」であつたからだ。「今日の前でバラトのクソどもが神聖にして不可侵なる帝国の慈悲を踏み躡らんとしているんだぞ！それを傍観しろなどと…!!」

少将はそう言つて旗艦としている戦艦「ブルグント」の床板をガン！と右足で思いつきり踏みつけた。幕僚たちは司令官の怒りにどう対応していいのか分からず、右往左往している。

ブルカウは一通り床板を踏みつけると今度はどすどすと体を揺らして前進し、司令席の前方に備え付けられたステーを思いつきり掴み、前方の宇宙空間が映し出されたスクリーンを凝視した。

バルラト星系第五惑星テルヌーゼン。美しい青を湛えているその星に今まさしくバルラト軍が条約を破つて兵営建設作業を行なつてゐる。

それだけだつたら彼の怒りも少しは落ち着いたものになつていただろう。彼の怒りの最もたる原因となつてゐるもの、それは軌道上にぽつりぽつりと、しかし整然と行動している2、3000ほどの小さな点の数々であつた。

バルラト宇宙艦隊。その数3,000隻。軍備制限を公然と破つてゐるのは彼も知ることであつたが、まさかかつての全軍を一部隊として派遣できるほどの数を持つていたとは！

「小生意氣な共和主義者どもめ……！」

ステーを握る力が強くなる。彼にとつて眼前の点の数々は到底許せるものではなかつた。太祖獅子大帝より始まるローエングラム朝の力の源は宇宙空間を支配する艦隊である。艦隊の多さとそれに比例する前線展開鉄量の多さこそ宇宙の支配を担保するものである。それは新領土の支配にも言えたことであつた。

にもかかわらず帝国に匹敵する第二者を自ら生み出してしまふとは、なんと情けない

ことなのであらうか！今やバーラトは10,000以上の大艦隊を保有していると聞くではないか。このままで新領土支配の正当性は損なわれ、ローエングラム朝は滅亡の淵を歩むことになるだろう。

（そんなこと、断じて許してはならぬ！帝国は、世界は、一つであるべきなのだ！）

ステーを握る力がさらに強まる。心なしか、少しばかしステーがねじ曲がっているように見える。幕僚たちはどうすればいいか分からず、相変わらず右往左往している。

「かくなる上は…」

ブルカウはそう呟きながらあることを決意した。帝国の支配の担保は艦隊の鉄量のみにあらず。その鉄量をいかに行使するかによつても正当性を担保しうるのだ。つまるところ戦術である。

太祖獅子大帝と7元帥を始めとする提督たちはそれによつてローエングラム朝の支配確立に貢献した。

ならば自分もそれに倣おうではないか。艦隊の戦術機動によつてこちらが上であることを見せつけるのだ。実弾さえ使わなければあの頭の固い司令長官からお咎めはないだろう。

「参謀長！ビットブルク大佐とツイヒナウ大佐の戦隊に連絡しろ！前方のバーラト軍の側面、背面を突くように迂回！共和主義者どもを包囲する！実弾は使うな！こちらが上

であることを見せつけるのだ！」

「は、はい！」

幕僚陣の中とりわけ臆病である参謀長は怯えた声でそう言い、びしりと敬礼した。
(全く、参謀長であれとはな。太祖獅子大帝が嘆いておるわ！)

ブルカウはそう思いながら前方の青い星テルヌーゼンを見つめた。

テルヌーゼン進駐 3

「こりや敵さんやる気になつたか？」

テルヌーゼンの軌道上を守る艦隊の司令官であるヘンドリック・ファン・リーベック大佐は敵艦隊の動きの報告を聞きながら呟いた。

先程まで睨み合うよう展開していた帝国艦隊5,000隻のうち、1,000隻ずつの戦隊二つがこちらを左右から挟み込むように迂回するような機動をとつたというのだ。

「これは間違いなく包囲の動きですね：司令、どうします？このまま撃つてくるようなことがあつたら…」

ダミアン・フランソワ大尉は心配そうな口調でこれから対応を司令官に問い合わせた。

「まあ定石通りならアスターのラインハルト帝のように包囲が完成し切る前に最大戦速で動いて各個撃破つてのが理想なんだが：流石に今の段階でそれやると戦争になる。」

ヘンドリックはそう答えて頭をぽりぽりと搔いた。全く、うまいことしてやられた。

敵はそこまでして戦いたいのか。どうも敵の闘志を見誤つたようだ。

「中尉。従兵にコーヒーを頼む。リフレッシュしたい。」

ヘンドリックは一旦思考をリフレッシュすることに決めた。2、3分後には温かいコーヒーが彼の元へと届けられた。

ヘンドリックはコーヒーを啜りながら一通りの情報に目を通し、状況を整理する。距離と速度から考えて帝国軍がこちらを包囲する形になるのは後1、2時間あれば十分だろう。それを脱却するには包囲し切る前に敵の薄いところを攻撃して突破するしかないがそうすると戦争になる。

そもそも敵は攻撃の意思があるのだろうか。包囲機動もこちらが上であるというサインを示しているに他ならないかも知れない。しかもしも攻撃の意思があるようだつたら一方的に虐殺されることになるだろう。

「全く、どうしてこう俺には難題ばつか降りかかるんだ…」

ヘンドリックはそうごちた。魅力的な給料に惹かれて軍隊に入つてからいつもこくだ。いきなり司令官はやらされるし最初の仕事がこれだ。

「司令。」

彼の思考は一人の幕僚の声で止められた。通信参謀のシロウ・ヒフミである。「どうした。通信参謀。何かあつたか。」

「帝国艦隊からこちら宛に通信です。繋ぎます?」
「繋げ。」

ヒフミ大尉はこくん、と頷いてから端末をひとしきり操作した。程なくしてブリツジのメインスクリーンに帝国軍の黒の軍服を纏つた恰幅の良い男が画面に現れた。あれがブルカウ少将なのだろう。

『獅子大帝の恩寵を恐れ多くも踏み躊躇り、あまつさえ神聖不可侵な我が帝国に刃向かおうとする俗悪で愚鈍なる共和主義者、ウエンリスタの叛徒どもに告ぐ!』

私はオリエント騎兵艦隊司令長官のハイドリッヒ・ブルカウ少将である。

貴様らの望みの綱である宇宙艦隊は既に我が精銳艦隊に包囲されつつある! どれだけ艦隊を持とうとも所詮は蠍の斧、夢きものよ! 我が帝国艦隊は一斉射をもつてして貴様らの艦隊を屠ることが出来る!

これで分かったか! 帝国に刃向かうことがどれだけ無謀なことか! 世界に刃向かうことかがどれだけ愚かなことか! 分からないのであれば次はテルヌーゼンの地上軍をムスペルヘイムに落としてやるとしてしよう!

無思慮で無節操な叛徒に返答は求めぬ。ただし自らの罪を本当に理解し、平身低頭し誇りを投げ打つて罪を悔いるようであれば、皇帝陛下にとりなしてやろうではないか。』映像の中のブルカウ少将は一通り大声で笑った後、スクリーンが黒に変化した。通信

が切れたのである。ブリッジの中が俄に騒がしくなつた。

「これは…我が國も物凄い侮辱を受けましたなあ。」

コンラッド・エイブス参謀長は感心しているのか怒っているのか、掴みどころの無い
ような口調でそう言つた。

「まあ我が軍も侮辱を受けるくらいに大きくなつたと思えばですね…しかし返答を求め
ぬとは。大きく出たもんです。」

そう返答したのはティードリヒ・ハウス情報参謀である。

「しかし艦隊だけならまだしも、テルヌーゼンを火の海にすると言つてましたよ。…ど
うします？」

ダミアン・フランソワ作戦参謀は相変わらずの心配そうな口調で改めて司令官に今後
の動向を問い合わせた。彼はまだ若く、人生経験をそれほど積んでいないためか、心配性
の面がある。

ヘンドリックはしばらくレーダー画面と戦況図をじつと見て何かを考え込んでいた
が、やがて結論を出した。

「通信参謀、全艦に密集突撃陣形を取るように連絡してくれ。」

「み、密集突撃陣形つて…！帝国艦隊に突撃するつもりですか？戦争になりますよ！」

通信参謀は驚いた。この司令官はついにバーラトを戦争に巻き込む気になつたのか。

ウエンリスタをアレほど嫌っていた司令官だ。バーラトゴとウエンリスタを焼き尽くそうと考えているかもしれない。

「そうだ。ただし帝国艦隊の横合いスレスレを通り抜けるようにして突撃する。要はブルカウとかいう司令官に肝を冷やさせてこれ以上の行動を制限させるのさ。大尉、データを作つておいて各戦隊に送つてくれ。」

「り、了解です…!!」

ダミアン大尉は敬礼するとコンソールを弄り、何人かの随員と一緒に戦術データを作る作業にとりかかつた。

「司令。」

横合いから冷たさを感じる声が聞こえてきた。エイカーズ中尉である。

「…本当に大丈夫なのですか？」

「何が？」

ヘンドリックはコーヒーを一口啜つた。

「幕僚本部にどのように報告するのですか？どう見ても明らかに応戦しようとする動きですし、場合によつては司令の責任問題が問われる事態になりかねませんが…」

ヘンドリックは二、三回ほど頭を搔いて、

「まあ良くて始末書か悪くて謹慎処分だろうなあ。今の通信、録画してあつただろ？と

りあえずアレも一緒に出して帝国から仕掛けてきたと報告しておこう。」
と言つて、再びコーヒーを啜つた。

「まあやるべきことはやつたんだ。今は目の前のことに集中しよう。今から事後処理のことを考えてもしようがない。」

ヘンドリックはそう言つてコーヒーをテーブルの上に置いた。

ブルカウ少将は目をひん剥いた。投降ないしは撤退すると思われていた共和主義者どもの艦隊がこちらに向けて前進をかけてきたのだ。

つまるところ突撃を仕掛けてきたのである。もしくは自暴自棄になつて特攻してきたか。

(二) 小生意氣な共和主義者どもめ。とうとう戦争をする気になつたか!—)

ブルカウ少将は送られた戦況図を見ながら心の中で前方から突っ込んでくるバーラトの共和主義者に向かつてそう毒づいた。

少し脅してこちらが上であることを示そうという考えはどうも間違いだつたようで却つて彼らを死兵に仕立て上げてしまつたかもしれない。窮鼠猫を噛む。死兵となつた軍隊ほど厄介なものはない。

「て、提督、どうしましよう。な、何か対策を練らないと、せ、戦争に：」

参謀長は声を震わせながら司令官に次の指示を求めた。なんとも嘆かわしいことにブルカウの幕僚たちはこう言つた時にどのような対応を取ればいいのかわからずじまいであつた。

「ううう、狼狽えるんじやない！全艦隊2時方向に回頭しろ！さ、さつさと回避するぞ！」

「無理です！バーラト艦隊、桁違いに速すぎます！あ、あと15分で接触します！」

「な、なんだと！」

ブルカウはまたしても目をひん剥いた。かつてなら1時間ほどかかる距離を僅か30分で詰めてきたのだ。今現在は15分経つたところであるからあと15分の計算になる。

80年の時は技術にとつては大きなものになる。かつては一生の課題であつた事柄でさえも、正当な費用と時間の流れとその他諸々さえ与えておけば自ずと解決する技術が生まれるものなのだ。かの獅子大帝は当時の技術総監であるシャフト技術大将を冷淡に扱つたが、もし厚遇していれば銀河の戦闘の歴史は大きなものになつていただろう。

帝国軍の艦船はその時の流れの恩恵を正当に受け取り、かつての大戦時のそれよりも

強力なものになつてゐる。バーラト軍の新造のそれとは比べ物にならないと誰もが思つてゐた。思つてゐたのだが……

（この速さは……まるで疾風ウオルフ、ミッターマイヤー大元帥ではないか！）

ブルカウは改めて驚愕した。それにしても明らかに速い。まさしくかのミッターマイヤー大元帥を想起させるほどに。一体アレに搭載されている機関はなんなのだ。それを扱う将帥は誰なのだ！

「て、提督！ 早く、早くご指示を！ このまま我々は……！」

相変わらず臆病者揃いの幕僚たちが指示を求めて騒ぎ立てる。ただでさえ短気な彼にしては長く持つた方で、とうとう堪忍袋の尾が切れてしまつた。彼は幕僚たちへ振り返る。

「……卿らは自らの職分の役割がなんたるかを弁えておらず、ただ平時の仕事をのうのうとこなすだけの能無しのようだな！ まず指示を求める前に自分の頭で何か策の一つでも考えたらどうだ！」

「て、提督？ 一体何を……」

「黙れ！ 能無しが！ 帝国軍も腐り果てたものよ！ 帝国開闢から80年、その根幹たる軍の幹部たちがこのような為体であるとはな！ 太祖獅子大帝もお嘆きになるだろうよ！」とにかく彼は幕僚たちに向けて力の限りがなり立てた。ここで幕僚たちを擁護して

おくが彼らは決して無能ではなく、少なくとも平時の業務をそつなくこなせる人材であることをあらかじめ言つておく。

「あ、あの、提督……よろしいでしようか？」

勇気のある幕僚の一人が举手しながら発言の許可を求めた。

「何だ！」

「も、もうすぐバーラト軍と接触するとのことで…」

ブルカウはまたしても目をひん剥いた。刹那、いくつかのモスグリーンに塗られた艦影が戦艦「ブルグント」の周囲をすり抜けるようにしていつて通り抜けていく。ブルカウは年甲斐もなく腰を抜かしてしまい、しばらくは立ち上がることが出来なかつた。

バーラト軍宇宙艦隊はこちらの左側面をすり抜けるようにして通り抜けていつたとわかつたのはこの僅か3分後であつた。

1時間後、速度を緩めたバーラト艦隊はゆっくりと回頭、帝国艦隊の背後を突く形となつた。

バーラト艦隊から帝国艦隊へ通信が入つたのは回頭が終わつてから1時間後、いつでも帝国艦隊へ射撃に移れる態勢に入つてからであつた。

テルヌーゼン進駐 4

バーラト自治共和国の政治的首都であり最大の経済的要衝であるハイネセンポリスは大歓声に湧きかえっていた。

いや、ハイネセンポリスだけではない。惑星ハイネセン全土が、下手すればテルヌーゼンまでもが、ひよっとするとバーラト全土が大歓声に沸き立っていた。

テルヌーゼン軌道上に進出していた帝国艦隊が撤退したのである。宇宙暦882年6月11日、バーラト標準時で午後22時30分の出来事であった。

さらにその次の12時、フェザーンから皇帝フランツ一世の口からさらにバーラト国民を喜ばせる出来事が発生した。

『朕思うに新帝国暦4年自治条約は現代の時世にそぐわなくなりつつあると考える。

世界は時の流れとともに移ろい変わりゆくものであり、国家もまた、変わりゆくものであると考える。

今回の件でバーラトはかつて我々が知るものよりも大きく変容した。朕はこれを受けて司令官の独断を謝罪するとともに、条約改正について話し合いの席を設けたいと考える次第である。』

全世界を支配する唯一の政権である帝国の主権者にして絶対者である皇帝自らの口から自治条約改正を引き出すことに成功したのである。この報にバーラトの有権者たちは大いに喜んだ。

ある都市では夜通しお祭り騒ぎになり、ある都市では市民にシャンパンやジュースが振る舞われ、ある都市では市長がウエンリスモ精神を今回の勝利と国父に献杯したり、ある都市では今回の勝利を祝い国父と楊家将らの神像が独断で作られた。

そしてハイネセンポリスでは祝日であるのかと言いたくなるほどに賑やかになつていた。花火はその絶えるところを知らず上がり続け、人々は今回の英雄ヘンドリックシモンズ、そして国父の写真を掲げたり首から下げたりして通りを歩いている。よくよく見るとケバブやビール、ヤキトリやタコヤキ、ギュウクシの屋台までもが軒を連ねている始末だ。

「自由万歳！ 民主万歳！ 革命万歳！ 国父万歳！」

「カイザーをダウンさせたぞ！」

「シモンズを讃えよ！ どんどんやれ！」

「国父の思想は正しい！ 故に負けないので！ バーラトは正しいから負けないので！」

「くたばれカイザー！ くたばれラインハルトのクソガキども！」

「国父も御照覧あれ！！」

「万歳、万歳、万々歳!!」

人々は酒や料理の入れ物片手に口々にそう叫んだ。

その有様はまさしく、世界を揺り動かすほどであつた。

対帝国全権委員会の庁舎となつてゐる高層建築物の、その執務室からアレン・モーリス・ブルツクはそれを眺めていた。そしてそれを眺めながら一抹の不安に襲われていた。

というのも首都の有様を見てからというもの、一昨年に親交を持ったブリューニング氏の予言が浮かび上がり、それが頭から離れないためであつた。

シモンズが政権を握り、ABWUAという形でそれを強固なものにして以来、彼の権勢は鰐登りに上昇していき、とうとう不動のものになつてしまつた。共和国の絶対権力者としての不動の地位を築き上げたのである。

シモンズはその絶対的権力者の地位に就いて内政的な勝利はもちろんのこと、帝国に対して外交的大勝利を収めた。それも二回。二回もあれば民衆に強い指導者としての印象を抱かせるには十分だろう。

民衆はこの勝利を受けてさらなる勝利をシモンズに求めるだろう。シモンズはお人呼びの気がある。民衆の声援を糧に冒険的政策を繰り返し、民衆はさらなる結果をシモ

ンズに求めるだろう。そうなるとどうなることか…

(…ブリューニング氏の予言はまさしく正鵠を射たものなのかもしれないな。)

ブルックは窓の外、眼下で列を連ねる群衆を眺めながらそんなことを思った。

(シモンズのことを考えしていても仕方がない。目の前のこと集中しなければな。)

ブルックは頬をぴしやりと両の手で一、三回ほど気合を入れるように叩いてから執務室に備えられた椅子にもたれかけた。

扉を叩く音が二、三回響いた。瞬間、1人の政治家としては脂の乗る年齢の男が執務室に何枚かの書類を片手に入ってきた。

「委員長、会談の日程が決まりました。25日にバーミリオンの総督府にて執り行うようです。」

「ご苦労。キヤゼルヌ副委員長。書類はそこに置いておいてくれ。」

キヤゼルヌ副委員長と呼ばれた男、本名ルイ・アントワーヌ・キヤゼルヌは楊家将の縁の下の力持ちである自治共和国第4代主席アレックス・キヤゼルヌの孫に当たる男である。彼もまた統帥派の現役の政治家であり、一貫してボルシエヴィキ稳健派時代の統帥派、バラト民主委員会を裸一貫で支えた男である。毒舌こそ世代を経て抜け落ちてしまつたが紛れもなくキヤゼルヌ中将の子孫である。

「しかし委員長も難儀なもんですな。シモンズから祭りの後始末を押し付けられたんで

すから。」

「ははは、現役の頃から後始末には慣れているさ。それにこりう時の外交というのは大抵尻拭いの役割を持つていてるのさ。」

ブルックは少し笑いながらそう言つて、何枚かの書類に目を通した。会談の日程、代表団のメンバー、会場の位置、スケジュール：日を通しておかなればならないことがいっぱいだつた。

「そういえば委員長。」

「ん？ どうした？」

「皇帝は一体何を考えているんですかね？ いきなり自治条約改正なんか言い出して。普通は展開していく艦隊の動きから何かといちやもんの一つぐらいはつけるだらうと考えていましたが。」

ルイ・アントワーヌは腕組みをしながら疑問を口にした。

「3月のシャンプレール条約も皇帝の鶴の一声で締結が決まつたと聞きますし。普通は粘り強く交渉するもんでしょう。何か企んでるんじゃないですかね？」

ルイ・アントワーヌの言はたしかにこれまでのバーラトに対する帝国の外交的な動きを見れば誰だつて抱く疑問であつた。

絶対君主主義国家である帝国にとつて皇帝の意思決定は何よりも尊ぶべきものであ

り、最終的な決定を意味していた。それ故に氣弱で意志薄弱なハインリヒ1世の時代では自分の派閥に都合のいい決断を皇帝に出させようとあれこれ工作が行われていたのである。

そして絶対君主が国家というものを背負う立場である限り、その決断は国家国民の利益に叶うものでなければならぬ。

にもかかわらず今上帝フランツ1世は奇妙な決断を下し続けている。明らかに帝国に対して利敵行為を働いているバーラトに譲歩しているのである。

帝国には譲歩せざるを得ない事情があるのは知つての通りだ。ブラウンシュヴァイク熱、飢饉、海賊、テロリズム、経済格差、そして経済的停滞。これらの問題に率先して対処しなければならないのだ。しかしそれでも譲つてはならないラインは国家を背負う限り存在するのである。

それを考慮のうちに入れるとたしかにおかしな話もある。フランツ1世は絶対に守らなければいけない線を越えて譲歩の動きを見せて いる。しかも今回の譲歩は帝国内におけるバラートの地位の根幹である自治条約の改正である。普通なら何か裏があると考へてもおかしくはないだろう。あるいはもつと別の思惑があるか：

「…皇帝にも何か考へがあるのでどうな。それがなんのかは今の段階ではわからないが。まあそれは置いといてだ。今はシモンズの火遊びの後始末をつけることに集中し

ようじやないか。とにかく我々はまたしても勝つたのだからな。」

ブルツクはそう言つてから資料をポンと執務机の上に置いた。

「まあ帝国の問題は我々が思つた以上に深刻だと聞きますしね。今回のことでもおそらくそれだと考えましょう。」

ルイ・アントワーヌは言い終わると「明日は代表団の打ち合わせですから、早いところ終わらせて休んだ方がいいですよ。」と言つてから退室した。

ブルツクは椅子の背もたれに体重を乗せると、これから起きることを無意識のうちに考えてしまつたのか、天井を見上げてため息をついた。

帝国宇宙軍所属の閻僚用にあつらえられた特別巡航艦「アルメー・ツヴァイ」に搭乗している国家維新評議会副議長フリードリヒ・フォルベック国務尚書は窓に広がるサジタリウス腕の星空を眺めながら新帝国暦32年産のウイスキーを傾けていた。

「星を見ておいでですかね」

そんな彼に声をかけるものがいた。国務省弁務官事務総長のアルフレッド・セルクラエスである。フォルベックがバーラトとの交渉のために率いている外交団のナンバー2であつた。

「いや、とんでもなく遠いところまで来た、と思つてね。」

フォルベックはグラスを置きながらそう答えた。

「正直なところ自分は一軍人で終わるはずだと思つてたんだよ。まさか国務尚書にまで成り上がるとは考えてはいなかつた。」

フォルベックは星空を見つめながらそう言つた。軍現役時代に友誼を結んだ1人の厳つい宇宙軍人。彼が自分をこの場に押し上げたことを考えると複雑な気分になつた。

エルнст・アドルフは真面目な人間である。真面目すぎるが故に腐敗を許さない。

エルнст・アドルフは正義感の強い人間である。強すぎるが故に悪を許さない。

エルнст・アドルフは：

(危なつかしい人間だ。だからせめて私が是正してやらなければいけないのかもしれない。)

彼は友人のことについて頭の中でそう結論づけた。結論づけたはずだつた。

だが現実として自分が彼の抑止力となれたことが一度たりともあつたのだろうか。むしろ抑止力になるどころか、それに加担している節もあるのではないだろうか。クー

データー然り、帝都での首都防衛軍との戦鬪然り、大肅清然り。

(…全く、笑えない話だな。友人一人すら止められやしないなんて。)

彼は心の中で自嘲した。自嘲してからウイスキーのグラスに手を伸ばし一口呑んだ。

帝国は議長の性質ゆえに崖っぷちに向けて突っ走りつつある。ケスラー閣、保守、開明文官派閥、地球教、反帝国テロリスト。これらを有能な人材ごと消しとばした結果、帝国の分断は深刻になりつつある。

さらに皇帝陛下が能動的にそれを後押ししていると聞く。もはやこの動きは誰にも止められないのだ。

これから先帝国は一体どうなるのだろうか。分断と敵対が限界まで進み、他人が敵の代名詞として使用されるようになる。そうなつてしまえば帝国は、銀河は。

「あの、尚書閣下？ 何か深刻な顔をされていますが…」

彼の思考は隣からの声で中断された。セルクラエスが声をかけてきたのである。

「あ、ああ。ちょっとした考え方だ。気にすることはない。」

「長い船旅でお疲れなのでしょう。明日からはバーミリオン入りですし、今日は早めに休まれたらどうですかね？」

「いや、まだやることを残しているし休むわけには…ああ、お言葉に甘えて休ませてもらおう。」

彼は一旦断りかけたが、どうも体に酔いが回ってきたのか、視点が安定しないことに気付いたので休むことにした。

「そうですか。私はもう休んでおりますので。おやすみなさい。」

「あ、ああ。おやすみ。」

セルクラエスはそう言つて自室へと戻つていった。

またしてもバーラトは外交的勝利を得た。今度はその存在の根幹である自治条約の改正である。

宇宙暦882年6月25日、バーミリオン星系の総督府が存在するコロニーにてその改正が行われた。

改正された項目はテルヌーゼンの非武装化の改正はもちろんのこと、バーラトの軍備制限の撤廃、旧同盟中央星域に対するバーラト籍船舶の自由通行の容認など、多岐にわたるものであった。

自治条約改正が告知された時、バーラト星系は三日三晩歓喜の渦に沸いた。ABWU Aの土壇場となつた議会では6月25日を祝日とすべしという議題も出てくるほどであつた。

「我々は苦悩を重ねてきた。それも今日という喜びを深く味わい、噛み締め、永遠のものとするためである。」

6月26日の記念集会でのシモンズの演説の一部であるこの言葉は、当時の雰囲気を端的に表す言葉として定着するに至つている。

ともかくバラトはまたしても勝利した。これが銀河にどのような影響を与えるのか、そしてその結果がどのようなものに行き着くのか、今はまだ誰も知る由もない。

薔薇のオーディンにて

帝国本領でも有数の都市惑星であるオーディンは薔薇の都とも呼ばれるほどの惑星である。その名前の由来としてかつて新無憂宮と呼ばれていた王立博物館に隣接する皇女アグネス記念薔薇園が存在している。

この薔薇園はゴールデンバウム朝の実質的な最後の皇帝であるフリードリヒ4世が悲劇的な生涯を送り、これもまた悲劇的な末路を辿った妹アグネスが手塩をかけて育てた薔薇園を引き継いで運営していく薔薇園をその前身としており、時を経てその時その時の総督たちの手で拡張されていき、今では現在の英明な総督の手腕もあり王立博物館に並ぶオーディンの立派な目玉ともなっている。

この薔薇園の運営には総督府の他に民間のNGOも関わっており、その由来もグリンメルスハウゼン子爵の家臣団という面白い逸話もあるが…それは後々話す機会があるかもしれない。

さて、そんな薔薇園の畦道を1人の帝国宇宙軍の夏用軍服を纏つた短く切り揃えた若獅子を思わせる金髪の貴公子が何かを探すようにして歩いていた。階級章はその若さ

に不釣り合いな中将の階級章であつた。言わざもがな、キルヒアイス大公子ジグムントである。

「フェザーンよりはマシだが、それでも暑いな…」

ジグムントはポケットからハンカチを取り出して額に流れる汗を拭つた。陸地の六割が砂漠であり、残りもどちらかといえば温暖な気候のフェザーンのねつとりとした暑さに比べればオーデインの冷涼な気候はまだマシであつたが、それでも応えるものがあつた。

やがて彼は薔薇園の中に一つの人影を見出した。それは金髪の、まだ若いあどけなさを残した淑女であり、ジグムントにとつての目的の人物であつた。すぐさま彼は淑女の元に駆け寄つた。

「皇女殿下！ここにいらしたんですか！」

金髪の淑女、現ヴァルハラ星系総督アグネス・フォン・ローエングラム皇女はジグムントの声に反応してこちらを向くと、満面の笑みを浮かべた。

「あら！ジグムントじゃないの！オーデインに来るという噂は本当だつたのね！」

「ええ、この度オーデイン駐留艦隊の副司令官として着任することになりまして。相も変わらずお元気そうで何よりです。」

「貴方も相変わらず元気そうね。昔の悪ガキぶりを思い出すわ。さ、ここじや何だし、博

物館の方で話しましょうか。」

元気闊達な総督はそう言つて白く聳える白亜の城、かつての帝国の政治的中枢であつた建物に向けて歩き出した。ジグムントもそれに付き従うようにして歩き出した。

「それにも、こここのバラはいつ見ても見事ですね。」

ジグムントは一面のバラを見ながらそう評した。彼は何度もここに来たことがあり、そのどれもが彼の25年の人生の中で一番美しいとも言える光景であった。

「オーディンのみんなが力を合わせて作り上げてきた薔薇よ。綺麗に決まつてゐるじやない。」

アグネスは誇らしげにそう言つた。誇張ではない。この薔薇園は確かにオーディン市民全てが協力して作り上げてゐるのだ。それも、「オーディンの守護聖人」と呼ばれた悲劇の皇女が亡くなつたその時から。

(相変わらず変わつていなかつた。)

ジグムントは誇らしげな総督を見てそう思つた。この人は昔から変わつていなかつた。常に他の人間のことを考え、成果を市民に最大限に共有しようとする。そんな気質が、オーディンを帝国本領有数の惑星へと育て上げたのだろう。

「そういえば。」

アグネスは何かを思い付いた顔を見るとジグムントの方に顔を向けた。

「皇帝陛下はお元気にしていらっしゃるかしら。ほら、あの子激務に耐えられそうにない体つきをしているし。」

ジグムントは少し回答に困ってしまった。前任地がフエザーンとはいえ皇帝と顔を合わせる機会はあまりにも少ない。最近、ともすれば数ヶ月前の様子を言うべきなんか、それとも映像の中の彼の様子を言うべきなのか、ジグムントは一瞬迷った後、今朝ホテルで見た皇室放送の内容を言うことに決めた。

「……お元気でいらっしゃるかと。最近は政務の傍らにヴエストパーレ記念大学のオンライン講義に顔を出しているとか。」

「まあ！ 大学の講義にも出ているのね。感心感心。元気そうで何よりだわ。」

「ははは……殿下は大層陛下を気にかけておられるようで。」

「当然よ！ だつてお兄様のただ1人の息子ですもの！ 叔母として心配したくなるのは当たり前です！」

アグネスは力強い声でジグムントにそう言つた。

彼女の兄、亡きルイトポルト大公は彼女と一番親しかつた人物である。活発なアグネスと冷静沈着なルイトポルト。共に遊び、共に学び合つたこの2人はいずれ良き主従にして良き友となると思われていた。そう、かの獅子大帝とキルヒアイス大公のように。全てが変わつてしまつたのは彼女の一一番上の兄、ラインハルト2世に当時の工部尚書

フイリップ・フォン・ルンペンハイムとルイトポルトが行つた皇帝弑逆事件からであつた。一連の弑逆事件の後始末が終わり、皇帝が彼ではなく弟ハインリヒが即位したとき、彼女はルイトポルトの中の権力の亡者を垣間見てしまつたのである。

皇帝になれなかつた腹いせに家族に暴力を振るい始めたのである。初めは妻マグダレナに、そして息子フランツが大きくなると彼にも当たり散らし始めたのだ。

これを聞いた彼女は怒りの感情と共にジグマリンゲン大公邸に押し入つた。

「お兄様！ 言つたではありますんか！ 弱者の心を考慮できなくてはダメだと！ それなのにこうやつて妻や子供に当たり散らし始めるとはいつたいどう言つた了見ですか！」

「うるさい！ アグネス、お前に何が分かるのだ？ あの愚昧な兄を殺し、俺が皇帝となるはずだつたのだぞ！ なのに即位したのはあの意志薄弱なハインリヒだ！ その無念がお前に分かるか！ 分からないだろう！ ここから出ていけ！ 今すぐに！」

このようなやりとりをした後、アグネスはもはやかつての兄はもう銀河のどこにも存在しないことを悟つた。あの朴念仁だが優しい兄の姿は、もう一度と戻つては来ないのだ。

やがて時は流れ、ルーデンドルフと統合派のクーデターが成功するや否や、周囲から彼女に向けられる感情は期待から敵意へと変わつていつた。当然だろう。彼女は野放団な軍拡を掲げる統合派を快くは思つていなかつたのだから。そしてそれはフランツ

1世の即位によつて頂点に達した。

「アグネス・フォン・ローエングラム皇女をヴァルハラ星系総督に任ずる。これは勅令である。」

甥、フランツ1世から軽蔑のこもつた視線と共にその辞令を受け取つた彼女は、何も言うことなく辞令を受け取り、家族と共にオーディンへの事実上の島流しを受け入れた。

そのような経緯があるにもかかわらず、彼女はもう二度と踏むことが叶わないであろうフェザーンの地の皇帝の心配をしているのである。それも、変わり果てた兄の一人息子というだけで。ジグムントの心中は感慨深い気持ちに包まれた。

「それに最近帝都で国家維新評議会の影響力が増していると聞くわ！あの子にあのろくでもない兵営的全体主義思想を吹き込んでいいか心配よ！私の目の黒いうちはあの子をラインハルトの兄上のようにさせてたまるものですか！」

アグネスは声に霸氣と元気を込めて言い続ける。最も、この場にフランツがいたら叔母のこの言葉を鼻で笑つていただろう。

「つと。いけないいけない。熱くなりすぎちゃつたわね。あいつらのことになるとつい熱くなっちゃうんだから。」

「いえ、私は気にしてはいませんよ。ルドルフ大帝の時代じゃないんですし、ここには私

と殿下の2人しかいませんから誰も気にしませんって。」

ジグムントがそう言いかけた時、鐘の音が博物館の方から何回か鳴り響いた。正午を知らせる鐘の音である。

「…ちょうどお昼だし、博物館の方で何か食べていく？こここの食堂の料理、美味いわよ？特別に奢つてあげる。」

アグネスは悪ガキが何かを悪巧みしているような笑顔でジグムントにそう問い合わせた。

「そうですね。ちょうどお腹も空いてきましたし。ご馳走になります。」

ジグムントは自分が空腹であることを自覚し、その上でそう答えた。

(新領土料理も案外いけるな。)

ヴァルハラ星系駐留艦隊副司令官ジグムント・フォン・ローエングラム＝キルヒアイス大公子は新領土料理のハンバーガーとポテトに舌鼓を打ちながらそう思った。

オーディン王立博物館の食堂はルドルフ大帝が見たらぶつ倒れるほどの多様性に満ちている。先程のハンバーガーとポテトはもちろんのこと、ライスとロートミソ・ズツペ（赤味噌汁）を基本とした日替わりの定食、ナンと各種チーズカレー、イタリア料理、果てはシユクルメリまで食べることができるのだ。

これもここに勤務している穩健派地球教徒と彼らのデータベースの賜物であるがこの話は後に持ち越しておこう。

ジグメントの目の前には美味しそうにカルボナーラ・パスタを食べる金髪の淑女がいた。ヴァルハラ星系総督であり王立博物館の管理者でもあるアグネス・フォン・ローエングラム皇女である。

「ね！美味しいでしょ？たまに夫と子供を連れてここに来るのよ。大好評よ？」
「確かに美味しいですね。何度も来たくなる美味しさだ。」

そう言つてジグメントはハンバーガーをもう一口含んだ。こうして外食をするのはいつ以来だつただろうか。遠い昔の光景が思い出される。

彼が味の余韻に浸つているとひとりのいかにも陰湿そうな、しかして精悍な体つきの人間が何名か伴つて歩いてくるのを見つけた。国務省の制服を着ており高位の官僚であることが窺えた。

「…おや、殿下。こんなところでお食事ですか？そちらの方は見かけない顔ですが。」

アグネスは男を認識したのか、食べる手をぴたりと止めて、口内の食物を全て呑み込むと男をぎろりと睨んだ。

「あんたここまで私を見張る気なの？ご苦労なことね。こんなところというのを訂正すればもつと評価できたのだけれど。」

「ルーデンドルフからそう言われていますのでね。危険分子は常に見張り続けろと。」

「危険分子？ へつ、どつちが危険分子なんだが。ストーカーと勘違いされるわよ！」
男は何も言わずに隣のテーブルに男たちと共に腰掛けた。彼はどうやら定食を頼んでおり、割り箸をぱきっ、といい音を立てて割った。

「まつたく、こんな箱モノを維持するだけでどれだけ軍艦やライフルが作れるのやら。」「おっと、総督の前ではそれはご法度だぞ。」

「こりやすまねえ！」

男たちはそのような会話をしながら同じく頼んだであろうウドン、ラーメン、オヤコドンに箸を入れる。

アグネスは慣れた感じの睨みつけるような目で彼らを一瞥すると、パスタを片付ける作業に戻つていった。

「……このあなた。新しく駐留艦隊の副司令官となつたキルヒアイス大公子ですな。」

ジグムントは突然声をかけられて一瞬戸惑つた。この緊張しきつた空気で一体どう答へればいいのか。その悩みはすぐさま氷解された。

「私は国務次官とオーディンの副総督を務めるヘルムート・エアハルトという者。どうかお見知り置きを。」

ヘルムート・エアハルト！ ジグムントの心臓はその名前を聞いただけですぐに早鐘を

打つた。

新帝国暦60年代に急進改革派団体「クロイツナハ市民会議」のメンバーを民兵隊を率いて1名残らず血祭りに上げ、「100日改革帝」アレクサンデル2世を間接的に暗殺した男、統合派のナイフと呼ばれた男がなぜここにいるのか。

(…オーディン総督就任時に送られた、監視役なんだろうな。)

キルヒアイス大公はそんなことを考えたが突如右肩を二回叩かれる感触で現実に戻った。

「…早く食べなさい。さつさと出るわよ。」

アグネス皇女はジグムントにそう耳打ちした。すでに彼女の皿は空であつた。

ジグムントはハンバーガーとポテトをさつさと片付けると、すぐさま椅子から立ち上がり、アグネスと歩調を揃えて食器返却口へと足を運んだ。

「…ルーデンドルフの奴、よりもよつてエアハルトとその部下を監視役に付けたのよ。何かあつた時にいつでも排除できるように。」

アグネスは周りを警戒してからジグムントにそう耳打ちした。やはり自分の予想は合っていたようだ。

「殿下を排除とは…!! 一体奴ら何を考えて」

「奴らにとつて反対者はおしなべて敵なのよ。それがたとえ皇族であつても。…あなた

もさつきので目をつけられたかもしけないから、慎重に行きなさい。」

ジグムントは何かを言おうとしたが止めておいた。ここで彼らに悪印象を与えた後々まずいことになりかねない。

彼は先程座っていた席の位置を一瞥した。かつての勢いは無いものの、未だして鋭い目つきが、ジグムントを射抜くが如く見つめていた。

フランツ1世の結婚狂想曲

一国の主権者たる君主の務めとして国家の主権者として政務に取り組む他に、有力な人物の娘と結婚し、次世代の君主、あるいは柱となる皇族を成し、育てるという務めがある。当然それは全宇宙を支配するローエングラム家にも言えたことであり、一体何を考えているかわからないことで定評のある今上帝フランツ1世でさえも果たさなければならぬ務めであつた。

とりわけ、アレクサンデル2世の直系がアグネスを除けばフランツしかいないということを考えると、後継者の確保は緊急の課題であつた。

新帝国暦83年7月後半、ヴエストパーレ記念大学が夏季休業に入り、皇帝にある程度の余裕が出てきたと同時にこれらのことがヴエルテーゼ離宮にて審議された。

ここで問題となつたのが誰の娘と結婚させるかについてである。フェザーンの大資本家の娘であるか、はたまた閻僚の誰かの年頃の娘であるか、それとも地方の実力者の娘であるか、これについては3時間ほど議論されたが結局国家議長ルードンドルフ上級大将の後妻の連れ子、すなわち義理の娘ソフィアを立后することに相成つた。皇帝との結びつきを強めることでさらなる影響力の向上を図ろうとしたのである。

その後もとんとん拍子で結婚の日時はいつにするのか、どのような形式で行うかなどが決定され、最終的にこれらの議題は皇帝の判を貰うことになった。

8月17日、獅子の泉宮殿にてフランツ1世とソフィアの結婚式が大々的に行われた。

式はそれまでの鬱屈を晴らすかのように豪勢に行われた。危険分子の存在するオーディンから事実上の敵国であるバーラトに至るまで客賓が呼び寄せられ、新しい花嫁と花婿を盛大に祝福した。一種の示威行為としての側面もあつたのだろう。

民衆もこの結婚に歓呼の声をもつて祝福した。

「ハイル・マインカイザー！ハイル・マインカイゼリン！」

「両陛下ともお幸せに！」

「帝国万歳！ローエングラム家万歳！」

美しく磨き上げられた黒塗りのオープンカーに乗った新郎と新婦にそれまでのうざばらしでもするかのように大きな声で祝福の声を上げた。

そのような狂奔と祝福の何日間を終えて、ついに2人は初夜を迎えると…

「…何？結婚して以来皇帝とあまり会っていないだと？」

冷徹な共和主義革命家にして皇后の義理の兄という複雑な立場にこの度なつてしま

まつたロスジエーン帝立大学法学部3回生テオドール・ルーデンドルフは、電話の相手に向かつて訝しむような声でそう言つた。

「ええ。あれ以来陛下とは食事の時以外はあまり会いませんの。会つた時でも私をいかにも嫌そうな目つきで見えてきますし：お兄様、私陛下に嫌われているのでしょうか？」

電話の相手、この度皇后になつた義理の妹ソフィア・フォン・ローエングラム、旧姓ルーデンドルフ、その前の旧姓フォン・ギーゼバウムは清らかな小川を思わせるような綺麗な声で心配そうに義理の兄にそう尋ねた。

無理も無いだろう。折角結婚したというのにあまり会うことなく、会つたとしても嫌そうな目つきで見られることがあつたのならば、誰だつて身内の1人にも相談したくなるものだ。それがたとえ帝国の兵営的全体主義体制に果敢に刃向かう革命家であつても。

「政略結婚というのはそういうものじや無いのか？好きでは無い相手と結婚させられるんだ。最初はそういう反応をしても無理も無いと思うのだが：」

「でも陛下はこれまで好いた女性はいないというではありませんか！もしそうであればあのような態度は取らないはずです！これは絶対何かがあるに違ひないと…」
テオドールはこれまた長くなりそうだなと直感で理解した。妹はいつも真剣な話になると長話になる。あのクソ親父がギーゼバウム夫人と再婚した時からそうだ。今度

は何十分くらいかかるのやら…

「…その、一つ聞くがな。」

テオドールは気になつたことを聞き出すことにした。

「はい、何でしようか？」

「その、下世話な話になるんだがな。陛下の方から何かモーションをかけてきたとかは無いのか？その、例えば…ベッドで共に寝たりだとか。」

まあ必要なこととはいへこういうのを聞くのはどうかと思うが。テオドールは一瞬後悔した。

「いいえ、特に何も。結婚した日からずっとモーションをかけてこないからお兄様に相談しているのではありませんか。」

テオドールは妹の言葉でこれは少しばかしおかしいと少しばかし考え込んでしまつた。

(…初夜すらも行わないとはな。皇太子を作らないという選択肢は親父にとつても、國家維新評議会のクソ野郎どもにとつても、そもそも帝国全体の安定から見ても不都合極まりないものだ。一体皇帝は何を考えている？)

「…お兄様？聞いていますの？もう。お兄様つたら、考え出したらすぐ夢中になるんだから。」

テオドールの思考は妹の声で現実に舞い戻った。

「ああ、済まない。そうだな、あちらから目立つた行動をして来ないのであれば、こちらから目立つた行動を仕掛けるとというのはどうだろうか？ 例え… そうだな。お茶の席とかで皇帝に何か話を振つてみるとか。何事もまず小さなことからコツコツとだ。」

テオドールは我ながら良い案だなと思つた案を3つも歳の離れた妹に披露した。
勉強でも革命でも人間関係の構築でも、まずは小さなことからコツコツとやつていくことが大事である。ドツと一気にやつてしまつた獅子大帝が異常なのだ。思うにクソ親父はそれを分からぬからこそ…

「ちよつと… お兄様！ まだお父様をそのように呼んでいるのですか！ あれほど仲良くしろと申し上げていますのに！」

受話器の向こうから妹の怒鳴り声が彼の耳孔に響いてきた。どうも知らず知らずのうちに口に出していたらしい。全く、肝心な時でこれだ。

その時、ドアが何回かノックされる音が彼の右耳に聞こえてきた。どうも誰かが自分に何か用があるようである。

「分かつてる分かつてる… これから用事があるから切るぞ！」

「用事つて、いつも言つている政治改革の集いでしよう！ あれほど危なつかしい橋を渡るのはやめろと申し上げていますのに！」

「今はその話じやないだろ！とにかく、何でもいいから皇帝に話しかけてみろ！兄さんは忙しいんだ！切るぞ！」

テオドールはそう言つてから受話器をガチャリと乱暴に置いた。
どうも自分に用があつたのはアンナ・アルフベンとかいう新入りの女であつた。

「ああ、もう！お兄様つたら！」

この度めでたく全軍事力の統帥権の総攬者にして、艦隊により全軍人と全臣民を領導せし獅子大帝の後継者たる銀河帝国皇帝フランツ一世、その皇后になることができたソフィア・ルーデンドルフはせつかちに電話を切つた自分の義理の兄に対してそう文句を垂れた。

「でも、お兄様もなかなかいいことを思い付きますわね。」

が、そんなせつかちな兄から皇帝との親密な関係構築についていいアイデアをもらえたのは僥倖であつた。

(確か今日のお昼は陛下も私も暇だつたはずです。)

ソフィアは今日1日のスケジュールを思い浮かべながらそう考えた。思い立つたが吉日。今日実行してしまおう。

ソフィアはすぐさま侍従を呼び、今日の昼に皇帝陛下とのお茶の席を設けてもらうこ

とした。

その日のフェザーンの昼はとても良い日本晴れであつた。フェザーンの夏はうだるようすに暑いのでその日に設けられたお茶の席は獅子の泉宮殿のガラス張りのルーフバルコニーで行われた。

皇后ソフィアの様子は嬉しそうにしている反面、その夫である皇帝フランツの様子は明らかに不機嫌そうなそれであつた。

「陛下、今回のお茶はあるシロン産の茶葉を使用しましたのよ。この茶葉は…」「あのヤン・ウェンリーが愛飲していた茶葉だろ？そんなこと知つていてるよ。」

フランツは素つ気なくそう言つてからティーカップのお茶を飲み干した。

ソフィアは皇帝のそつけない態度に一瞬困惑したが、諦めずに続けることにした。ここで諦めたら元も子もないではないか。

「お、お菓子はチョコレートビスケットを用意しましたのよ。陛下が一番好きなお菓子と聞き及びまして…」

「僕は知らないから全部食べていいよ。」

またしてもフランツは皇后に素つ気ない言葉でそう反応した。ソフィアはこれもいつもの範囲と考え直して次の話題を出した。

「そういえば陛下はあるヴェストバーレ記念大学に所属しているとか。あそこは難関大

と聞きますし…さぞかし猛勉強を」

「あそこはローエングラム家の私塾みたいなものだから。何？さぞかし苦労なされたようですねとか言いたいの？そういうのいるないから。」

フランツはまたまた素っ気なくそう言ってから傍の侍従にお茶のお代わりを求めた。まだだ。まだ怒つてはならない。ソフィアは自分にそう強く言い聞かせた。

「お、お父様は陛下に何か迷惑をかけていいでしようか？お父様つたらものすごい生真面目ですから」

「全然迷惑じゃないね。取り巻きをどうにかして欲しいけど。」

フランツはそう言つてお茶に口をつけた。

「へ、陛下は射撃が得意と聞きました……、今度私にも教えていただけないでしょ」

「そんなの、適当な武官でも探して教えて貰えればいいでしょ。」

フランツはそう言つてお茶を飲み干した。

「へ、陛下は哲学を嗜まれると聞きました……何かオススメの本があつたら教えてもらいたいと」

「そんなの知つて何になるの？」

ソフィアの堪忍袋の緒は切れそうであつた。まだだ。まだ抑えろ。怒るのは今ではない。必死に自分に言い聞かせる。

「陛下はあの太祖大帝についてどう思われ」

「根っこには子供じみた人間だと思うよ。それ以上でもそれ以下でもない。」

「お、叔母が存命であると聞きましたが帝都には」

「あんまり叔母上のことを話題に出さないでくれないかな。何? 新手のいじめなの?」

これまで温厚な人間であつたソフィアだが、ついに堪忍袋の緒が切れてしまった。ソフィアは勢いよく立ち上がり、テーブルをバン!と勢いよく両手で叩きつけた!

「陛下! どういうおつもりですか! 私が何を言つても嫌そうな顔をしてそつけない態度をとる! 私がそんなに嫌なのでですか! 私たちは夫婦でしょう! 何故そんなに露骨に嫌な態度を取るので!」

怒髪天を衝くというのはこのようなことであろう。ソフィアは嫌そうな態度を取り続ける皇帝に対してそう怒鳴りかけた。これが仮に獅子大帝の時代であればその心意気やよしと評されたであろう。そのようなある種の覇気にあふれた怒鳴り声であつた。現に、先ほどまでお茶の世話をしていた侍従がすくみ上がつてしまつてゐる。

フランツ一世はテーブルを人差し指でトントンと鳴らしながら聞いていたが、やがて口を開いた。

「君さあ。一体何のつもり? 予定にないお茶の席を開いたと思えば根掘り葉掘り色々と聞いてくる。何? そこまで聞いて一体何をしたいの? まさか理解者ぶりたいつもり?」

へー、それはご苦労なことで。」

フランツの口調は普段通りのそれであつたが、その言葉の一つ一つには背筋の凍るようなどす黒く、冷たいものが確かにそこにあつた。ソフィアは思わずたじろいてしまつた。

「ち、違います…わ、私はそんなつもりじゃ…」

「違わない。正直言つてさあ。君のその行動、とつても迷惑なんだよ。いや、君の存在そのものが。目障りなんだよ。僕はルーデンドルフの取り巻きどもと世間がうるさいから仕方なく結婚しただけだというのに。こう勝手に動かれて理解者面されちや堪つたもんじやないよ。」

フランツはそういうとすつくと立ち上がり、踵を返してテーブルから離れていった。

「…今後一切、僕には関わらないでくれないかな。迷惑だから。」

皇帝は去り際にそういうと、バルコニーから出ていった。

「どうして…どうして…!!私はただ…私はただ…!!」

皇后はあまりの仕打ちに泣き崩れ落ちた。

「…あなたには何の罪もございません。ただ、ただ、皇帝陛下は大変不憫なお人なのでござります。」

侍従は泣き崩れる皇后に対し、そう声をかけることしか出来なかつた。

予感の秋

「おじさん、おーきーてー！！！もう朝だよ！」

テルヌーゼン進駐の立役者の一人であり、現在溜まりに溜まつた30日ほどの休暇を絶賛消化中のバーラト自治共和国宇宙軍准将、ヘンドリック・ファン・リーベックは、若い女の声で心地よい眠りから呼び起された。

「んん：後5分寝かせてくれよお…」

「後5分つていつたつて、もう10時だよ！」

「んだとお：後5分は国父の言葉だぞお…」

ヘンドリックはそう言つて布団に顔を埋めた。若い女の声はぐぬぬと唸ると、直接的な行動に打つて出た。

「もう！今日は買ひ物に付き合つてくれるつて言つたでしょ！起きなさい！」

刹那、ヘンドリックの周りを纏つていた温かい布団は取り払われ、少しづつ寒くなりつつある外気に彼の体は晒された。もう九月もたけなわでまだ残暑が残つてゐる季節のはずだが。ヘンドリックは明瞭になりつつある意識でそんなことを考えた。

「おい！何するんだよ！こつちはせつかく仕事で溜まつた疲れを消化していようと努力

しているのに！」

「流石に10時まで寝てるのは寝過ぎ！ほら！朝食用意してあるから起きた起きた！」

若い女の声の主、ベアトリクス・ファン・メーベリングは腰に手を当てながらそう言った。彼女はヘンドリックの姪にあたる人物であり、地方に赴任している親元を離れてハイネセンポリスの中等学校に通っている事情から、ヘンドリックが世話を請け負つているいわゆる居候である。

（全く、この世話の焼きよう、誰に似たんだが。）

ヘンドリックはベアトリクスの親、すなわち自分の姉の顔を重ねながらやつくりとベッドから身を下ろした。

「全く、こつちはマスコミ対策やら幕僚本部やらなんやらで疲れているんだぞ。もうちょっと大人を労らんか。」

ヘンドリックはえんじ色のボサボサの頭をぱりぱりと搔きながらそう言つた。

事実、彼はあの6月からあまり休めてはいなかつた。マスコミからは帝国軍を鮮やかな手口で撃退した英雄とアランゼーム中将共々称えられ、連日週刊誌のインタビューやらテレビ番組やら記者会見やらに引っ張りだこはもはや当たり前であり、連日記者会見の原稿をエイカーズ中尉の添削付きで執筆したりすることが習慣となつていた。

一方で幕僚本部でも彼は色々と忙しかった。まずはクロムウェル大将から独断を責められて色々と叱責されたり、しかし英雄と称えられている以上は何かで報いなければならぬいため一階級昇進、すなわち准将へと昇進させられたり、その手続きで色々と忙しかつたりと分身の術を覚えたいと考えるほど多忙であった。

他にもまあ、記念式典に参加したり、シモンズと握手する栄誉に浸らせてもらつたり、普段の仕事をこなしたりとまあ色々とあつたのだが、ここ2、3ヶ月ほどはかなり忙しかつた。それを終えてやつと休暇が通つたのである。体を休めたいのは至極当然のことであつた。

「おじさんつたら起きるたびにそれ言つてるよね。もう聞き飽きちゃつた。」

「うるせー、養わせて貰つているんだ。おじさんの愚痴のひとつぐらい聞け。」

ヘンドリックはそう言つて姪があらかじめ用意してあつたであろう着替えに腕を通していく。どうも外行き用の服を用意してくれたようだ。

全く、どつちが養われているんだが。ヘンドリックはそんなことを思いながらボタンをかけた。

「んで、今日は買い物に行くとか言つていたんだが、何が欲しいんだ?」

ヘンドリックはズボンのベルトを締めながら姪にそう尋ねた。

「えつと、新しいコスメに、新しい靴に、あつ、買って欲しい本もあるんだつた! あとは

新作の服も欲しいし…」

こりやまた金がかかりそうだな。ヘンドリックはこれから財布の中から消えていく給料に思いを馳せて、小さくため息をついた。

「おじさん！ ありがとうね！」

ヘンドリックは姪の感謝の言葉は空知らず、財布の中身を確認して軽くため息をついた。デイナールに換算して三万は確実に吹つ飛んだだろう。

（全く、あいつとんだものを俺に押し付けやがつて。）

ヘンドリックは姉の顔を思い出し、またしても深いため息をついた。

今ヘンドリックとベアトリクスはフードコートのテーブルにいた。ヘンドリックは腹こそ減つていなかつたがベアトリクスが腹が減つたようで、彼女に何かを食べさせるためにここにいるのだ。無論、支払いはヘンドリックである。

「…それについて、服や化粧品の類はともかくとして、お前戦記小説なんて変わったもん買うんだな。」

ヘンドリックは書店の袋の中からかなり分厚いサイズの文庫本を手に取つてまじまじと眺めながらそう言つた。

本の題名は「K · m p f e g e g e n d i e E r d e」。

直訳で「地球に対する戦い」と題された小説で、地球教が銀河を支配した末世とも言える世界で行われる抵抗戦争を描いた戦記物の小説である。ヘンドリックも何回か目を通したことがある小説であり、到底女の子が読む小説とは言えないということはよく分かつていた。

「あー…えつと…言いづらいんだけどね。それ、読書感想文の課題図書なの。」

「課題図書!? これ10巻近くある小説だぞ?」

「ほんの一部でもいいって先生言っていたから、大丈夫だと思う。」

「大丈夫つて…」

瞬間、机の上に置いてある呼び鈴が鳴った。ベアトリクスが待ち望んでいた料理が完成したらしい。彼女は立ち上がって料理を取りに向かった。

「…こいつを課題図書にするなんて、いったいどんな奴が主催しているんだ?」

ヘンドリックはそう言つて本をパラパラと開いた。地球教が自由惑星同盟を乗つ取る場面、大聖戦と呼称された帝国への侵攻、国父率いる対地球教のレジスタンス集団の登場場面、商人となつた獅子大帝による情報戦、旧帝国復活とオリオン腕の人民解放を目指す生き残りの人間たち、地球教内部の過激派：冒頭だけでも中学生の課題図書に用いるものではないということがまざまざと分かる。

「大体この本国父は主役とは言えテロリストになつていいんだぞ。普通はもつとこう、

楊家将とイゼルローン起義とかを課題図書に指定するべきだろう。俺がウエンリスタだつたらそうする。…これを課題図書に指定した奴、いったい何を考えているんだ?」

ヘンドリックは本をペラペラとめくりながら主催者の意図を図りかねていた。今はもう影も形もないが学生時代は文学少年として学校内である程度知られていた男である。多感な時期の中学生に相応しい課題図書を選ぶことなど造作もなかつた。

「お待たせ!あっ!勝手に読んでる!」

そう考へている間に姪がステーキとライスの載つたプレートを持つて戻ってきたようだ。

「ざつと目を通すぐらいいいだろ。減るわけじゃないんだし。」

「ダメだつての!これは私の!返して!」

ベアトリクスはそういうと本を引つたくつて元の紙袋の中に放り込んだ。彼女は袋をそのまま自分の方に寄せ、テーブルの上の料理に手をつけ、美味しそうに牛肉を頬張つた。

「…なあ、ベアトリクスよ。」

ヘンドリックはふと思つたことを姪に聞いてみることにした。

「お前さんの読書感想文、誰が主催している?どこぞのいい企業か?それとも政府か?」「…なんでそんなことを聞くの?」

ベアトリクスは肉を頬張りながら叔父の奇妙な質問に怪訝な表情を浮かべた。

「いや、特にどうつてことないというか、少し気になつたというか。」

いかにも言い訳くさい言葉だな、とヘンドリックは内心自嘲した。

「…おじさんつたら変なの。まあいいよ。確かに人的資源委員会とか何とか先生が言つていたよ。」

人的資源委員会。その言葉を聞いて一瞬ヘンドリックは固まりかけた。確かにあそちら辺は公教育もその管轄内に入っていたはずである。その教育も司つている省庁が主催する読書感想文に、こんな中学生にあまり相応しくない捻くれた本を課題図書に入れたというのか。

…いや、この本の内容をよく知つていれば、今の狂信的愛国の機運が渦巻くこの時世の読書感想文の課題図書としてこの本を入れるのは、逆に考えてみれば「相応しい」と言えるだろう。この本は簡潔に内容を言つて仕舞えば「弱者」が「強者」に団結して立ち向かう本である。レジスタンスや帝国残党をバーラトに、地球教政権を帝国に置き換えれば、これほどいいプロパガンダ教育の教科書はないだろう。

シモンズ政権の人的資源委員長は確か新体制派のフイヒテであつたはずだ。フイヒテは余程の読書家なのだろう。さもなければこのような捻くれた本を読書感想文の課題図書にぶち込まない。

(…そこまでして政府は帝国と戦いたいのか？テルヌーゼンの件でさえ大博打だつたんだぞ？)

ヘンドリックは人的資源委員会、ひいてはバーラト政府の思惑が何を考えているのかが分からず、ぞつとした。ただでさえテルヌーゼン進駐でも大きな賭けである。大きな賭けであつただけにその反響も凄まじかつた。

なのに政府はそれに飽き足らずそれ以上に危険な賭けを推進しようというのか？わざわざ公教育にさらなるプロパガンダを織り交せてまで？

最悪な事態を想定しなければならないようだ。ヘンドリックはそう思った。どうも俺はどこぞで読み違えてしまう悪い癖があるらしい。最初俺は何回か外交衝突があると踏んでいた。バーラト政府と現在の帝国政府の性質を考えるに、おそらくこのままいくところまで言つてしまえばテルヌーゼンに匹敵する外交問題の連続の果てに：

(帝国との全面戦争、それも80年前の比ではない。それが生易しく見えるほどの、正真正銘の、絶滅戦争だ。)

無論、これは最も悲観的に考えた場合である。ヘンドリックにとつても、杞憂に終わつて欲しい考へであつた。最終的には比類なき国力を持つ帝国が勝利するのは間違いないし、何よりもヘンドリック自身が絶滅戦争に関わりたくないというのが本音であつた。確かに給料のために軍に入つたが、虐殺をするために軍隊に入つたわけではな

い。そんな場合になつたらとつと軍隊なんて辞めてどこぞの星に亡命してやる。ケンタウルス腕方面のあたりが一番いい。

「…おじさん？どうしたの？いきなり固まっちゃってさ。」

横から女の声が聞こえてきた。ベアトリクスの声だ。どうも自分は考えすぎて周りが見えなくなつていたらしい。

「…いや、なんでもない。ちよつと考え方してただけさ。」

ヘンドリックはそう言うと、コップの中に入つていた冷たい水をぐびり、と一気に飲み干した。冷たい水が、考え方で凝り固まつた思考に潤いを与えていく。

(…まあ、考えすぎだな。最悪の事態がそうそう起ころわけではない。こればっかりは読み違えであつて欲しいな。)

ヘンドリックはそう思いながら、ベアトリクスに出発を促し、席を立つた。

テルヌーゼンの立役者ヘンドリック・ファン・リーベックは、ゆっくりと秋の休暇を味わっていた。一抹の不安を胸に。

リツテンハイムの騎行 1

「ちつ、ここもしけてやがるな」

オリオン腕にその勇名を莫大な恐れとともに轟かせている海賊提督、アルブレヒト・フォン・リツテンハイム＝アルテンブルクは部下から寄せられた「収支表」を見ながら据わりが悪そうにそう言つた。

リツテンハイムは現在のところスponサー、即ち『再征服者』の後援の元辺境を中心とした帝国領内でいつも通りに略奪行を展開しているが、ここ最近はどこもかしこも「収入」の入りが悪いというのがリツテンハイムの感想であつた。

帝国の状況を考えればそれは無理もない話であつた。帝国、特に辺境は「血の聖靈降誕祭」から端を発する大飢饉からいまだに回復していかなかつたのだ。バーラトから食料供給と合成食料増産が行われていたとしてもそれは都市惑星とその近辺と言つた重要地帯のみの話であつて、辺境には到底そう言つたものが行き渡つておらず、未だに飢饉の影響が引きずつてゐる有様であつた。

ここ最近のリツテンハイムの略奪はいわゆる「定期便」の様相を示していた。即ち『再征服者』の私掠免状と幾ばくかの賄賂を提示し、現地の総督が民衆から搾り取つたと思

われる財を回収し、また次の星系へ飛んでおんなんじことをやる、この繰り返しであつた。途中でイゼルローンや近隣の軍事基地に通報する総督もいるにはいたが、大抵海賊艦隊の船舶の軽快な船足には勝てず、途中で取り逃すのがいつものパターンであつた。

しかしここ最近は収入の入りが絶望的に悪くなつていた。しかも月が経つごとに減つてゐる有様であり、このままでは赤字は免れないという状況であつた。

「侯、現時点における収入は前回の半分にも満たないではないか。このままだと軍需物資どころか必要最低限の物資の供給すらままならぬ。貴様はゴールデンバウム王朝開闢から続く我ら高貴なる血筋とその下に繋る民を飢え死にさせるつもりか。何か策を考えるべきではないのか？」

彼を苛立たせる要因は収入の低減だけではなかつた。「再征服者」から派遣されたこの偉そうな口を叩く男、シユネツケンハイム元伯爵をはじめとした連絡将校（という名の監視役）たちが結果が自分たちにとつて満足いかないものであるとこのように騒ぎ立てるのである。現にそうだ、そうだとシユネツケンハイムの取り巻きたちが騒いでいる。

アルブレヒトにとつて彼らの存在は不快そのものであつた。あのハイルブロンとかいう伯爵が優秀であるという太鼓判を押したのであるからどのようなものかと期待していたのだが蓋を開けてみればこの有様であつた。結果が自分たちにとつて満足いかないものであるとこのように文句を言うくせに艦隊に何ら利益になるようなことはあ

まりせずそのくせして『再征服者』本部への連絡はしつかりとするという、アルブレヒトにとつてみれば獅子身中の虫、害虫そのものであつた。

もつとも『再征服者』にとつて見れば最低限の任務、すなわち監視任務をしつかりとこなせる人物を選んだつもりか、数少ない人材をやりくりした結果であるが：アルブレヒトにとつてみれば厄介者を押し付けられたという気分であつた。

（くそッ、時代遅れの老害どもめ：：とんでもない野郎を押し付けやがったな。）

アルブレヒトはその手に持つグラスになみなみと注がれたウイスキーを一気に飲み干すと、收支表の上にあたかも重りを置くかのようにだん、と大きな音を立てて叩きつけた。

「黙れ。これでも精一杯なんだよ。文句があるなら帝国政府に言え。」

アルブレヒトはドスの利いた声でそう言い、シユネツケンハイムを睨みつけた。伯爵は一瞬怖気ついた様子を見せたがすぐに調子を取り戻した。

「しかし侯よ、これで精一杯であると言つても、これでは到底軍どころか民を食わすことが出来ぬではないか。これでは蜂起どころか今年を過ごせるかも分からぬわ。」

「知らねえよ。今年は当たりが悪かつたんだ。新領土から穀物でも肉でも何でも買うなりしろ。どうせ金をしこたま貯め込んでいるんだろ？」

「ふむ、侯は略奪と暴虐で国庫に匹敵するほどの莫大な財を築いていると聞き及んだが、

期待外れであつたようだな。」

アルブレヒトはその言葉を聞いて舌打ちをした。こいつ、舌だけはよく回る。この場で斬り殺してやろうかと思ったが辛うじてそのような海賊らしい欲求を我慢した。

「…して、我々再征服者から窮した海賊に一つ提案があるのだが、よろしいか。」「…提案、だと？何か策もあるというのか？」

アルブレヒトは伯爵の言葉に興味を持った。

「もはや知つての通りであるがここ辺境では飢饉によつて財という財が枯渇して久しい。辺境は暴虐なる孺子の後継者どもの艦隊があまり来ない場所であるがこのような場所でだらだらと略奪をして回ると来襲するのは時間の問題であるし、なによりも我々がその前に破産するやも知れぬ。そこでだが…」

伯爵は言い終わる前に取り巻きの一人に何かを囁き、とあるものを渡させた。それは最新式の端末であつた。伯爵はそれを手慣れた様子で何回か操作すると、それを海賊提督に手渡した。

「…艦隊をここより遙か内側、帝国本土に踏み込ませることを提案する。そこならば少なくとも辺境よりも収穫は見込めるというのが再征服者の見解であるが：どうかね？」

伯爵はモノクルを右手で直しながら少し微笑んで海賊提督にそう言つた。

「…帝国本土だと？冗談を言うな！昔なら確かに荒らして回つたが今は勝手が違うんだ

ぞ！それに帝国艦隊に見つかつたら…」

「百戦錬磨の海賊がそのような弱音を吐くのかね？帝国艦隊は都市惑星の近辺の治安維持にかかりきりであり今はあまり動けないだろう。孺子の時代の俊敏さをもはや失っているのだ。海賊にとつてみれば千載一遇のチャンスというわけだ。」

「貴重な艦隊をオーディンかイゼルローンの艦隊に襲われてみろ！不都合を被るのはてめえらもおんなじなんだぞ！」

「貴殿の力量なら壊滅とまではまずいかないだろう。それに帝国艦隊にある程度の打撃を与えたたらその分我らが有利になる。海賊艦隊には戦場を縦横無尽に駆け回る戦法があるではないか。」

ああ、ああ言えばこう言う。この男には何を言つても屁理屈で返されるだろう。殺しておくべきだった。だがここで激昂に駆られて殺してしまつたらどうなる。再征服者は暗殺団を差し向けてくるだろう。長年歴史の影に潜んでいた負け犬どもだ。それくらいは得意だろう。

リツテンハイムは深くため息をつき、一息して従兵にウイスキーを注がせると一気に飲み干し、一息ついてから何かを決心した。

「ああ、良いだろう。そこまで言うんだつたら見せてやるよ。リツテンハイム海賊艦隊の戦い方つてやつをよお。負け犬ども、見てちびるんじやねえぞ。徹底してやつてやる

からな。別働隊のアンスバッハに連絡しろ！ 一路集結を図り帝国本土へと帆を向ける！ 野郎ども！ 炉に火を入れろ！」

かくしてリツテンハイムの末裔たる戦狼の率いる艦隊は、一路集結を図るために前進した。再びその牙を帝国の柔らかい腹に突き立てるために。

ローエングラム朝銀河帝国の大公子であるジグムント・フォン・ローエングラム＝キルヒアイス中将が初めて旗艦「テオドリック」の艦上の人には、まさしくこの時であつた。

「未知の敵艦隊襲来」この報を受け取つたのが僅か七日前であつた。

オーディン駐留艦隊司令長官クルト・マイヤー大将はこの報を受け直ちに艦隊を出撃させようとしたが、その時思わぬ横槍が入つたのである。

新領土方面本領駐留軍司令長官を務める帝国軍の中でも重鎮中の重鎮にして、ルーデンドルフ統合派政権最大の擁護者でもある皇族、キルヒアイス大公テオドール・フォン・ローエングラム元帥が遙々ウルヴァシーから人事にケチを付けたのである。

「高貴なるものは戦場に立つのが義務、ましてやローエングラム朝の皇族は積極的に前線に立つべし」「常にトマホークを携えて前線に立つてゐる問題皇族」「統合派政権最右翼」として知られる彼は自身の後継者である副司令官ジグムントを最高司令官にして出

撃させるべし、と宇宙軍内のシンパを総動員してオーディン駐留艦隊に圧力をかけてきたのである。これは表向きは若くして艦隊司令官となつた息子の箔付けと言うのが主な理由であつたが、その実彼のイデオロギーである「高貴なるものよ前線に立て。大帝のように」に基づいて行うべしとの信念に基づくものであつた。

当然ながら管理者としては優秀だが家族を養うためにあまり問題を起こしたくないマイヤー大将はこれを承諾、「賊軍のオーディン侵攻に備える」名目で数千の艦隊と共にオーディンに留まり、残りの討伐に向かう艦隊司令官にジグムントを据えると言う形に整えた。

「まつたく、あの魚の臓物が腐つたような父上め。このような形で私を前線に出していくとはな。しかも広範な指揮権のおまけ付きだ。」

ジグムントは皇族用に豪奢に整えられた司令官席で不満げそうにしながらそう言った。

「まあなつてしまつたものは仕方ないでしょう。置かれたところで咲きなさいと言つです。」

艦隊参謀長に就任したエルハルト・フォン・トレスクウ少将はにこやかそうな笑みを浮かべながら主君を嗜めるようにそう言つた。この男は「薔薇の皇女」ことアグネス・フォン・ローエングラム総督が目前の人脈の中から用意してくれた自身に協力的な将校

であり、軍事の支えであると同時にオーデインに着任したてで未だに立場が安定していないジグムントの政治的な支えとして機能している男であつた。

「おおむね獅子大帝のようになつて欲しいんだろうよ。昔つからああだ。息子に変な期待をかけている。夢から覚めていないんだ。」

「全く同意でしようが仮にもお父上でしようと。それに殿下は艦隊どころか艦の全てを掌握しているわけではございません。将か兵の誰か聞いていて、お父上の元にすっぱ抜かれたら困りますでしよう。」

「いや、言わせて…それもそうだな。迂闊な発言はやめておこう。それはそうと。状況はどうなつていてる？」

ジグムントは何かを言おうとしたがブリッジの兵員が数名ほどこちらを見ていることを察すると、迂闊な発言を取りやめた。トレスコウがいるからと言つて安心できるわけではない。彼はオーデインと言う見知らぬフィールドに新しく打ち込まれた楔に過ぎないのだ。咳払いをして参謀の一人に状況を求める。

「はつ。敵艦隊は眼下のところシャンタウ星系に集結しつつありとのこと。地上部隊を降下させて乱暴狼藉を働いているとのことです。数は12,000。動かせる戦力のほとんどを動員している模様。」

作戦参謀からの報告を聞いてジグムントはふむ、と相槌を打つた。

「これほどまでの大戦力、間違いなくリッテンハイム海賊艦隊でしような。しかし：シヤンタウまで、しかもこれほどの戦力で切り込んでくるとは。一体全体、どう言うわけでしような。」

同じく報告を聞いていたトレスコウが、率直な感想を述べた。率直な感想に聞こえるだろうが、その目は深い知性を宿し、何かを探ろうと試みているのが窺えた。

「…確かに。かの艦隊は小規模艦隊による散発的な襲撃だつたはず。どこまで行こうが所詮略奪に過ぎなかつた。しかし、これでは…」

「まるで軍事行動、ですな。軍事行動となるとなんらかの基盤がいるはず。ではそれは一体全体なんなのか？」

「…奴は辺境に巨大なネットワークを築いているのではないのか？今まで、これまでもそうであつただろう。」

ジグメントはトレスコウの推理に、今まで通りの見解で答えた。確かに、リッテンハイムは辺境にある程度のネットワークを有しており、そのネットワークを動員すれば集中した艦隊運用もできるだろう。

「確かに、今まで通りならそうでしような。しかし、それでもせいぜい7000あたりが限度のはず。所詮犯罪組織ですから、そこが妥当でしような。」

トレスコウは一通り考え込むと、ジグメントに向き直つて結論を告げた。

「…何かが後ろにいる可能性が高いです。それも、我々が知らぬ、大きな力を持つた何かが。気をつけてかかったほうが良いでしょ。」

「大きな力を持つた何か?…バーラトか?」

ジグムントは昨今新領土で大きな影響力を持ちつつある属国の名を挙げた。確かに、バーラトならこう言つた支援策はやりかねなかつたし、帝国政府以外に大きな力を持つた存在を、彼は知り得なかつた。

「さあ…どうでしょ。私にはこれ以上のことは分かりかねますな。」

トレスコウは若い主君の顔を見つめふふつ、と笑うと、前方のスクリーンに向直つた。

「副司令!・まもなくシャンタウ星系にワープアウトします!」

航法士官が告げる。これより、若い獅子の初陣が始まるとしていた。

「よし!・ワープアウト後全艦に通達!・第一種戦闘配置につけ!・周囲の索敵を怠るな!敵はリツテンハイム艦隊だ!・賊軍だからと言つて決して油断はするな!」

若獅子はその若さに見合はず、テキパキと指示を発した。それは、ある種獅子大帝の再来のように思えた。

リツテンハイムの騎行 2

「頭ア！ついに帝国の野郎来やがりましたぜ！数15,000！本格的な討伐艦隊だ！」
「シャイセ（クソ野郎）！ついに来やがったか！第二、第三戦闘群を向かわせろ！出鼻を挫く！」

アルブレヒト・フォン・リツテンハイム＝アルテンブルク侯爵は毒突きながらとりあえずの対処を行つた。第二、第三戦闘群総兵力5000はある程度の高性能艦で固められており、奇襲攻撃と時間稼ぎにはもつてこいであつた。

状況は完全に一転した。再征服者の要求通り帝国本土における略奪はある程度は成功した。取り付いたシャンタウ星系においてある程度の財貨をせしめるに成功したのである。その数、辺境1星系分の略奪量のおよそ10倍。彼としても満足のいく数値であつた。

だが、その最中である。突如鎮圧に向かつたと思われる帝国艦隊が出現したのだ。その数およそ15000。なんとか抗することができる数であるが、それでも数の優位性は否めなかつた。

なんとしてでもシャンタウに展開している地上部隊をさっさと撤収させる必要が

あつた。幸運だつたのは大体の略奪が既に終わつていたことであつた。が、それでも勝利の宴の真つ最中であり、撤収にはある程度の時間が必要であると見ていた。

さつさと戦利品丸ごと撤収するか、最低でも財貨を載せた輸送船団を後方に送らなければならぬ。さもなくば今後の活動は厳しくなるだろうし、再征服者への上納金すら納められない。

彼は通信兵に別働隊を指揮し、撤収作業の総指揮を行なつてゐるアンスバッハにつなぐよう命じた。

「おいアンスバッハ！地上軍と略奪品の撤収はまだか！」

『今やつてゐるよ！くそつ、フェーレンバッハめ！早く連絡に出てくれ！満足に撤収作業ができないじやないか！』

「チツ！さつさとケツを蹴つ飛ばして輸送船に戻せろ！」

「やれやれ、やはりどこまで行つても海賊は海賊ですな。財貨と宴に目がくらんで軍事行動を大きく遅れさせてゐると見た。」

リツテンハイムは恐ろしい目つきで声のした方向に向き直つた。そこには、やれやれと言つた顔つきのシュネッケンハイム伯がいた。

「てめえ！元はと言えばてめえらが帝国本土に侵入しろと言つたんだろうがよ！」

「ああ、言つたとも。しかしそれは貴殿らの実力を最大限見積もつた上で言つたことだ。よもや地上軍の撤収すらまともに行えない有様だとはな。これでは盟主殿にどう報告すればいいことやら。」

リッテンハイムは思わずシユネツケンハイムの皺まみれの顔を殴り飛ばした。伯爵は思いつきり血反吐を吐いて吹き飛ばされた。

彼の周囲の貴族たちが口々に何をするか、これは反逆だぞ、と喚いていた。

「うるせえ！ 黙つて聞いてりや何もしてねえ癖に喚きやがつてよお！ ケチばっかりつけやがつて！」

リッテンハイムは威圧するような声で元貴族たちを威圧したがそれでも彼らは喚くのをやめないので、やむなく銃を突きつけて黙らせた。

「いきなり銃を突きつけるとは野蛮ではないか……」

「このことは盟主に報告させていただく。何かしらの責があることを覚悟いたせ」

「やはりイルカの子も数世代経てば力エルか……」

取り巻きの貴族たちは口々にそんなことを言つていたが彼は無視することにした。その中で一人だけちがう人物が存在していた。殴られて飛ばされたばかりのシユネツケンハイムであつた。

「…いいのだろうか？ 一軍の将たる者が戦場を見るのを一旦やめて。」

「てめえ…まだ殴られ足りてないようだな。」

「スクリーンを見てみろ。私の言葉の意味をすぐ理解できるだろう。」

リツテンハイムは言われた通りに戦術スクリーンを見やつた。そこには出端を挫くことに失敗し、合計して3500ほどになつた第二、第三戦闘群の両部隊が、散り散りになつて敗走しているところであつた。

「敵もさしたるものよ。ワープアウト後すぐさま陣容を整え、速やかな迎撃態勢を整えた。戦術スクリーンを常に見張つていればこのような損害は未然に防げたはずだ。にもかかわらず、貴殿は他のことに気を取られ、一瞬指揮を放棄した。これがその結果だ。」

「てめえ…なぜそれを」

「先に言わなかつた、か？ 考えられる可能性としてならあつたはずだが。奇襲とは、相手を虚をつきいかに戦果を發揮するかにかかっている。戦譜を見るに、敵はワープアウト後陣形を整える動きをしている。失敗は目に見えておつたよ。そのことを伝えようとしたが：どうも私は余計なことを言つてしまつたようだな。」

伯は取り出したハンカチで血飛沫を拭い、立ち上がりながらそう言つた。その所作は、どことなく高貴なものを感じさせ、元ではあるが帝国の貴族であつたことを窺わせるものであつた。

「侯よ、卿の艦隊はどこまで大規模だろうが所詮は海賊艦隊に過ぎぬ。統率が取れておらず、だからこそこう言つた状況に弱いと見た。だが、卿の艦隊は磨けば光る。これだけの宝、腐らせておくのは大変惜しい上に我々再征服者にとつても著しい不利益になる。…すぐにとは言わないがなんとかして見せようではないか。卿の高貴な血筋にふさわしい、高貴な艦隊にな。」

リッテンハイムは、伯の一世一代の演説を苦々しい目で見つめながら拝聴していた。俺の艦隊が、祖母ザビーネ以来脈々と受け継がれていた艦隊が、弱いだと？侮辱とはい度胸じやないか。今ここでぶちのめして宇宙に放り出して、この星系に漂つている貴族連合軍将兵の屍にまぜてやろうじやあないか！

そんなことを考えていたが、腹心の1人が声を上げた。

「カシラ、ここは素直に要求を呑みやしよう。今の状況、俺たちだけじや厳しすぎやす。使えるものは使うべきでしよう。」

「…でもよ、あいつら俺たちの誇りを侮辱しやがった。」

「でも今は我慢するときでしよう。第一、再征服者の協力がなければ厳しくやす。そうでもしなければヴァルハラにいるザビーネ様やアルテンブルク様に顔向けができやせわ。ここはグッと堪えるやしそう。」

「…………」

アルブレヒトは腹心に不満げな顔を向けると、肩を上げて手を取り払い、伯に先ほど
の平手ではなく握手を求めた。

「不本意だがてめえらの意見に従つてやる。俺たちは何をやればいい？」

「簡単な話だ。縦横無尽に戦場を駆け回る海賊艦隊の十八番を使えばいい。なに、我ら
がやるのは状況を作る手助けだけだ。後は思いつきり暴れればいい。」

「…手助けだけか。心細いな。」

「すまないな。我らとて限界がある。それにだ。」

「なんだ、また何かあるのか？」

アルブレヒトはまたこの貴族が何か余計なことを言い出さないか警戒していた。無
論、怒りは収まつたわけではなく、ふざけたことを言えば殴り飛ばしてやるという算段
であつた。

「（こ）シヤンタウは大義あるリップシュタット貴族連合軍が唯一金髪の小僧の艦隊に唯一
の勝利を収めた、因縁の星域。我がシユネッケンハイム家もここに立つた。勝利の美
酒をもう一杯と行こうじやあないか。金髪の孺子の子孫どもに、高貴なる弾丸を叩きつ
けてやれ。」

「…はつ、訂正させてもらう。やっぱてめえは面白いやつだ。」

侯爵と伯爵は、そう言つてから握手をした。

撃退したはずの敵分艦隊が再度集結を図っている。

キルヒアイス大公子ジグムント・フォン・ローエングラム中将がそのような報告を受けたのは、昼食のナポリタン・スペゲッティにありついているときであった。
 (奇妙な話だな。疲弊も限界だろうに、再度集結を図ろうとするとはな。)

ジグムントはスクリーンを見ながらそんなことを考えていた。

ジグムントとトレースコウら幕僚陣は、リッテンハイム海賊艦隊は度重なる略奪で疲弊しきつており、先ほどの一連の戦闘で完全に疲弊しきつたと考え、後は撤退を待つだけであると踏んでいた。

にもかかわらずである。敵艦隊は再度集結を図るような動きを展開しているというのだ。撤退の準備がさほど進んでいないにもかかわらずである。

「持久戦に移るつもりか…？」

「いや、敵の物資ももはや限界のはずです。そうとは考えにくいでしょうな。」

トレースコウはジグムントの問い合わせにそう答えるとふむ、と顎に手を当てて考え込むようにしてスクリーンを見遣った。薔薇の皇女殿下の信頼厚いトレースコウでさえも読みかねる情勢であつた。

わからない。一体敵が何を仕掛けてこようといふのか。

なぜ疲弊しているのにも関わらず集結なんて真似をしたのか？集結させて何をしたいのか？持久戦か？揚陸艦隊の撤退までの時間稼ぎが？それとも：決戦を挑むつもりなのか？

前二つのパターンはある程度説得力のある推察であった。最後の推察、決戦は：最も考えられないパターンであつた。

帝国艦隊は練度はもちろんのこと、残存物資、火力、そして疲弊の度合いにおいてリツテンハイム海賊艦隊を凌駕していた。対して海賊艦隊の方はと言えば、おそらくはもう限界が近いのだろう。

そんな状態で決戦を行なつてみたらどうなるか。これは火を見るより明らかであろう。

しかし相手はあの高貴な血を持つた狂犬、海賊提督アルブレヒト・フォン・リツテンハイム＝アルテンブルクである。窮鼠猫を噛むと言わんばかりに一戦を仕掛けてくる可能性は捨てきれない。

「：敵がどう動くかわからない以上、下手に動くと大惨事になりかねない。現在の陣形を維持し、しばらく様子を見る。全艦に戦闘態勢の維持を。」
「：相手がどう動くかわからない以上、賢明な判断ですな。」

結局、ジグメントは盾を構えて一旦様子を見ることにした。ジグメントは父上がこの

様子を見たら情けないだの帝国の男なら突っ込めなどと言い出すだらうなと思つたが、そんなこと今の状況においてはどうでもよかつた。

やがて、集結が完了したと報告が入ったとき、続いて一つの報告がジグムントの耳に入ってきた。

「敵艦隊、動き出しました！……こちらに向けて真っ直ぐ突っ込んでできます！」

ジグムントは青い目を大きく見開いて驚愕の表情を浮かべた。まさしく青天の霹靂、信じられないといった報告であつた。頭の片隅に浮かんだ、ありえないと思つていた事態が本当に当たつてしまつた。よもや、我が艦隊に対し決戦を仕掛けてこようとは！「全艦に戦闘準備！主砲射程内に入つた艦から順次発砲せよ！」

トレスコウはジグムントの驚愕の表情を見遣ると、彼の代わりに戦闘命令を発した。いくら皇族とは言え彼はまだ26。大帝は20にして大軍を率いたが、彼の血を繼ぐもの全てに大帝の素質があろうはずがない。トレスコウにとつてそんなことは織り込み済みであつた。

鮮やかな光の砲火が宇宙空間を映し出すスクリーン全面を彩る。それはまさしく命を刈り取る光であつた。優美な艦形を持つ旗艦テオドリックも遅れて発砲した。

艦内は色めきだつていた。帝国男の誉れ、戦場の緊張感に狂喜する者、初めての戦闘に不安と恐怖をあらわにする者、両方を意に介さずに淡淡と処理を行う者、さまざま

あつた。

先ほどの海賊討伐の印象が強い戦闘とは打って変わり、今度は万と万が衝突する会戦、艦隊決戦である。ラインハルト大帝や2世少年帝がいたら狂喜していたことであろう。

ジグムントはその事実に数秒ほど啞然としていたが、すぐに気を取り直して戦術スクリーンを見遣った。見たところ敵は高速で突っ込んでくるように見える。このままいけば左横合いスレスレを通過するつもりだろう。

ヘンドリック・ラン。それは夏にバーラト宇宙軍が見せた機動であつた。ギリギリ横合いを最高速ですれ違い、然るべきのちにターンを行つて敵の後方を迅速に取る。確かにそんな戦術であつたはずだ。

なら、こちらが取るべき戦術は。

「第一、第三分艦隊に命令！ 艦隊を右方面に移動させよ！ 残る艦隊は左方面に移動！ 挟撃を仕掛ける！」

敵の横合いに思いつきり火力という火力を浴びせかけてやる！ 敵が通り過ぎたのと同時に然るべきのちに全速力で前進、態勢を立て直し反転する敵艦隊に相対する。彼の思いついたビジョンはそういうものであつた。

第二、第三分艦隊と書かれた艦群が咄嗟に動き出す。それと同時に第一、第四分艦隊

と書かれた艦群も動き出した。果たして、間に合うのか!? ジグムントの心中はそんなことでいっぱいであつた。

だが、彼の予想は悪い意味で裏切られた。

「敵艦隊、散開!」、このままだと、我が艦隊と衝突します!」

しまつた! 敵はさらに応用してきたようだ! 敵艦隊が咄嗟に四つに分かれ、分裂した艦隊にそれぞれ高速で襲いかかる。衝突は時間の問題であつた。

鋼鉄と鋼鉄が、まさしく衝突しようとした瞬間であつた。ジグムントは、ギュッと目を瞑つた。